
魔法少女まどか☆マギカ 宇宙の真理に反逆せし戦士

爆炎王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか☆マギカ 宇宙の真理に反逆せし戦士

【Nコード】

N6048T

【作者名】

爆炎王

【あらすじ】

ハッピーエンド以外、絶対に認めねえ。誰一人だって、死なせるものか

誓い

なんで、こんな運命を背負っているんだ。

どうしてあんなに傷つき、ボロボロになっても戦えるんだ。

俺は見てるだけしかできなかった。

俺を助けてくれた彼女たちに恩を返せなかった。

だから俺はこの命を、彼女たちくれた命を、対価にして。

つらかったら、泣いていい。一人で抱え込むな。お前には心配してくれる親友がいるじゃないか。

その優しさを後輩に、世界中の魔法少女に教えてやれ。お前がないとダメなんだ。

最後まで一緒に在ろうとしたその想い。親友以上の仲間の為に流した涙、俺は忘れない。

何度も何度も繰り返して、絶望して、それでも変らない未来。己を犠牲にしてまで叶えたかった願い。必ず届けさせてやる。

何よりも自分を想ってくれた親友の為に、己が存在を捨て、天上となる覚悟。そんな哀しい結末は絶対に変えてみせる。

彼女たちを守る。

エントロピーとか、契約とかそんなモンどうでもいい。

俺は人として、男として、カンを返すだけだ。

——人間をナメるなよ。
インキュベーター
孵卵器。

誓い（後書き）

コブラやテツカマン、ウルトラマン、上条さん、アクセラレータ、ボーガー、ミルキィ、川藤先生たちのように最強主人公が鬱フラグを片っ端からへし折る話です。

転生者と創造主（前書き）

ネタバレあり

転生者と創造主

稲尾ジン 男 ? 歳

鹿目剣の転生者。まどかたちを守る為に転生してきた。あらゆる武術や魔法を使いこなす。体力魔力は決して無限ではないので大技を連発したり、長期戦になると疲労が溜まる。極めて暑苦しい性格で、昔のヒーローに強い憧れを抱いている。普段から帽子を目深に被っているので素顔は見えない。

装備

聖剣エクスカリバー…あらゆる闇^{やみ}を切り裂き、光^{ひかり}を齎す。

変形器エバーチェンジング…千変万化する武具。

機甲鎧インビンシブル…無敵の鎧。いかなる攻撃も弾き返すが雷属性と衝撃は防げず、ダメージを受けししまう。

【道具】

ソーマ…インドの飲み物。魔力を少しだけ回復させる。魔法が使えない常人は飲んでもまったく意味なし。

【技】

— 剣形態 —

エンジェルブリング…与えたダメージの割合だけ回復。

聖剣精製…剣を媒体にして、最強の剣を精製する。剣の奥義。

―双剣形態―

グレイプバイン…相手の身体に紋章を刻み込む。紋章の種類によって効果が変わる。

プロンタルスプリット…双剣を同時に振り下ろし、強烈な衝撃波を放つ。

双赫・三千世界…剣の幻影を無数に生み出して攻撃する。双剣の奥義。

―槍形態―

クーゲルシュライバー…突き貫くと同時に爆撃を発生させて焼き払う。決して日本語で訳さないように。

ジリオンゾーン…穂先が枝分かれして敵を刺し貫く。

千烈峰…槍の高速ラッシュ。高速で突きまくるので残像が見える。

メイヘムインペール…槍が四本に分裂し、魔法陣に突き立つ。その後、印を結ぶと大爆発を起こす。

レイ・スラスト…光速の一撃。

シュナーベル・ピラス…様々な槍を召喚する。

ファイナル・エンド…杏子がオクタヴィア戦で用いた最後の技を改良したもの。至近距離から高密度エネルギーをぶちかます。槍の奥義。

―斧形態―

パワーゲイン…力任せに地面を砕き、つぶてを飛ばす。

大撃破…力任せに斧を叩き込む。

魔王グレートプレッシャー…闘気を伴う衝撃波を放つ。

フラカッソ…怒涛の連続攻撃。

大破壊クライシス…全闘気を右腕に集中してぶちかます。使用後、右腕は破壊される。斧の奥義。

―弓形態―

マイトタスラム…散弾のように矢が飛び広がる。

―鎚形態―

スレッジハンマー…相手の守りを壊す技。

トリーズンブロー…三箇所 of 急所を的確に狙う。

鎚皇碎…触れるものすべてを消し飛ばす破壊力を秘めた一撃を加える。鎚の奥義。

―杖形態―

モルトシュラク…魔力を打撃に変えて攻撃する。魔力の総量が高いほど威力も上がる。

―銃形態―

バウンスノーバウンス・バウンド…銃をばら撒き、銃を乱射して跳弾させる。

ラピッドファイア…高速射撃。

アーキレイザー…極端な楕円軌道を描く弾。避けられてもブーメランのように戻るので、後頭部を撃ち抜かれる。

シルバーストレイフ…白銀の猛攻。

エンシエント・クロスダガー…交叉する弾丸。着弾時に高熱の衝撃波を撒き散らす。銃の奥義。

―鎌形態―

デュノ・ドルア…漆黒の刃で切り裂く。

崩魂狩奪…魂を直接斬る。生命活動を行っていない敵には効かない。

ダークスクレイバー…大きく振りかぶり、広範囲の敵を殲滅。

冥翔緋桜閃…魂と肉体を同時に狩る。鎌の奥義。

―体術形態―

エナジーブレイク…生命エネルギーを拳に集中して殴る技。闇属性の敵に効果的。

カングレホ…逆エビをキメる技。

ジャーマンスープレックス…相手の後方に回りこみ、脳天から投げつける。

劈拳…相手の顔面に拳を打ち下ろす。

崩拳…相手に拳を叩き込む。

爆碎衝孔破…右に左に乱打する。

絶壊・爆裂拳…一点を渾身の力でブチ抜く。隙が大きいが威力はスバ抜けている。

ブルーディッシュ・インパクト…全闘気を拳に収束してぶちかます。体術の奥義。

―盾形態―

フランクスシフト…強固な守りを作り、どんな攻撃も跳ね返す。盾の奥義。

【魔法】

イグニート・ダート…炎の怒濤を放つ。炎属性魔法。

ファー・ニス…対象を魔法陣内に閉じ込め、猛火で焼き尽くす。

エクスプロード…火種を飛ばし、それを対象の至近距離で起爆、大爆破による爆風、爆撃で一帯を焼き払う。炎属性最強の魔法。

ライトニング…天空から一条の稲妻を落とす魔法。麻痺効果がある。雷属性魔法。

プラズマシュネル…音速の雷弾を飛ばす。雷属性魔法。

パルスコレダー…雷撃を巻きこす。

エレキバースト…雷撃の嵐を飛ばし、動きを封じる。

ブルーレイル…魔力を伴う雨を降らす。水属性。

アイシクル…氷柱を落とす魔法。凍結効果がある。氷属性。

ヴァル・デ・グラス…氷を発生させ、V字型にして挟み込む。

チリングガイスト…細かい氷を放つ。

オリゾン・エール…地平線から呼び寄せた風が敵を切り刻む。風属性。

シュトルウム・ウント・ドラング…凄まじい風をたたきつけ、あらゆるものを破碎する。風属性最強の魔法。

ドラウトレイライン…光の線を放ち、触れると土が岩の槍となって敵を貫く。土属性魔法の一つ。

マグナ・マイン…大地が爆発し、その力で敵を攻撃する。

ジ・アース…大地がそり立ち、敵を挟み、地の底へと引きずり込む。土属性最強の魔法。

アカンサスサイス…剣の形をした木の葉を相手の周囲に舞わせて、切り刻む。草属性魔法。

シルヴァントピア…大木が刃のように撓り、打ち据える。

ソアグラビティ…超重力場を発生させる。重力属性。

アマ・デトワール…無数の星の力が邪悪を滅ぼす。星属性。

魔弾…無属性の魔法の弾丸。威力は低いが連射ができる。

グランドクロス…聖なる印を切り、交叉する爆撃を放つ。対魔女の切り札。

レディエンスエイル…反撃魔法。光の翼は情けを知らない。

リキュペレイト…状態異常を回復。

ハイリツヒ・ヒール…中級回復魔法。

ロジニクル・リフレックス…魔法攻撃を倍返しする。

魔法少女^{マジカ}…簡易契約。QBほどでは無いが、一時的に魔法少女としての力を得る。

魔力武装…魔力を用いた大規模な罠。四重の陣形を作る。

第一の陣形 ファンタジアワールド…様々な魔法が一斉に発動する。

第二の陣形 ^{ゴレムーズ}巨人創造…土塊の人形が襲い掛かる。

第三の陣形 災いの風…あらゆる状態異常を引き起こす。

第四の陣形 アルマゲドン…劇中では未登場。周囲に超力場を発生させ、押し潰す。

メテオリックスオーム…杖形態の時のみ使用できる最終決戦魔法の一つ。無属性。発動すると魔力を一気に消費するので場の見極めが必要。

アルカディア…時を止める最終決戦魔法。時属性。使うと全魔力を失う。

サンクティオ・ケイジ…光の檻で相手を拘束する。相手が弱っているほど効果が高い。最終決戦魔法の一つ。

【固有魔法】

アリューション・ラーゴウト…^{インキュベーター}孵卵器との契約により、ゾンビにされた魔法少女の魂を肉体へと還元する秘術。魔女化した場合でも有効。もちろん契約は強制的に破棄となる。

【最終奥義】

断斬運命剣・ネガティブクラッシャー…鬱展開を根底から破壊し、最高のハッピーエンドへ導く。

【禁忌】

終末…闇の業。神の僕、狩人すらも滅ぼす。その業の真髄は犠牲。

鹿目剣 男 16歳

稲尾ジンの創造主。まどかと同姓だが関連性は不明。

原因不明の重病を患い、生まれてからずっと入院生活を送っている。既に99回の手術を受けているが回復の兆しは無い。

アニメやマンガが大好きで、特に魔法少女系が好み。妄想や創作に優れた才能を持ち、冒険物の小説を執筆して、いくつかの賞を貰っている。

自分よりも他人の気持ちを最優先とするので、決して自分から告白する事は無い。

最終決戦ではジンと共鳴し、自ら二次元へと降り立つ。

装備

ダンビラ…身の丈より長い刀。重量は凄まじく、切れ味は悪い。斬るというよりも重さで強引に叩き割っている。

戦装束…三国志の武将が着ていたような衣服。

【技】

神速抜刀…抜き身すら見せず、音すらも置き去りする神速の居合い斬り。

斬魔四神剣…東西南北を守る聖獣の力を借りて放つ。秘奥義。

【魔法】

天使の落涙…体力、魔力、ソウルジェムを回復させる。その回復量は他の回復魔法の比ではない。

コネクト
Connect…ジンの元へ剣が呼ばれた現象のことで、正確には魔法ではない。二人の友情が生んだ奇跡に近い。

もう何も怖くない

脳裏を過ぎるのはとある少女たちの姿。

ピンク色の髪をした優しそうな人だった。隣にいた黒い髪の女の子は少し冷たそうな雰囲気があったけど、ホントはとても温かい心を持っていた。

黄色い髪の人はとても面倒見が良くて、何も知らなかった俺を助けてくれた。紅い髪の人には戦いが凄く強くて、俺はいつもその人の背中を眺めていた。青い髪の人は一途で、誰かの為にいつも頑張っていた。

俺は彼女たちと楽しい毎日を過ごしていた。

だけど、ある日を境にそれは崩れた。

魔法少女の本当の正体。契約の真実。インキュベーター 孵卵器の目的。

俺は何もできなかった。

壊れていく彼女たちを、助けて上げられなかった。

俺は何回も彼女たちに守られたのに。

黒い髪の人は何回も時をまき戻して、未来を変えようとしていた。

何回も、何回も、泣いて、悔しくて、それでも未来は変らなかった。
た。

だったら俺が変えてみせる。

このまま指咥えて見てるだけなんて、嫌だ。

今度こそ変えるんだ。変えてやるんだ。

それが俺の、願いなんだ――。

*

周囲の風景は実に幻想的で、珍妙だった。
大小様々なお菓子や不可思議な生き物があちこちに見受けられ、
パーティでもするかのような装飾品まである。
凡そ現実とは思えないがこうて非現実の空間は存在している。
その空間の最深部にこの空間を生み出した張本人が鎮座していた。
お菓子の箱のようなものから現れたものは人形大の、魔女だった。

――Charlotte。

それがこの魔女の名前である。
巴マミはマスケット銃ですかさず殴り飛ばし、引き金を引いて追撃を食らわした。

いつにも増して動きにキレがある。戦いの前に交わした約束が彼女を強く、奮い立たせていた。

「これで終わり！」

リボンで魔女を拘束し、手を向ける。
巨大な銃が具現して銃口が魔女を捉えた。

「ティロ・フィナーレ！」

一発の弾丸が寸分も変わらずに魔女を貫通した。

「やったあ！」

ドーナツの陰に隠れていた美樹さやかが歓声を上げる。隣の鹿目まどかも笑顔を浮かべた。

マミは満足げに笑いかけた時、それは起きた。

撃ち抜かれたはずのシャルロットの口腔から細長い、何かが吐き出された。ファンシーな顔つきのそれはしかし、その容姿には不釣り合いな大口を開く。

突然の異変にマミはもちろん、まどかもさやかもただ呆然と見ているだけしなかった。

凶悪な牙が唾でぬめる。もう間に合わなかった。

ようやく事態を飲み込めたマミの顔が絶望に染まる。だがそれが彼女のできる唯一の反応だった。

「あ……」

牙が彼女の頭を抉る、その瞬間。

イレギュラー
反逆は訪れた。

「——だああああああああああああああああらっしや

ああああああああああああああああああああああああああああああ——ッ！！」

一本の剣がシャルロッテの眉間に突き刺さった。
その衝撃ででシャルロッテは吹き飛ばされ、お菓子の壁に叩きつけられる。

「え？」

マミ、まどか、さやかはいっせいにその剣が飛んできた方向に視線を送る。

『炎』という文字が刺繍された野球帽を目深に被り、白銀に輝く鎧を纏った男。

紅いマントをはためかせて両手に、二つの剣を握っている。

「……本体は、あそこだよな」

男はイスの上に座るシャルロッテの本体を瞥見し、腰を落として二本の剣を構える。

横槍を入れたシャルロッテはファンシーな顔を怒りに歪ませ、男へと飛び掛った。

「グレープバイン！！」

男はシャルロッテの一撃を回避し、更にすれ違い様に斬撃を食らわした。

魔女の身体に何かの紋章のような傷が穿たれる。

「まだまだあ！！ プロンタルスプリットオツ！！」

振り下ろした剣から殴りつけるような衝撃波が迸り、再度シャルロッテを壁面に打ち据える。

「まだ、ダメか……クソッ！ 双赫・三千世界！！」

無数の剣影が男の周囲に出現、間髪も入れずにシャルロッテへと殺到した。

爆音と振動が空間を揺るがして白煙が上がった。

「……………」

男は追撃をかけず、だが油断なく煙の奥を睨みつける。

やがて煙は散っていった。晴れた先にはぐったりとしたシャルロッテがいる。

「……よし。サルクティオ・ケイジ」

男が手を胸の前で組み合わせようとする。バチバチとパルスが弾け飛ぶ。

同時にシャルロッテとその本体が白色の光に包まれて男の延長線上に並んだ。

「セントルス・ハアウト・カジュレ・テレトリア……帰って来い、シャルロッテ……いや、姫野アユ……」

呪文めいた言葉を吐き、ついに両手を組む。

ゴッ、と凄まじい烈風が吹き抜けて男は猛然と疾駆した。

シャルロッテの肉体を貫き、本体の胸部に腕をめり込ませる。

「アリューション・ラーゴウト!!」

まばゆい白色の光が空間を包み込む。まどかたちはその輝きに目を覆うが、ほんの一瞬だけ男の前に少女のシルエットが浮かんだのを見たような気がした。

ややあつて魔女の空間は陽炎のように揺らめきながら消滅する。気付けばオレンジの夕日が照らす病院前に戻ってきていた。

男は地面に落ちたグリーンフィードを掴み取り、まどかたちへの方へ歩んでくる。

へたり込んだままのマミの手にグリーンフィードを握らせ、未だマミのリボンで拘束されたままのほむらを一瞥し、まどかの前で立ち止まった。

しかしその視線はまどかではなく、キュウベえに注がれていた。

「君は……何者だ？ 魔法少女以外に魔女を倒せるわけが……」

「そうだな。でもこうやって倒したんだからそれでいいだろ。んじや、さよなら」

キュウベえの質問をはぐらかし、男はそそくさとその場を後にした。

＊

病院から十分に離れた所で男は盛大にため息を吐いた。

「やべえ、やべえよ！ ついまどつちたちに会えたのが嬉しくて、姿消す魔法使うの忘れたっ。く、正体不明の謎の男、現るってやりたかったのに！ これじゃもうこの手は使えないぜ！」

頭をぐしゃぐしゃとかきむしり、二度目のため息をついた。

「でも、あいつら変わってなかったなあ。まどっちも、安定のさやかも、マミさんも、ほむほむも。淫獣はどうでもいいけど。まあ過去の世界だし、当然かな」

でも、と三度ため息を吐いた。

「バレてねえよな？ あの淫獣、メツチャ俺のこと怪しんでたけど。くっそう、これからやらなきゃいけない事、たくさんあるのに」

「ママゝあの人、一人で何か言ってるよ」

「シーツ、見ちゃいけません」

親子連れに思いっきり見られ、男はビクウツとした。

「と、とにかくやるしかねえ！　せっかく貰ったんだ、魔法少女も魔女も全部救ってやらあ！！」

男、稲尾ジンは拳を天に向けて突き上げた。

もう何も怖くない（後書き）

シャルロットの生前の名前は作者の想像です。

安心しろ

その空間はまるで子供の玩具をぶちまけたような有様だった。人形や絵本などが周囲を漂い、静かなオルゴールの音が響く。

「なんつーか、ほのぼのした風景だなおい」

ジンは後頭部を搔きながらゆっくりと見渡す。クレヨンで描かれた世界は延々と続き、果ては見えない。

今のところ手下が出没しそうな気配もなかった。意のままに千変万化する武具、エバーチェンジングを手甲形態にして右手に填めなおす。

「……風潰しに歩き回るか」

フワフワとワタアメのような道なき道をジンは進む。

温かい陽射しを浴びているとどうしても昔を思い出してしまう。

かつて、彼女たちと共に遊んだ日々を。広場を駆け抜けたあの頃を。

「あー、こんなことだらだら考えるのはらしくねえよな！ やっぱプラス思考でいかねえと」

大声を張り上げたジンに気がついたのか、はたまた気を悪くしただけなのか。風船が割れる音がしてジンを囲うように使い魔の一群が現れた。

その姿は実物大のミニカーのような車だが、コラージュを施したらしく顔やら腕やら何やらが色々と引っ付いていた。

「遊びの魔女の手下。その役割は、友だち。だがどんなに気を惹こ

うとも魔女は相手にはしない。ただの騒がしい玩具だ。そしてその役割を奪わんとする存在が現れた時は、徹底的に駆除しようとする」

ジンはエバーチェンジングを巨大なトマホークに変形させ、振り回してから肩に担ぐ。

それを合図に手下たちがエンジンを唸らせながら突進してきた。

「ほっ」

トマホークを地面に突き立て、柄を足場に大きく跳躍する。標的を見失い、狼狽する手下たちに掌を向けた。

「エクスプロード!!」

一瞬、小さな火種が生じたかと思うと一気に燃え上がり、周囲の酸素を取り込んで大爆発を巻き起こした。大半の手下たちは爆撃と炎の海に飲まれたが、残った者たちは各々の手に凶悪な刃物を作って迫ってくる。

ジンは着地と同時にトマホークを抜き取って構えた。

「っらあああああああああッ!!」

力任せに振り回し、片っ端から触れるもの全てを輪切りにしている。

「パワーゲイン！」

大きく振るかぶってからトマホークを地面に叩きつける。

刃から放たれる衝撃波が地を這うように拡散し、ささくれ立った。鋭いつぶてに穿たれて手下たちは一掃された。

一息つこうと武器を戻そうとしてやめる。風景が変わった。

「来たか……！」

いつの間にか晴れていた空は夜空に変わり、オルゴールの音はただの不協和音になってしまっている。

そして玩具箱の中から魔女が飛び出してきた。

——A t e r i n d e

あらゆる玩具の集合体の魔女。遊ぶ事を自らの身体で体現している。

彼女もまた、己を犠牲にしてまで叶えたい願いがあり、そして傷つき倒れていったのだろう。

「安心しろ」

紅いマントを翻し、トマホークを一振りの長剣に変化させた。

「俺はお前を助けに来た」

帽子を脱ぎ捨て、白銀のヘルムを着ける。

「俺はお前の願いを叶えに来た」

その姿は物語に登場するような一人の騎士だった。

その姿はピンチの時に駆けつける一人のヒーローだった。

その姿は正義を志す一人の勇者だった。

「俺はハッピーエンド以外、絶対に認めねえ」

大丈夫だ

ジンは右足で地面を蹴って走り出した。見る間に魔女との間合いが狭まってくる。

「つあっ！」

魔女が飛ばしてくるシャボン玉を左右に乱れ飛びながら回避した。一気に肉薄して袈裟懸けに振り下ろし、続けてV字を描くように斬りつけた。

「ほっ」

ここで一旦、追撃をやめて飛びずさった。先まで自分がいた空間を魔女の腕が薙ぐ。その風圧だけで背景が破壊され、崩壊する。

ジンは剣を手放して天を指差す。円形の魔法陣が上空に展開した。

「来たれ！ 断罪の雷！ ライトニング！！」

一条の青白い閃光が天を裂くように落雷して魔女の全身を貫く。再び剣を握り締め、痺れて痙攣する魔女に飛び掛った。剣を突き、斬りつけ、乱撃し、拳と蹴りの乱打を浴びせる。耐えかねた防御が崩れて魔女の体力は着実に削られていった。ジンは焦らずに回避と魔法攻撃を織り交ぜて堅実に攻め続けた。

だがついに魔女が反撃に転じ、巨大なハンマーで殴りかかってきた。ジンは迫るハンマーを見、ヘルムの中で不敵に笑った。

大音響と共にハンマーとジンの頭部が激突する。一撃でヘルムは拉げ、頭が吹き飛ばされる、筈だった。直撃時の衝撃で舞い上がった噴煙が晴れると、そこには無傷のジンが棒立ちしていた。ハンマ

「は確かにヘルムを捉えていたが傷一つ、曇り一つつけることすら叶わない。」

それどころか、ハンマーが音を立ててバラバラに壊れていく。

「これが無敵の鎧だ」

ジンは無造作に魔女を蹴り飛ばす。体力は十分に奪った。

「サルクティオ・ケイジ！」

光の檻が魔女を閉じ込める。あの秘術は少々、隙が大きいので弱らせた上で更に拘束しておく必要があった。

「センチルス・ハアウト・カジュレ・テレトリア……！」

掌を組み合わせる。

凄まじい力の奔流が溢れてジンは駆け抜けていった。遊びの魔女の胸にめり込み、掴み取ったものを強引に引きずり出す。

血肉めいたものが一緒に出てくるが、構わずにそれに繋がっている管を引きちぎった。

「アリューション・ラーゴウト……！」

闇を切り裂く光が迸って魔女を優しく抱いた。

呪われた契約に苦しみ、堕ちていく少女を静かに癒していく。

――！

ジンの脳裏に魔女の生前の記憶が流れ込んできた。断片的に、圧倒的に、悲しくも優しい彼女の記憶が。

＊

彼女はただ一人だった。

お母さんもお父さんもいなかった。

ただ一人の親友だけしかいなかった。

「僕と契約して魔法少女になってよ！　そうすれば君の願いを何でも叶えてあげるよ！」

しかし彼女は願いはなく、だが人の役に立ちたくて魔法少女になる事を望んだ。

親友も魔法少女になった彼女に憧れ、今まで以上に、仲良くなった。

しかしそれは長くは持たなかった。

知らされる魔法少女の真実。幼い心にはそれはとても耐え切れるものではなかった。

そんな彼女を支えたのもただ一人の親友だった。

しかしその小さな支えまでも奪われた。

親友は彼女の目の前で魔女に襲われ、そして。

ゴメンね。

こんなからだで。

ゴメンね。

まもってあげられなくて。

かみさま。わたしのおねがいです。

どうかわたしのともだちをたすけてください。

いいこにします。わるいまじょもやっつけます。

おねがいます。

一生懸命に書いた手紙だった。一人で一生懸命、覚えたひらがな。ひらながなを覚えたのもこの手紙を書くためだった。

＊

気がつけばジンは泣いていた。

ヘルムも鎧も武器も投げ捨てて眼前の少女を抱きしめ、大声を上げて泣いた。

魔女になるその時まで手紙を書いていたらしい。何回も、何回も書き直して。

「大丈夫だ、俺が助ける……！ 神様なんか祈らなくなっちゃって、俺がお前も友だちも助けてみせる……！」

嗚咽交じりなので情けない声になってしまった。

「うん、ありがとう。おにいちゃん」

少女の姿が掻き消える。

魂は肉体に還元され、忌まわしき呪いの契約は破棄された。

彼女はあべき場所へ還るだろう。

せめて今は安らかに眠ってくれ。

「……泣いてしまった。俺としたことが」

揺らめきながら魔女の空間が消滅する。

涙を拭きながら野球帽を被り、鎧と武器を回収した。小さく言葉を呟くとそれらは光になって消える。魔法少女の変身機構を参考に
して確立した魔法の一つだ。

「おっと、グリーンシードも拾っておかないと」

地面に落ちているグリーンシードを掴んだ所でフツと影が差した。
誰か来たようだ。

「うおっ!？」

その人物を見るなり、ジンは後ろにひっくり返りそうになる。

「ほ、ほむほむ!？」

風に靡く黒髪。どこか憂いを感じさせる美麗な容貌。玲瓏のよう
な素肌。細い肢体。

服装は魔法少女の衣服だ。

「最速で魔女の気配見つけて、速攻で魔女倒したんだけどな。もう
気付かれちゃったのか。いやあ、ハハ流石だな。んじゃ、この辺で」

サッサとこの場から離れようとするジンだが暁美ほむらは彼を呼
び止めた。

「あなたには聞きたいことがたくさんあるの。悪いけど、付き合っ

てくれないかしら」

「……できることなら？ワルプルギスの夜？の前夜に秘密を明かして、ヒーローの正体はなんと！？ 的なことをやりたかったんだが」

ジンは観念する。

インキュベーター
孵卵器や他の魔法少女ならいざ知らず、ほむほむだけには逆らいたくない。

時間止められたらシャレにならないし、まどっち大好きだし、でもそれバラしたら消されそうだし。

「分かった、話すよ。だけどまどっちたちには内緒にしてくれよな」

どこことなく面影が残ってんだろ？

「まあ、こういうわけだよ。俺はほむほむ以上の反逆イレギュラーなんだ」

ジンは帽子を取った。

正直、まどかたちの前で被っている必要はなかった。ここはジンからすれば過去の世界、しかも世界線すら違う。

「どうよ。俺の顔。どこことなく面影が残ってんだろ？」

この世界にジンを知る者は暁美ほむらを除き、一人もいない。

「あなたは、あの時の……」

ジンは帽子を目深に被った。彼の顔は影で隠されて見えなくなる。まるで自らの存在を消そうとするかのように。

「俺は今日からしばらく見滝原を離れる。外国に魔女化した魔法少女の反応が多々あるからな」

ほむらにグリーンフィードを手渡し、尻についたホコリを払った。

「ママさんの死のフラグは根元からへし折った。だけど、まださやかは安心できねえ。俺が今まで見てきた結末みらいの中でさやかは高確率で魔女化し、そして――」

ギリッと歯を噛み締める。

「ええ、分かっているわ」

「一応そのグリーンフィードを渡しといてくれ。十中八九、拒むだろうが……頼む」

ほむらは無言で頷く。それを見たジンは頬を緩めて笑う。

「できるだけ早く戻れるように努力するよ。じゃあな」

ジンの足元に魔法陣が現れ、次の瞬間には光と共に消え去っていった。

＊

思えば俺はあの時点で反逆イレギュラーだったのかも知れない。

あの日、俺とまどかたちは出会った。孵卵器インキュベーターも神々すらも予想で
きなかった出会い。

いや突き詰めれば俺という存在自体が反逆イレギュラーなんだろう。この世界の正史に俺はいない。絶対にいないはずだったんだ。

だって、俺はモブでしかなく、否、モブですらない。たった一人の男の妄想の産物でしかない。

だけどこうしてこの世界に生まれ、彼女たちと出会い、未来を知り、再び過去へと帰ってきた。

すべては、悲しき未来を変えるため。この物語をハッピーエンドへと導くためだ。

それがあの男の望み。俺と違い、あいつは世界に干渉できない。だから俺に託した。

「任せとけよ。俺がしっかりと最高のエンドに導いてやるから!!」

俺は武器を構え、目の前にいる魔女へと飛び掛っていった。

＊

メリーゴーランドの馬のようなものが周囲を走り、人形がテレビを運んでフワフワと浮遊していた。

その人形たちを蒼き閃光が貫き、次々と撃墜していく。白きマントを身に纏い、握り締めるサーベルで使い魔たちを斬りつける。反撃に転じようとした使い魔たちは、しかし黄色いリボンで拘束されて銃弾に撃ち抜かれていった。

「これでとどめだあッ！」

蒼き少女がサーベルで一際、大きなテレビをサーベルでブチ抜く。墜落していくテレビに巨大なマスケット銃が構えられた。

「ティロ・ファイナーレ！！」

弾丸がテレビを貫通する。

ガシャン、とテレビは地面に激突して碎け散った。回っていたメリーゴーランドも止まり、空間は揺らいで消滅した。

「いやー、ゴメンゴメン。危機一髪ってとこだったね」

蒼き少女、美樹さやかは苦笑いを浮かべながらまどかにあやまる。

「でも驚いた。まさかあなたが教えに来てくれるなんて」

ティーカップを片手にマミは、まどかの危険を知らせたほむらに目を向ける。

「……まどかのためよ。でも彼がいなければ私は一人で戦った」

「彼って、もしかしてあの時の？」

まどかの脳裏にシャルロツテ戦で現れた一人の男の姿が過ぎる。
なぜだろう。どこか懐かしい気持ちになる。どこかで、会ったよ
うな――。

「本意ではないけど、私はこれからあなたたちに協力するわ」

ほむらは静かに宣言する。

まどかは嬉しそうに、マミは微笑を浮かべ、さやかはどこか不満
げだった。

魔女図鑑（前書き）

オリジナル魔女とその手下の記録。
随時更新。ネタバレというか、まだ本編未登場の魔女の説明もあります。

魔女図鑑

【Bernardita】

遊びの魔女の手下。

その役割は友だち。だがどんなに魔女の気を惹こうとしても決して相手にされない。

故に騒がしい車のような姿となって魔女の遊び場を爆走する。

自分たちよりも目立つものを見つけると徹底的に排除し、その残骸を自らの身体に取り込む。

こいつらを倒すためには地味な風体でごまかして不意打ちするのがセオリー。

【Aterinde】

遊びの魔女。

遊ぶ事を体現し、ひたすらに遊戯を貪る。だがつまらないものや、面白くないものは壊してほったらかしにしてしまう。

遊び相手を見つけると付きまとい、拒絶すれば手下に変える。まずは遊んであげよう。そして打ち解けた所で攻撃すれば呆気なく倒せるだろう。

【Зилия】

幸福の魔女の手下。その役割は嫉妬。

幸せや自分たちよりも恵まれたものがあるとそれを奪おうとする。

嫉妬心が極めて強く、些細な事でも簡単に出没してしまう。

だがその奪った幸せは全て魔女に献上するので、自らの心が満たされる事は永久にない。

【Элеонора】

幸福の魔女。

絶対の幸せを欲して多くのものを奪い続けている。通った後には草の根すらも残らない。

長い間、強奪を繰り返しているうちに奪う事が何よりの幸せと感じてしまった。

もはや常に何かを奪っていないければ存在を維持できなくなる。

【Irmgard】

王国の魔女の手下。その役割は防衛。

魔女のテリトリーを犯すものに対し、警告してなおも攻めるものを200m徹甲弾で迎撃する。強固な装甲で身を包み、魔法攻撃を容易に跳ね返す。

【Robertine】

王国の魔女の手下。その役割は排他。

防衛戦を突破したものに対し、機銃掃射を浴びせる。また多様な銃器を操って接近を許さない。

近接戦闘を不得手とするので近付けばなす術がなくなる。

【Judith】

王国の魔女の手下。その役割は鉄壁。

魔女を守護する最後の番人。振るわれる剣は万物を切り裂き、掲げる盾はいかなる攻撃を退け、その勇猛たる心は侵入者を圧倒する。ところが仕える魔女以上の風格を持つ者がいたらそちらへと寝返る。

実は意外と忠誠心は低いのである。

【Sieglinde】

王国の魔女。

今は亡き王国の栄華と栄光に縋りつき、世を渡り歩く。興国のための戦力を掻き集めようとしている。

巻き込まれたものは例外なく手下にされてひたすらに従わせられてしまう。

しかしそもそも国が滅んだのは己の過ちである事を忘れ、他人に罪を擦り付けている限り、安息はないだろう。

自軍への驕りが凄まじく、裏をかくのは楽である。

【Bertrand】

大嵐の魔女の手下。その役割は応援。

嵐を巻き起こす黒雲となり、大嵐の魔女の力を高める。大嵐の魔女と一緒に過ごすことが存在意義。

【Iduberga】

疾風の魔女。二人合わせて大嵐の魔女。

迅雷の魔女は犬猿の仲にして最高のパートナー。強き相手と戦うのが何よりの楽しみ。

相手が強者であれば構わずに戦いを挑んでくる。しかしその根底には本人すらも忘れた悲しみが眠っている。

【Simone】

迅雷の魔女。二人合わせて大嵐の魔女。

疾風の魔女とは旧知の仲。恐ろしいほどまでのシンクロを見せ付け

る。

やはり強きものと戦うのが生きがい。

【D e x t e r】

使い魔。

大嵐の魔女に挑む戦士のサポートをする。

【B r i d g e t】

眠りの魔女の手下。その役割は乳母。

魔女の傍で無骨な子守唄を奏で魔女をあやしている。誰かに妨害されてもすぐに代わりがやって来て、子守唄を絶やそうとはしない。

【E d i t h】

眠りの魔女。

子守唄を聞いて永眠する。現実を恐れて眠り、拒絶しているので魔法少女でも発見は難い。

もし目覚めたらその理不尽に怒り狂うであろう。

【? ? ? ?】

使い魔。

電子空間を彷徨い、波長の合うユーザーやアバターを自らの結界に引き込んで独自のサイトを構築する。

対処法は強制終了させるかウイルスバスターをブチ込むしかない。都市伝説で語られる謎サイトは大体こいつが作り出したもの。波長が合うユーザーのみ、検索すると発見できる。

【???】

使い魔。

自らの結界内に歴史上のあらゆるものの模造品を飾る。自身もオブジェの一つと化して恍惚に浸っている。

【???】

大空の魔女の手下。その役割は風。

悠久の空を翔る一陣の風となり、魔女を更なる高みへ導こうとする。だが自分は一定の高度を吹き抜けるだけで、決して魔女より高く飛ぶことはできない。

【???】

大空の魔女。

穢れた大地を捨て去り、汚れ無き青を求めてひたすらに天を目指し続ける。

はるかな高みから見下す事で自尊心を保ち、自分が選ばれた存在だと妄信する。自分よりも高みに達するものを見つけると発狂する。

【Rebellion】

反逆の魔女の手下。

【Gin】

反逆の魔女。

さやかを幸せにしてやってくれよな

その世界の様子を一言で表すなら、荒野と乱立する朽ち果てた教会。救いと幸せを求め、人在らざるものたちが蠢く。

「幸福の魔女の手下。その役割は――」

ジンはエバーチェンジングをナックルダスターへと変形させて両の拳に填めた。彼の戦意に気づいた手下たちがいつせいに殺到してくる。

「嫉妬」

右拳で異形の手下を殴り倒す。続いて右足を前に踏み出し、肘打ちからの崩拳を繰り出して得体の知れない黒い塊をぶち抜いた。

ジンは手下の群を蹴散らしながら最奥を目指した。方角も距離感も失う空間だが、ジンには魔女の気配を正確に察知する力があつた。

「エナジーブレイク!!」

拳に気を集め、殴りつける。たったの一撃でジンの数倍の身の丈がある手下が吹き飛び、掻き消えた。

「カングレホ！」

人型の手下に逆エビをキメる。人間相手なら苦悶の声を上げる筈だが、手下は抵抗する事もなく消滅した。後味の悪さを感じつつ、ジンは次の手下に立ち向かった。

攻撃を受け流し、背後に回りこんでからのジャーマンスープレッ

クスが炸裂した。

「劈拳ッ！」

素早く起き上がって別の手下の顔面に掌を打ち下ろす。

しかし手下の群は無数に湧き出し、行く手を阻んだ。

「ち、数が多いな。一気にケリをつけるか！」

ジンは手下を踏み台にして大きく飛び上がった。両手で天と地を指し、円を描く。煌きながら回転する円から極寒の吹雪が溢れ、手下たちの周囲に結晶が生まれた。

「絶望の絶氷は怨敵と共に凍てつく。永久に、永久に——アブソリュートゼロ——！」

一瞬、大気が震える。

白銀の巨大な氷塊が手下たちを飲み込み、更に大きくなっていった。白き呪縛は瞬く間に空間を凍りつかせる。気付けば手下の一群は二度と解けない氷に閉じ込められていた。

ジンは着地する。飛び上がってから降り立つまでの所要時間は数秒。その数秒の合間に勝負は決まった。

「これが、俺の力……」

己の掌をジッと見つめ、拳を作る。

魔法少女たちが命がけて討伐する魔女やその手下をいとも容易く蹂躪し、蹴散らし、滅ぼせるこの力。

その逆も然り。

倒し、殺し、生まれ変わる。その呪^{けいやく}から解き放ち、再び人として

の生を歩ませる。

「――来たか」

ビリビリと肌に伝わる魔女の魔力。自然とジンの闘争本能が際立ち、武者震いした。

「腹あ、くくれよ」

ジンは目を細め、臨戦態勢に入った。

＊

ジンと魔女は幾度目になる激突をした。衝撃が全身を衝き、骨が軋む。

最強の鎧といえど衝撃までは消せない。一度、二度ならまだしも何回も揺さぶられれば脳に来る。

「手強し、か」

ひとまず距離を取って魔女の出方を伺う。見上げるほどに大きいその魔女は今まで出会ってきた中でも最大級だ。

不気味に光る三つの赤い瞳、頭頂部には長さも形状も様々な角が出鱈目に生え出し、むき出しの脳髓、巨体を包む甲殻は毒々しい紫色をしていた。上半身はまだ人の形を保っていたが下半身は長虫のそれであった。

かはあああ……

魔女が長い吐息をする。瘴気の量がいや増し、ジンを圧倒した。

「フン、そんなモンで!!」

ジンは地面を殴りつけた。衝撃が走り、床が割れ砕ける。本来は地割れで敵を飲み込む技だが、あの体格では効果は発揮されない。むしろ狙いは走った地割れの左右で隆起した岩である。ジンは跳躍し、ささくれ立った岩を踏み台に更に高く飛び上がった。

「喰らえ!! 爆砕衝孔破アッ!!」

二つの円を横に連ねたような動きをしながら、体重移動をそのまま攻撃に転化して、右に左に拳を叩きつける。

魔女の角でもっとも長く太いものに手をかけ、逆上がりの要領で空中に身を躍らせた。

「続いていくぞ!! グランドクロス!!」

祈りを込めて十字を切った。轟音を上げ、交叉する爆光が炸裂して魔女に聖印の焦げ目を刻む。

魔女は忌々しげな呻きを上げた。

「まだまだあ!! 絶壊・爆裂拳!!」

降り立ったジンはすかさず、突っ込んで行った。力強い踏み込みと共に、腰を深く落としてつつ振じり、捻り込むように拳を打ち込む。腰から肩、腕、拳と伝わった螺旋の衝撃が、魔女の胴を貫いた。弾けた甲殻の中に深々とめり込んだ腕を引き抜くと、紫の血と鮮明な体液が迸った。それを軽やかな足取りで避けて次なる攻撃に移行する。

「これで、終わりだ!!」

ジンは魔女に向かって飛び出す。振り下ろされた敵の爪をギリギリで掻い潜り、逆に相手の腕に飛び乗る。そして魔女の腕を駆け上っていき、自分の身体よりも大きな魔女の顔面に拳を繰り出した。唸りを上げて突き出されたもう一方の腕に、拳を叩きつける。姿勢の制御のしようがない空中でも、足掛かりがあれば別だ。拳を支点に相手の腕に着地したジンは、最後の跳躍をした。

尋常ではない高みに達したジンの前に、無防備に晒された魔女の胸板がある。

「ブルーディツシュ・インパクトオオオオオオオオオオ!!」

垂直に突き込まれた拳は、硬く閉じられた甲殻の継ぎ目に、正確に潜り込んだ。

すぐさま重力が彼を捕らえ、上昇は落下に転じる。刃のような闘気を纏う拳はそれに従い、易々と魔女の肉を断ち割って切り裂いていった。

がぁはぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……

長く尾を引く苦悶の声。ジンの猛攻を防ぎ続け、耐え抜いた巨体が初めて傾ぐ。

「帰って来い……サンクティオ・ケイジ」

光の檻が魔女を封ずる。崩れかけた肉体は光の中で最後の抵抗なのか、隙間から肉片を滴らせる。

「センチルス・ハアウト・カジュレ・テレトリア!」

両掌の内て凄まじいエネルギーが荒れ狂う。それを強引に押し込め、掌を組み合わせた。

ジンは雄叫びを発して弾かれたように疾走する。両手は寸分も違わずに先程、与えた傷口に突き刺さった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

掴み取ったそれを体内から引きずり出して抱きとめる。

「アリューション・ラーゴウト！！！」

光が、荒れた世界を包み込んだ。

＊

少し、前の事である。

夜風が吹き抜ける鉄塔にジンは一人、見滝原の夜景を眺めていた。紅いマントが風で翻ってバタバタと音を立てる。

口にタバコ（駄菓子屋で普通に買えるただの玩具）を咥えて吹かしていた。

「よお」

紫煙が風に吹き散らせるのを見ながらジンは背後に現れた気配に話しかける。

「話って何だよ」

どうにも不機嫌そうな返事が返される。

「この街に新しい魔法少女が生まれた」

「ふーん。でもさ、マミのテリトリーだろ」

「彼女たちは親友だ」

ジンはタバコを投げ捨てて振り返った。

そこにいたのはクレープを片手に持った紅い髪の少女。かつて別の世界の未来で共に戦った、仲間だった。

「そこで、頼みがある。どうか彼女たちと共闘して欲しい」

「はぁ？ 何を言い出すかと思えば……」

「もちろんただとは言わない」

ジンは指を鳴らすと数個のダンボール箱が積み上げられる。

「食料詰め合わせ一年分。りんごもポッキーも、何でも入っている」

「……お前、何者だ？ 何でそこまでして」

少女が怪訝そうに睨む。

「正義のヒーロー、を指摘すしがない男だよ……頼む……さやかを守ってやってくれ」

片膝をつき、深々と頭をたれる。

「わ、分かったよ。だから頭、上げてくれ」

「へへ。そう言ってくれと信じてたぜ。やっぱあんこはいい奴だよなあ」

「な、あんこって何だよ！」

「俺が勝手につけた愛称だよ。じゃ、任せたぜ。さやかを幸せにし

「やってくれよな！」

あんたたちの、仲間に入れてくれ

とある裏路地のような場所でその空間は発生した。

魔女を探して市街を歩いていたら、運よく遭遇できたらしい。彼女はその力を顕現させて変身した。

制服姿から動きやすい軽装に衣服が変化し、白いマントを纏う。

「ブウウウウウウン！ ブウウウウウン！」

不気味な奇声を発して使い魔は、奇妙な乗り物に乗って空間を縦横無尽に飛び回った。使い魔は彼女たちには目もくれず、そのまま何処かへと飛び去ろうとしていた。

もちろん見逃すつもりはない。

自分の身体をマントで包む。周囲にサーベルが召喚され、彼女は次々と使い魔にサーベルを投げつけた。

使い魔は奇声を上げながらもサーベルを避けていく。だが二本の剣が眼前に突き刺さり、ついに動きを止めたかに見えた。

残るサーベルを投擲、命中する寸前で使い魔は行く手を遮るサーベルを弾き飛ばして逃げようとする。

「逃がしちゃう……！」

新たな剣を召喚する余裕も、仲間の魔法少女を呼ぶ時間はない。焦る彼女らを尻目に、使い魔はそのまま逃走しようとして――。

「何やってんのさ、アンタたち」

閉じようとする空間を突き破るように一本の槍が使い魔を貫いた。使い魔は空間と共に消失、彼女たち――まどかとさやか――の前

に一人の少女が降り立った。

たい焼きをかじり、肩に槍を担いでいる。赤を基調とした衣服と紅い髪の毛、そして紅い瞳。

「グリーンシードも孕んでないような使い魔、倒してもしょうがないんだけど。あいつとの約束だしな……」

トントンと槍で肩を叩く。

グリーンシード持って無くてもちゃんと倒してね、さやかとは仲良くしてくれお願いだから、喧嘩ダメ、素直になってよ、など色々と言われたことを思い出して苦笑した。

「あたしは佐倉杏子。いきなりでアレだけどさ、あんたたちの仲間に入れてくれ」

「え？ ええ?!」

「あの……」

さやかもまどかも突然の出会いに困惑していた。

「と、とりあえずマミさんに連絡して……」

「その必要はないわ」

「ひゃっ!？」

いつの間にやって来たのか、まどかの背後に暁美ほむらが立っていた。

それに驚いたまどかはしりもちをついてしまう。

「佐倉杏子、あなたも稲尾ジンの呼びかけに応じたのね」

「あいつのことを知ってるのか？」

「名前くらいしか知らないわ」

さやかに助け起こされたまどかはほむらと杏子を交互に見、尋ねる。

「えっと、それで杏子ちゃんも一緒に来てくれるの？」

「そうだよ」

杏子は懐からポツキーを取り出して、まどかとさやかに差し出す。

「食うかい？」

＊

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!？」

大慌てで逃げ回るジンの周りで派手に火柱が何本も上がる。

「なんつー手下と魔女だよ！ 戦争でもやらかす気かあ!？」

その世界は折れた剣や死屍累々の戦場。荒涼の大地は吸い上げた鮮血で紅く染まり、地平線に沈む太陽は巨大でどこか虚ろだった。

死臭を含む風はねつとりと生ぬるく、立っているだけでも体力を奪われそうな気がした。

そんな重苦しい空気を切り裂く轟音、高空から降ってくる質量を伴う音響、ややあって着弾して派手に土と爆風をぶちまけた。

ジンは放物線を描きながら飛んでくる弾丸を避け、先にあるそれを改めて見直す。

「幸福の魔女もなかなかなのでかさだったが……こいつはさらにその上に行くのかよッ」

戦場に聳える灰色の巨大な城塞。火炮に対抗する為にイタリアで発生した星型している。多くの稜堡を有し、通常の城壁よりも防御性が増していた。

加えて複雑な構造を構成する為に角堡と呼ばれる外塁が設置されていた。

城壁は低いが分厚く、砲弾で碎けないように土とレンガを含む材料で作られている。星型の各点には火炮を遮蔽し、城壁の脆い部分を守っていた。

「攻めるのに難く、守るのに易しとはこの事だよな。骨が折れるぞ、こいつぁ……」

恐らく土塁も用いてるだろう。砲撃系の魔法は通じないと見ていい。

なんせこれは魔女だ。城塞の姿をして、数千の手下に従えた魔女なのだ。

「どこから攻撃しても火炮で迎撃される……防壁を吹き飛ばすにはこの魔法しかない」

エバーチェンジングを変形させる。

ジンの背丈よりも短い、一本の杖になった。ごつごつと節くれた杖の杖の下端を地面に突いて、手を胸の前で組んだ。

「深淵たる闇の律動。祖は幾許の破壊を刻み、幾度となく再生するだろう。我、今こそ彼方の星々を招く無音の意思を伝えん」

ジンの足元に円形の魔法陣が展開する。線と線、文字と文字が交わり、より緻密な図形を成していく。

「血の盟約に応じよ。その王の名に於いて我が剣となりて贅を喰らえ」

暴力的な魔力が充溢し、ジンの双眸が魔性を帯びた。結界で生まれた世界が震える。

「我が身は魔。我が心は獣。我が血は魂。光と闇の鍵を振るい、開け暗黒の門。天地人の理は今、崩れん」

続けて結界の上空に巨大な星図が描き出された。ルーン文字や象形文字、図形が現れては消えていった。

「五つの星、六つの太陽、三つの銀河。暗き天は狂乱し、闇の公子の光臨に狂喜する」

不意に魔法陣と星図が消えた。

そしてこの世界から音が消えた。

手下の砲撃の爆音も、大地を砕く音も。

「我は汝を歓迎しよう――」

水を打ったような静けさの中、ジンは最後の言葉を呟いた。

「――メテオリックスオーム」

刹那、白い光が全てを飲み込んだ。

＊

例えるなら圧倒的な力が荒れ狂ったと言わべきか。

大地は抉り取られ、焼き尽くされていた。未だに炎が燃え残った残骸をチロチロとなめずっている。

魔女を守っていた城塞は消し飛び、辛うじて生き残った手下たちが最後の壁だった。

「はぁ……はぁ……ンちくしょうめ……」

大量の汗を拭い、ジンは荒い呼吸を繰り返す。杖に縋る事で何とか立っていられる状態だった。

魔力が枯渇している。先の魔法で根こそぎ持っていかれた。

「こいつを、は、早く……!」

痙攣する手でポケットから小瓶を取り出した。中身は虹色の液体で満たされている。

インドの商人から高値で買った、魔力を回復させる薬^{ソーマ}だ。蓋を開けて呷る。甘いような酸っぱいような味がした。

「ぶはぁ……」

長々と息を吐く。呼気が整い、魔力もある程度回復した。

「さあ、第二ラウンドと行こうか! 王国の魔女オ!!」

ジンは杖を構えて走り出した。

警告音を鳴らしながら残存する手下が行く手を阻む。見た目は戦車だがキャタピラの部分が人の足になっていた。

「王国の魔女の手下。警告をした後、200mm徹甲弾の砲撃を放

ってくる。またその装甲は魔法攻撃を弾く」

砲口が一斉に閃き、砲弾が飛んでくる。

瞬時に弾道を見極めて僅かな隙間を突き、かわしていく。

「だが物理攻撃には無力！ モルトシュラーク！」

檜の杖を力任せに打ち込んだ。ベコン、と装甲が拉げて爆発した。手下は黒煙を濛々と噴きながら沈黙する。

突き進むジンの前に別の手下が立ちはだかった。両手に装備した機銃を照準も合わせずに乱射してきた。

「邪魔だあ！！ ドラウトレイライン！！」

杖を地面に向ける。細かい光の線が走り、手下の一群に触れると大地が盛り上がって、鋭い岩の槍に貫通された。散らばる残骸を踏みしだき、更に奥へと進む。大方の残党は全滅したのだろう、邪魔をするものはいない。

暫く走っているとついに、魔女が肉眼で確認できた。既に弱っているの**で秘術アリュージョン・リーゴットを使える。**

しかし最後の手下がジンを阻み、手にした剣で斬りかかってきた。杖で弾き返し、反撃といわんばかりに殴りかかるが盾に受けとめられた。

「ちっ、強い！」

回復した魔力は限られていた。無闇に魔法や技を連発すれば再び魔力切れを起こす危険がある。もう回復薬ソーマはない。

「こうなったら手下もろとも、ブチ抜くしかねえ！！」

光の檻が魔女を閉じ込める。両手を組み、聖なる力の嵐を総身に漲らせた。

最後の手下は盾でジンの突撃を止めようとしたが、盾は一瞬で碎け散り、自身も貫かれて霧散する。

横たわる魔女の胸部に手を突き込んで掴み取ったそれを体内から引きずり出し、呪^{けいやく}を破約させる。

「アリューション・ラーゴウト!!」

＊

結界が消滅した。

カラン、とグリーンシールドが人気のないヴェネツィアの道路に転がる。

「久々に疲れたな……」

グリーンシールドをポケットにしまって縁石に腰掛けた。マントで身を包み、疲弊した身体をゆっくりと癒していく。

「君が稲尾ジン、だね」

唐突に声をかけられた。

この喋り方は、嫌と言うほどに知っている。

「俺に、何の用だよ。^{インキュベーター}孵卵器」

ジンはポツリとその名前を口に出した。

いつでもかかって来い

底冷えする夜風が吹きぬける。熱を持っていた身体も今は冷え切り、重い疲労感に苛まれていた。

マントで暖を取りながらジンは白い生き物を睨む。

「今日は疲れた。寝させろ」

「別に話をするつもりは無いよ。ただ暁美ほむら以上の反逆がここの世界に紛れ込んだと聞いたからね。確かめに来たのさ」

「ああ、そうだな。自負してる」

自嘲気味に答えて軽く手を振る。

「一つだけ言っておくけど、君がどんなにがんばっても何も変わらないよ。まどかは魔法少女になる。それが僕の役目だからね」

「……クーゲルシュライバー」

ジンのエバーチェンジングが長大な槍に変化し、インキュベーター 孵卵器の頭部を貫く。

同時に内部から大爆発して紅蓮の劫火と火柱を上げた。爆風と衝撃が石畳を破壊して建物の壁面を吹き飛ばした。

「滅多なこと言うんじゃない。俺はあいつらが好きだ。だからこの世界の正史に割り込んだんだ。テメエのくだらねえ姦策はとつくに露呈してんだよ」

赤々と燃える炎が彼の顔を照らす。周囲には閉鎖鉄鎖（一種の結界魔法。これに覆われた一帯は別の空間となるので何をしてもちちらの世界には影響されない）を張り巡らしてあるから問題ない。

「ちっ、興ざめだぜ。サッサと次の国に行くか」

立ち上がり、エバーチェンジングを手甲に変えて右腕に填める。
炎に背を向けて去ろうとする彼に、それは嘲笑うかのように現れた。
巨大な満月に浮かび上がる不気味な影は、どこことなく子宮を思わす
形だった。

「ムダだって知ってるくせに」

紅く光る双眸も語気も平淡としていた。ゾツとするほどに、それは感情の起伏がなかった。

「そうかな。テメエの本体を突きとめりゃ、一撃だろ？ 分かってンだよ。弱点くらい」

振り返らず、背後にいる気配に告げる。

「こちとらテメエの母星と死合う覚悟も決まってンだぜ。いつでもかかって来い。相手になってやる」

ジンは足元に魔法陣を描き、無数の粒子と共に消え失せた。

断章 転生者

意識が芽生えた時には私は既にここにいた。

冷たい雨が身体を叩き、ひどく寒い。助けを呼ぼうとしたが、かすれたような声しか出せなかった。どうしてここにいるのか、私は思い出そうとしたが頭は霞がかかったかのようにぼんやりとして、うまく働かなかった。

募る焦燥感を振り払い、今の状況を確認する事にした。

目の前を濁流となった川が轟々と流れる。空は曇天で、暴風雨が猛威を振るっていた。街は水煙によって閉ざされ、一寸先も見えない。

とにかく早くここから逃げたほうがいいと思う。

私は豪雨でボロボロになったダンボールの箱の中から飛び出し、必死なうって走った。

ハッハッと荒い息遣いを繰り返し、両足を繰って逃げようとした。どこへ、なんて知らない。でもここから逃げたかった。

暫く走っていると不意に、後ろ足を掬われる。もちろん私は対処できるわけもなく、無様に転んだ。ごつごつした川原で派手に転んだお蔭で激痛が全身を襲う。それでも何とか振り返り、足を掴むその何者かを視界に収めた。

地面から無機質な手が一本、飛び出して私の脚を掴んでいた。その手の後ろには石膏像が直立している。生気を感じさせない双眸がしっかりと私を捉え、クッククックと嗤った。

気付けば周囲の光景も変わっている。あの暴風雨も濁流も、ない。そこは川原ですらない。

上も下も関係ない異様な空間。絵画、石像、得体の知れない美術品が狂ったように舞っている。私は滅茶苦茶に暴れて足を掴んでいる手を退けようとした。

が、それは叶わなかった。

いつの間にか私は巨大な額縁の中にいた。
額縁をぶち破ろうと体当たりをかますが、透明の硬質な何かには
じき返される。

——Ernesta

弾かれた衝撃と痛みで蹲る私を嘲笑うかのように、石膏像が哄笑
した。

石膏像の前に現れた文字は、名前なのだろうか。自分の正体すら
も忘れたのに、知らない文字だったに、私はこの文字を知っていた。
読むことができた。

エルネスタ、と。

意識が薄れ始める。直感、なんだろうか。命の危険を覚える。

どういうことだよ。

知らない街にいて、記憶も声もなくして、挙句に殺されそうにな
るとか、ふざけんな。

このまま何も知らないまままで死ねるわけが、ない！

私は両手で身体を支えながら立ち上がる。だがこちらは丸腰、服
すら着ていない。

どうすれば……。

反撃の手を考えていた私は、いきなり首を絞められた。

「——ッ!？」

ぬかった。

考えに夢中で、近付いてきた石膏像に気付かないなんて。
今度こそ本格的にヤバイ。息が——。

「あ……」

暗闇に沈んでいく意識の中、震える手を虚空に差し出す。
誰か、助け——。

「大丈夫だよ」

温かい、手が確かに握り返してくれた。淡いピンク色の光が瞬いた。

＊

ジンは勢い良く飛び起きた。
古びたベッドが軋む。

「なんだ！？　今の夢は……！」

外はまだ薄暗く、肌寒い。しかしありえないほどの汗をかいている。シャツまでが汗で湿っていた。

「俺以外にこの世界の正史に割り込んだ奴がいるのか！？　そんなバカな！」

この世界の中心は見滝原。

正史では、主となるまどか、さやか、杏子、ほむら、マミ、QB
が繰り広げる哀しい物語だ。

そして反逆者、稲尾ジンとその創造主が大罪と知りながらも物語
に介入した。それによって物語は想定しなかった方向へと向かい
つある。

巴マミの生存、シャルロッテを含む魔女たちの解放、美樹さやか

と佐倉杏子の変化、曉美ほむらの協力、そして鹿目まどかの運命。

「俺の知らないどこかで、何かが動き出したのか？」

世界の干渉と介入。

それは一部の、限られた存在が可能とする力。その存在は自分の分身ともいえる、転生者を生み出す事ができる。

転生者は極めて強大な力を誇り、正史を書き換えることなど容易い。

稲尾ジンはある男の妄想から生まれた転生者だった。その男の願いは、魔法少女まどか☆マギカの世界をハッピーエンドへと導く事。

「俺以外の転生者は全員、把握していた筈だ」

ダークストライカー、沢村セイジ。

ブレイブアーマー、景浦ソウスケ。

異世界人、野村タクヤ。

灼熱爆炎の討ち手、張本キンジロウ。

管理局の尖兵、王マサノリ。

ノーマル、榎原タダシ。

孤高の学生、小鶴ユウタ。

最熱の男、落合ヒロ。

イレギュラー

反逆、稲尾ジン。

これで全員だった。彼ら以外に、転生者が誕生したというならば連絡が来るはずだ。

何より同じ世界に転生者は一人だけだ。

もし、ありえるとするならば。

「あの夢……この時間軸の出来事では、ないのか？」

断章 転生者（後書き）

転生者が登場する作品です。なお、まだ執筆が未定のものは×がついています。

沢村セイジ 登場作品…ストライクウィッチーズ

景浦ソウスケ 登場作品…IS インフィニット・ストラトス

野村タクヤ 登場作品…涼宮ハルヒの憂鬱×

張本キンジロウ 登場作品…灼眼のシャナ×

王マサノリ 登場作品…魔法少女リリカルなのは×

榎原タダシ 登場作品…緋弾のアリア×

小鶴ユウタ 登場作品…リトルバスターズ！×

落合ヒロ 登場作品…勇者シリーズ×

稲尾ジン 登場作品…魔法少女まどか☆マギカ

反逆の名を冠する魔女さ（前書き）

書き溜めしてたデータが飛んで／（＾Ｏ＾）／

反逆の名を冠する魔女さ

見滝原の一角に立つとあるゲームセンター。

なぜか人影はなく、佐倉杏子が一人でダンスゲームを楽しんでいた。そんな彼女に暁美ほむらが近付く。

「よう。何か用か？」

口にポッキーを咥えたまま、踊りながら要件を尋ねる。プレイ中は飲食はご遠慮ください、と書かれたポスターには目もくれない。

「たった今、バマミから連絡が入った。稲尾ジンが重傷を負って、帰還したらしい」

「どういことだ」

「これから私もバマミのマンションに向かう所だから」

「マンション？ 病院には行かないのか？」

「稲尾ジンの要望よ。どうしても話したいことがあるから、集まってくれて。まどかと美樹さやかは先に行っている」

杏子が咥えているポッキーが音を立てて折れる。

「あいつ結構、強いよな」

「ええ。そうね。少なくとも、豪語するだけの实力はある」

曲が一旦止まり、杏子もそれに合わせて静止した。

「そもそも、あいつは何の目的で見滝原を離れたんだ？」

「……………」

ほむらは答えない。あの日、見滝原を離れる彼が話した真実。自分が転生者で、まどかたちの運命を変えるために全てを擲つ覚悟でこの世界にやって来た、と。

そして？ワルプルギスの夜？を打ち破るための壮大かつ強力な布石。外国の魔女鎮圧もその一環だった。

彼は、まどかたちと触れ合うのを避けていた。もちろん嫌悪ではない。寧ろ友好的、ある種の愛すら感じるほどだった。それでも避けなければいけない何かがあるのだろう。

故にほむらは沈黙を選ぶ。彼がいつか自らの口で自らを明かす時まで、自分は黙すると。

「あいつは一体、何が狙いなのか」

杏子は再び流れ始めたリズムに乗り、踊り出す。

「二週間後、この街に？ワルプルギスの夜？が来る」

その単語を聞いて、杏子は顔を顰めた。

「なぜ分かる？」

「秘密。ともかく、私はバマミのマンションに向かう。あなたも来るのかしら？」

「その為にわざわざ立ち寄ったんじゃないのか」

曲が終わり、杏子はほむらに向き直った。

「食うかい？」

ジンから貰ったお菓子の箱を差し出した。

＊

夕日が差し込む室内。女子の部屋というには少し、殺風景な感じの部屋にまどかたちはいた。

ベッドにはほぼ全身に包帯を巻いたジンが寝込んでいる。

「ワリィな……魔力が尽きてさえいなければ自分で治療したんだけどな」

「何言ってるの。困ったときはお互い様よ」

ジンにケーキを食べさせながらマミは微笑む。

「それにしても、ホント驚いたわ。いきなり、ボロボロになって帰ってくるんだから」

「どうして、あんなひどい怪我してたの？」

さやかとまどかも今は、落ち着いているが最初は随分と慌てていたのだ。

（やれやれ、心配かけちまうなんてな……）

ジンは自分の不甲斐なさにため息をついて、話すべき時が来たのだという事を理解する。

「ある魔女にやられたんだ」

「魔女？ でもジンはマミさんを食べようとした魔女を一瞬で、倒したじゃん」

さやかが当時を語るように身振り手振りでジンの動きを真似る。

「ただの魔女じゃねえんだ。あいつは、俺を殺すためだけに生まれたんだ」

思い出しただけでも全身が総毛立つ。あれは、たとえばストコンデーションでも負けていた。

「あいつは俺と同じ、反逆の名を冠する魔女さ」

俺が死んでも誰も悲しまないし、泣かないよ（前書き）

○

俺が死んでも誰も悲しまないし、泣かないよ

夕日が地平線に沈み、夜の帳が下りる。オレンジから紫に変わり、黒へと染まっていく空はどこか不吉な気配を感じさせた。ジンはベッドから起き上がって集まった彼女たちを見つめる。

覚悟は決まった。自分の全てを明かし、全てを話した上で今後の計画を手伝ってもらおう。強制はしない。

「じゃあ、まずは俺の正体から話そうか」

ずっとポケットにしまっておいたペンダントを取り出して、彼女たちに見せる。？転生？を意味する不死鳥が象られたそれを、彼女たちは興味深そうに眺めた。

「綺麗なペンダントね」

マミが手に取り、そう言った。

「それが転生者の証。俺は説明が苦手だから、かんべんな」

転生者。

二次元世界のもっとも近くに在り、もっとも遠くに在る世界——三次元世界の住人の妄想によって生まれた者を指す。

しかし三次元世界の住人が誰しも転生者を生み出せるわけではない。ごく一部の、限られた者たちだけが妄想を現実にするのである。もちろん自分がそんな特別な力を持っていると、自覚している者はいない。

ほぼ無意識から転生者は生誕する。そうして転生者は妄想した者（そういった力を持つ人のことを創造主と呼ぶ）が望む二次元世界

へと転生することができる。

転生者は皆一様に強力な力を有する。特に創造主の妄想が強ければ強いほど影響し、最強と謳われる事もあれば、逆に最弱にもなる。歴史や物語の書き換え、果てには主人公を差し置いてハーレムを作れることも可能だ。

転生者と創造主の意識は常にリンクし、記憶や五感の共有している。性的な快楽だって、得られるだろう。

「だけど、そんな暴挙を神が許すわけがない。神は三次元世界の創造主の身勝手さに怒り狂い、すぐさま狩人を駆り出した」

狩人たちは神から直々に賜った力や武具を使い、転生者の殲滅戦を開始した。だが転生者たちも応戦し、ある二次元世界で大規模な戦い――大戦が起きてしまった。

転生者と狩人の争いは熾烈さを極め、これでは本末転倒になってしまうと、神は死神に相談を持ちかけた。

死神は恐るべき呪いを施した。転生者と創造主に対する、死の呪いだった。もし二次元世界に転生すれば呪いが発動し、然るべき残酷な死が訪れるだろう、と死神は三次元世界の創造主たちに警告を発した。

この警告の効果は靦面、転生者の数は激減した。

「ま、それでも三次元に絶望して二次元に渡る命知らずはいるけどな。ざっとだけ転生者の説明はこんなモンだ」

「信じられねえけど、あんたがこうして目の前にいるから事実なんだろうな」

杏子はジンを見て、呟いた。

「それで、その、ジンが転生した理由って……」

さやかはどこか恐れているような素振りを見せた。見ればマミやほむら、まどか、杏子も警戒していた。

当然だろう。今でも、そういう行為をする転生者もいる。ロクな死に方はしないがな。

「大丈夫だ。俺が転生した理由はそんなじゃない。俺が転生した理由は――」

創造主とリンクした記憶と、実際に見た記憶が脳内であふれ出す。

――もう何も怖くない――

――あたしって、ほんとバカ――

――ひとりぼっちは、寂しいもんな――

――何回でも繰り返す――

――私の願いは――

黄昏の中で少年が地面に描く、いないはずの少女の絵。

誰からの記憶にも、残らずに。

それでも、想い続ける。

「ちょ、ちょっとジン！？　どうしたの！」

さやかが慌てていた。

ああ、また俺は――。

「悪い……目にゴミが入ったんだ。俺の目は敏感だからさ」

何回も拭うのに、涙が止まらない。

つらくて、切なくて、哀しくて。胸に穴でも開いたかのような喪失感が消えない。

「無理すんなよ」

杏子はそっとハンカチを差し出す。

「ありがとう」

ハンカチで涙を拭いながら、改めて決意する。

絶対に彼女たちを守る。誰も死なせたり、犠牲になんかせせない。

「俺が転生した理由は、みんなを守って誰も死なせずに、最高のハッピーエンドにするためだ」

それが叶うなら、何もかもを擲つつもりだ。後悔はない。

「でも、さっきの話だとジン君は……」

まどかが暗い面持ちで、言う。

「あ、その辺なら大丈夫。呪いならぶっ壊したぜ」

「さすがね。転生者って」

マミは感心したように頷く。

ジンの一言にみんな安心したようだったが、ほむらだけは陰しい顔をしていた。

＊

腹ごしらえの為に一旦、まどかたちは買出しに出かけていった。怪我で動けないジンとほむらが留守番を任されたのだった。

「今日いっぱい、休めば魔力も満タンになりそうだ」

ジンは誰に言うまでも無く独り言を吐いた。

「稲尾ジン、あなたの呪いは解けてないわ」

「ああ。でもそれ言ったらまどかたちは絶対に驚くだろ。悪いがその秘密だけは墓まで持っていくぞ」

「あなたはそれでいいかもしれない。けどあなたが死ぬ時、まどかは悲しむわ。私はまどかを悲しめるのは嫌なの」

「問題ねえよ。転生者が死ねばその転生者に関わった記憶や物品などは消滅する。所詮は割り込みだよ。死んだら最初からいなかったことにされるだけ」

それも呪いの一つだ。

「だから心配はいらない。俺が死んでも誰も悲しまないし、泣かないよ」

強がる彼の顔は、まだ泣いているように見えた。

——誰もいない道を往く。
——偽りの心を信じて、ものがたり真理に反逆し続ける。

最後までがんばろうぜ、相棒（前書き）

ジン説明回とまど×ほむ百合回。

ようやく百合的な話を書けました。

しかし作者はエロシーンは書いたことがなく、百合好きのクセに百合表現も書いたことが無いヘタレです。

故に期待されていた方々には申し訳ない形となってしまいました。この場を借りてお詫び申し上げます。

まだ百合シーンがあります。杏×さや、マミ×シャルもあります。期待はしないほうがいいです。

最後までがんばろうぜ、相棒

少し遅めの夕食を摂り、ゆったりとした一時を過ごす。まどかとさやかは自宅に連絡を入れて、帰りが遅くなるという旨を伝えた。

「大丈夫か？ 俺は怪我で今夜は動けねえから夜道の送りはできねえぞ」

「その必要は無いわ。まどかは私が送っていく」

「さやかはあたしが送っていくからな！ いざって時は死なない程度に相手をぶちのめせばいいんだし」

「そ、そうか」

ジンは冷や汗を浮かべて、愚問であったと思い知った。

「じゃあ、話の続きな。転生者の説明はざっとあんなモンだね」

死は等しく訪れる。それが早いか遅いかだけの違いだ。ましてや大好きな二次元世界で逝けるのだ、本望だろう。

「ま、かるーい気持ちで聞いてくれ」

転生に関するところある失敗と反逆の魔女。

実のところジンは過去に一度、転生していた。原因は創造主の逸る想いが先走り、ジンは妄想途中の不完全体で転生してしまった。故にその時のジンは意識こそ人のそれであったが、姿形は人ではなかった。

「俺は犬の姿で転生しちゃった」
「い、犬!？」

「そ。犬。一応、人並みの思考や意識はあったんだよな。でもそんな姿で転生したわけだから、もうどうしていいか分からなかったね」

そんな彼を拾ったのが鹿目まどかだった。結果的にジンはインキュベーターの本性を知り、繰り返される絶望を見てきた。

「でも、犬を飼った覚えはないよ？」

「だろうな。なんせその転生は失敗だから、色々とりセットされたんだ」

真実は、犬形態のジンが一度この世界を去ったため、それに関する記憶が破壊されたのだ。

そうでなくとも、既にほむらが幾度とも時を巻き戻しているので、タイムパラドックスや時間軸の激しい変動、世界線が乱れ、バタフライ効果が生じている。

ざっと見ただけでもまどかに絡みつく因果律は尋常ではない。一体どれだけループすればあんなメチャクチャになるんだよ。

「その辺の説明はマジ勘弁。文系には荷が重過ぎる……余談だけど見滝原中学の授業レベルおかしくね？ 俺、高校生だけどからっきしわかんねえぞ」

「そうかな？ 普通だと思うけど」

当たり前のように言うまどかが恐ろしい。もしかして自分がバカなだけでは。

ジンは頭をブンブンと振って、懸念をかき消した。

「ジン、高校生だったんだ。ちっちゃいから同学年かと思った」

さやかの一言が心を貫く。人の劣等感コンプレックスを…。

「そうね。よく見るとジン君って子供な顔してる」

言っておくが身長が低いのは俺のせいではない。転生者は創造主の身体的特徴に強く影響される。

マミさん、子供みたいな顔って…。

「つかさ、ジンはあたしらの中で一番低いんじゃない？」

えっ。

あんこ、それは笑えない冗談だぞ、うん。

「な、何を言ってるんだ。160はあるぞ！」

「一番低いわ」

「ちょ、待て！！ 即答!？」

「あなたがバミ、美樹さやか、佐倉杏子よりも低いのは分かっている。あなたは今、160と言った」

「……」

「まどかの身長なら把握済み。あなたは私はおろか、まどかよりも低いわ」

「ほむらちゃん、私身長教えたっけ……?」

聞いているだろ創造主。もし、俺が三次元世界に帰れたら一発、殴らせてもらうぜ。

せめて身長くらいは高校生並みにしろやッ!

「あーもうこの話はこちに置く!」

かなり脱線してしまったので強引に元に戻す。和やかな雰囲気を一転、緊張感のあるものに変えた。

「俺の怪我の理由は、さっき話した狩人が原因だ。死神は用心深い奴でね、万が一呪いが解呪されたら狩人を放ってくるんだ。元々、転生者狩りの為に生み出された兵器みたいなもんだからな。クソ強い」

呪いは絶対に解けないし、狩人はやってくる。死神は手を緩めたりはしない。呪いと狩人の二重殺で確実に転生者と創造主を仕留めるのだ。

「狩人ってのはその世界にとって適した姿をしている。つまり、この世界だと魔女の姿になるのが適切だな。反逆の魔女と手下を率いて俺を殺しに来た。今度来たら返り討ちにしてやるけど」

昔の強き転生者たちならいざ知らず、今の俺の力では退けるだけで精一杯だ。

同時期、別の二次元世界に渡った転生者、槇原タダシは狩人に襲撃されてつい先日、死亡した。強者と言われていた奴でさえ呆気なくやられてしまった。

「狩人はやばいけどまどかたちには手出ししないよ。あくまでも狩るのは世界の異物である、転生者だからな」

そういえばこの世界、過去に俺以外の転生者が訪れた形跡もある。気にするほどの事でもないので調べる必要は無いか。

「以上で説明終わり。あー……疲れた。説明するのはホント、大変だぜ。質問とかは？」

誰も挙手しないのでジンはベッドに寝転んだ。

「後、二週間でこの街に最強の魔女、？ワルプルギスの夜？が来る。だけど心配すんな。俺は必勝の布石を用意してある」

言い終わるが早いかジンは大きないびきをかいて寝てしまった。

「じゃあ今日はこの辺でお開きね。みんな、帰り道は気をつけて」

＊

暖かい夜風が吹いていく。満月が雲間からのぞいて、青白い光を放つ。

隣を歩くほむらの黒髪が風にたなびいて、甘い香りがした。

「ほむらちゃん、送ってくれてありがとう」

家の明かりは消えていた。

「……まどか」

「え？」

家に入ろうとするまどかをほむらは呼び止めた。

振り返った彼女が、愛おしくて。

ほむらはまどかを抱きしめていた。

「ほむらちゃん……」

「ゴメンね、でも私はあなたが……」

「ううん。いいよ。私もね……」

二人は暫し、じっと見つめあう。手と手を重ね合わせ、お互いの吐息がかかる。

「私の部屋に、来る？」

「うん」

手を繋いだまま、ほむらはまどかの家に入る。

まどかに手を引かれて階段をのぼり、部屋に通された。ベッドに座ると、二人分の体重で少し沈む。

「まどか、私もね。稲尾ジンと同じように秘密があるの」

まどかの手をギュッと握る。この温かみだけが全てで。

「でも、今はまだ話せない。あなたに嫌われたくないから」

「私はどんな秘密があっても、ほむらちゃんのことを嫌いになつたりなんかしないよ」

「……まどか」

ほむらはまどかを再び抱擁して、そのままベッドに倒れた。

「大好き、まどか」

「私も大好きだよ。ほむらちゃん」

二人はそっと、口付けをした。

＊

稲尾ジンは目を覚ました。

月明かりが部屋をぼんやりと浮かび上がらせる。ベッドの傍らではマミさんが眠っていた。

「……もう寝れねえ……女の子と一緒に部屋って……」

ごそごそと起き上がり、包帯を取っていく。
体中に回復の魔力を循環させて傷を癒していった。

「魔力は何かなりそうだな。夜の散歩でもするかね」

気付かれないように、スニーキングを使う。音も立てずにドアを開けて、外に出る。

「今宵は満月か。悪くねえな」

ポケットから駄菓子屋で勝った玩具のタバコを取り出し、口に咥えた。

夜風で紫煙が吹き散らされていった。

「なあ、創造主。お前の望んだハッピーエンドはもうすぐだぜ。おつ死ぬなよ。くたばる時は一緒だ。一人にはしねえ。な、この世界は綺麗だな。また遊ぼうな。起きてるのか。ああ、そうか」

創造主と転生者は常に意識を共有している。
だから向こう側の様子も分かる。

「お前、病気だもんな。今は寝てるのか。悪い、もう邪魔しねえよ」
フツと煙を吐く。

「最後までがんばろうぜ、相棒」

用語解説 ネットバレあり

【転生者】

創造主の妄想から生誕した存在。妄想の程度によって最強、もしくは最弱になる。

しかし極めて高い潜在能力を有するのは共通。容姿は創造主の身体的特徴に影響されるが、妄想次第ではイケメンやブスメンになる。五感や意識は常に転生者とリンクしている。故に横暴を働くものも現れてしまう。

容易に二次元世界のバランスや物語を崩壊させるので神に敵視されてしまった。

【創造主】

三次元世界に住む存在。普通の三次元の住人と異なり、圧倒的な妄想力で転生者を生み出すことが可能。

自分をもっとも行きたいと思う二次元世界に転生者は転生する。二次元世界では自由気ままに振舞えるので、己の欲求を満たすのほとても簡単。

現在では神から目を付けられ、いつ始末されてもおかしくは無い。

【狩人】

勝手に二次元世界に干渉する転生者と創造主を抹殺する神の僕。転生者と互角以上の力を持ち、多くの転生者たちを始末してきた。

その二次元世界の世界観に適した姿になるので、固定の容姿は無い。

【呪い】

死神が創造主と転生者に齎した死の呪い。いつ発動するかは不明、効果も異なる。

分かるのは、？然るべき残酷な死を遂げる？ということだけ。

【神】

二次元世界と三次元世界を統括する存在。身勝手に振舞う転生者と創造主に対し、強い怒りを覚えている。

二次元世界の規律を守るためならば、殺戮も辞さない考えの持ち主。

【死神】

呪いを放った張本人。人の死を快楽とする。性格は狡猾で残忍、冷酷非道。

【二次元世界】

いわゆるアニメ、マンガ、ゲームの世界。三次元世界の隣にありながら決して訪れる事のできない世界。

創造主と転生者だけがそれを可能とする。

【三次元世界】

いわゆる現実。二次元世界に恋焦がれた人々の中の、一握りの者たちだけが二次元世界へと渡っていく。

【魔人】

魔女無き世界に生れ落ちた歪み。転生者による真理反逆によって生

まれてしまった。

その力は凄まじく、転生者では決して倒すことはできない。

まだ死んでやるわけにはいかねえのよ

ジンの身体が吹き飛ばされ、岩盤に叩きつけられた。

前述の通り、この鎧は衝撃までは消せない。骨が軋み、内臓が撓む。咳き込むたびに吐血して、鎧の胸部装甲が紅く汚れた。

「ちっ……もうバレたのか」

命からがら、日本に帰還してまだ二日目。しかし敵は――狩人はやって来た。狩人Ⅱ反逆の魔女と名乗る神の僕。転生者を葬る、それだけの存在。

「まだ死んでやるわけにはいかねえのよッ!!」

エバーチェンジングを長槍に変化させて、狩人に突っ込む。

「ジリオン、ソーンツッ!!」

伸長した槍の穂先が幾千にも枝分かれをして狩人を串刺しにした。

「千烈峰!!」

槍を乱撃し、めったやたらに貫き、刺し抜いていく。

「メイヘムインペール!!」

上空へと槍を投げつけ、胸の前で手を合掌する。狩人を囲うようにひし形の魔法陣が浮き出し、その頂点に四本に分かれた槍が突き刺さった。

ジンは印を結んで手を掲げる

「破アツ!!」

眩い白色の光を放って魔法陣の内側が大爆発した。赤々と燃える火炎と黒煙が、閉鎖鉄鎖で隔離された擬似世界の空を染める。

「どうだ……?」

一切の加減もない猛攻。ジン自身も納得がいく改心の一撃。
だがそんな彼を嘲笑うかのように、黒煙を裂き、巨大な拳が飛んできた。

「つくそ!! レイ・スラスト!!」

光線の如くの槍の一撃が拳を貫き、破碎した。同時にジンは跳躍して槍を旋回する。

「悠久無限たる永遠の崩壊!! シュナーベル・ピアスツツ!!」

渾身の力をこめて穂先を地面にぶち込む。

狩人の足元から幾万、幾億の槍が召喚されてズタズタに引き裂いていった。槍の形状は一本ごとに異なり、中には炎や雷を帯びるものなどもあった。

次いで今度は七本の巨大な槍が現れ、ジンの握る槍はヘビのようにとぐろを巻いて狩人の至近まで伸びていった。

「マネ、させてもらうぜ……」

槍の穂先を狩人に向け、ジンは笑う。

「ファイナル・エンド」

無音の光が狩人とジンを包んだ。

＊

間近で受けた衝撃は計り知れない。

ジンは蹲ってしばらくの間、血を吐き続けた。せっかく回復した体力と魔力も使い切ってしまった。

「もう一回マミさんここで治してもらうか……怒られそうだな」

槍を支えに立ち上がる。

「だからいい加減、どけよ。お前」

無傷で、立ちはだかる狩人はユラユラと揺れるだけだった。

「俺は最後まであいつらに付き合うんだ。その後なら、いくらでも死んでやる」

返事はない。狩人に言語能力がないのか、無視しているだけなのか。

どちらにせよ、引くつもりはないらしい。

「……そうか」

空気の流れが、変わった。

「心を狂気に変えて――」

瘴気がうずき、生臭いにおいに満たされる。

今、ここで死ぬわけには行かない。

最後まで、せめて彼女たちを守り切るその日まで。悲しみを断ち切れる時まで。笑顔になる時まで。

「終末」

どろり、とジンの顔の皮膚が溶けた。

お前どっかで見たような気がするな

ジンはふらつき、壁にもたれかかって座り込んだ。肩で息をして顔は青ざめ、血の気が引いている。しかしお陰で消尽した魔力も補充された。

身体全体に回復の魔力が行き渡るのを感じながら、先程の光景を思い返していた。

終末、としか言い表せない。神々の黄昏を告げる鐘が鳴り、生あるものは狂い、死したものは冒流する。

「――」

幾人の転生者を屠ってきた、殺しの玄人が血の海に沈む場面が脳裏を過ぎる。以前のように意識を持っていけなかっただけ、マシなのだろうか。

「おい相棒。テメエの妄想した力、ちとやばすぎじゃないか？」

返事はない。意識を通じて、視覚を借りた。

広い部屋、完全な無菌状態、恐らくは手術室。手術用照明灯が照らし、執刀医や看護師が見えた。

「これで何回目だよ。お前」

ため息をついて視覚のリンクを待機状態に戻した。

できるだけ平静でいよう。いつもどおりに取り繕っていればいい。？ワルプルギスの夜？が襲来するまで二週間を切った。最終決戦を乗り越えれば俺の物語は終わる。そうすればもう二度と会うことはない。

ジンは言い聞かせるように反芻し、立ち上がった。

見滝原市の昼下がりには暖かい。柔らかな日差しの下で、ジンは眩しそうに空を仰視する。長いようで短かったこの世界での日々。回想すれば、初めての出会いはお菓子の魔女の結界の中だった。

「腹減ったし、どっかでメシでも食うかな」

どうでもいい事を口に出して、不安を紛らわそうとしたが消えてはくれなかった。

＊

ジンは当てもなく街中を彷徨する。ママさんのマンションに戻ってもいいのだが、今は学校に行く時間だ。一人では何かとつまらないし、寂しい。

周囲の風景は高層ビル群から工場地帯へと変わっていた。コンビニナートや製鉄所が乱立し、ある種のマニアたちが喜びそうだ。

「暇だな……」

縁石に腰を下ろしてコンビニで買った弁当を食べ始める。人通りは少なく、たまに車が走り去るだけで静かだった。

一人、無言でがつついてしていると、ふと気配を察して箸を止める。見れば一匹の黒猫が傍に座っていた。

「お前どっかで見たような気がするな」

稲尾ジンとしての記憶にはない。相棒の記憶とリンクしようとしたが、不通だった。

「ちっ、まだ手術してやがンのかよ。ヤブ医者が、さっさと治せよクソ」

ひとしきり毒づいて、黒猫に目を向ける。

「ほらよ」

夕食用に買い求めた秋刀魚を目の前に置いてやった。
ところが黒猫は見向きもしない。

「腹減ってねえのか？ ん？」

不意に大気がざわめいた。ジンは手を翳し、瞑目する。

「大気^{かぜ}が、哭いている……」

ハッとして立ち上がった。消える日常の風景、塗り替えていく異常の世界。

結界が完成した。

＊

そこは、風と稲妻の世界。黒雲は烈風を巻き起こし、稲光を迸らせる。地面らしい地面はなく、自分が今立っている白い雲が唯一の足場らしい。

ジンはエバーチェンジングを大斧へと変えて構える。

——Iduberga

——Simone

二人で一人、大嵐の魔女。吹き荒れる風となり、荒れ狂う雷となり、暴れまわる。思慮分別がつかないほどまでに追い詰められていたのか。

インキュベーター

奴の毒牙にかかった犠牲者は、その悲しみを何かに叩きつけるかのように大暴れしていた。

せめてもの救いなのか、手下たる白い雲はジンの意思を汲み取り、嵐の世界を自在に飛び回った。

「筋斗雲みたいなもんか、よし奴の懷に飛び込め!!」

轟々と唸る一陣の風に突っ込み、ジンは大斧を振り上げた。

「大撃破アッ!!」

ありったけのパワーを乗せて大斧をぶち込んだ。斬る、というよりも打撃に近い重厚な一撃が烈風を両断した。

「何!?!」

だが裂かれた風は痛手を見せず、すぐに元に戻る。

「くそ、だったらもう一度!」

逃げていく烈風に追従しようとした彼の死角から稲光が割り込む。凄まじいパルスを放ちながら、黄金に輝く雷撃がジンに命中した。

「おあ、つか!?!」

肉を焼かれる焦げ臭いにおい、全身の筋肉が痺れて弛緩する。

「バカなッ！？ 衝撃以外では無敵の鎧に通じるわけがない！」

しかし現にダメージは受けている。ジンは何とか稲光から逃れて、体勢を整える。

「我が身の枷を除け、リキュペレイト。高貴なる御霊よ、我が血肉に癒しを。ハイリツヒ・ヒール」

次々に回復魔法を発動させて傷を癒していった。そうはさせまい、と言わんばかりに稲光が再び放電してきた。

「一回、効いたからって調子に乗ってンじゃねえ！！ 汝が異能を退けよ！！ ロジニクル・リフレックス！！」

ジンの前面に半透明の光のカーテンのようなものが展開し、真正面から雷撃を受け止める。光のカーテンは暫し帯電し、先の雷撃よりも倍の放電を飛ばした。

稲光はまともに巨大な稲妻を直撃したがそのエネルギーを残らず吸収した。

「まさか雷属性が決定的な弱点とはな……オリハルコンといえど金属。雷は鎧を伝い、俺の身体に届くのか」

大斧を担ぎ、交わる風と雷を見据えた。

「面白れえ。なかなか手強い魔女じゃねえか」

螺旋を描きながら突撃してきた風と雷を、ジンは無防備のまま待ち受ける。寸前で風と雷は二又になり、左右から挟むように通り過

ぎていった。

「レディエンスエイル」

ジンの背から白い、光の翼が顕現した。瞬間、風と雷がガラスが割れたように砕け散る。

「攻撃をあえて受け、会心の反撃を食らわす魔法だ。古の賢者が肉体的に劣る魔法使いの弱点を克するために、生み出した魔法の一つ」

それでも尚、大嵐の魔女はしぶとく再生していた。そもそも風も雷も実体を持たない自然エネルギーの一つである。物理や魔法で処理できるものではない。

大嵐の魔女は烈風を稲妻を同時に吐き出す。二つの力は渦巻きながらジンへと差し迫った。

「魔王グレートプレッシャー！！」

大斧を旋回、闘気を秘める衝撃波が烈風と稲妻とぶつかり、お互いに消し飛んだ。

「何回でも復活するなら、俺はそれを破壊しつくただけだア！！」
「ラカッソ！！」

白い雲を駆り、間合いを詰めて飛び上がる。大上段から大斧を振り下ろし、両断。

続けて逆袈裟、袈裟懸けに斬りつけた。

とどめにフルスイングして風雷もろとも吹き飛ばした。

「これじゃ、アリュージョン・ラーゴット秘術をブチ込む隙すらできねえ」

使うか、アレを。ほむほむと同系のあの魔法を。

「まずは動きを止めないとな……はあああああああああああッ!!」

ジンの右腕が突如、肥大化してガントレットが外れる。皮膚の表面には青筋が浮き上がり、びくびくと痙攣する。

「砕け散れィ!! 大破壊クライシス!!」

筋肉の塊と成った右腕で大斧を絶叫と共に振り下ろした。純粹な破壊力が奔流となって、黒雲を蹴散らし、大嵐の魔女を万力の如くのパワーで千切った。

「時は凍てつき、刻まれる刻は永遠の眠りにつく。我が言の葉は時の神との契約を代行する」

ジンを中心に巨大な円陣が書き出された。右腕は赤黒く変色してあらぬ方向へとひしゃげていた。

激痛を無視してジンは淡々と言葉を紡ぐ。

「原始より流るる時空は安らぎを得ん。解放せよ、時空の聖櫃」

円陣は時計となり、針は時を刻む。

「空間より来たりて、時空へと帰れ」

針はゆっくりと停止し、??を指していた。

「レーザーグラン・トゥーアー・サー・オー・シェン・ラ・ジ・オア」

時間よ、せめて今の時だけでも。

「今、時は止まる――アルカディア」

世界は、灰色の呪縛に捕らわれる。あらゆるものが時を奪われ、静止していた。

「へへ……どうよ、俺の最終決戦魔法は！ お陰で魔力をまた使い切っちゃったけどな」

両手を組み、構える。

「センチルス・ハアウト・カジュレ・テレトリア！！」

聖なる力の加護を受け、ジンは大嵐の魔女へと疾走した。

「その悲しき運命、断ち切る！！ アリューシャン・ラーゴウト！！」

＊

結界が消滅して元の場所に帰ってきた。縁石には黒猫にあげた秋刀魚とコンビニ弁当の食べかけが放置されている。肝心の黒猫はどこにもいない。

「……ダメか」

秘術を使うために無理矢理動かした右腕は、原型を留めていない。回復しようにも魔力が尽きているどうしようもなかった。

「んー、やっぱマミさんに治療してもらうしかないよな」

はぁ、と息を吐いて縁石にへたり込んだ。

長い時間、戦闘をしていたつもりだったが日はまだ高い。マミさんが帰宅するまで、まだまだ時間はかかりそうだった。

お前どっかで見たような気がするな（後書き）

無敵の鎧の弱点が雷属性は、ダイの大冒険のヒュンケル戦から。しかし空想科学を解説しているサイトでは雷撃は鎧を伝うだけで、ダメージは受けないと書いてありました。

あんまり無敵すぎてもつまらないので、前者を採用しました。

一人じゃなければ大丈夫よ

「また怪我をしたの？」

ママさんの視線がきつい。ジンは肩をすくめて正座したまま、うな垂れた。

壊れた右腕はママさんの魔法によって処置を施され、包帯を巻いて吊るされていた。

「いや、だって魔女との戦いで怪我は付き物……」

「それはあなたが一人で戦うからじゃない。みんなで戦えば怪我をする危険性も減らせるし、負担もなくなると思わないの」

「サ、サーセン……」

有無を言わさぬ迫力に圧されてジンは素直にうなづく。

「じゃあ、早速なんだけど魔女の反応出たから手伝って欲しい」

＊

そこは影絵を思わせる世界だった。魔女や手下はもちろん、ジンたちも影絵のような姿になっている。

「俺も魔力が満タンだったら戦うんだが……生憎と本調子じゃねえ。援護くらいしかできない俺を許してくれ」

「ううん。ジンには色々、世話になってるからね。ここはあたしたちに任せて」

さやかと杏子がそれぞれ得物を構えて前列に立つ。そして後列の

まどかを守るようにマミさんとジンが並んだ。

「開戦の狼煙くらい、ハデに上げたるか！ イグニート・ダート！
！」

ジンの左手から紅蓮の怒涛が溢れ、跪いたような体勢の魔女に襲い掛かる。それを守るように黒い手のようなものが影から現れて、爆炎を握り潰した。

「げえッ！？」

魔力が不足しているとは言え、中級魔法をああも潰されるとは。

「行くよ、杏子！」

「ああ」

弾かれたように杏子とさやかが駆け出した。二人を迎え撃たんとする黒い手の群に、ジンは再度左手を差し向けた。

マミさんもマスケット銃を構える。

「隙は俺たちが作る！ プラズマシユネル！！」

「美樹さんと佐倉さんは魔女の本体に攻撃を！」

マスケット銃が火を吹き、ジンの手から音速の雷弾が発射される。次々と黒い手たる手下たちを打ち抜いていった。

守りを失った魔女にさやかと杏子が絶妙のタイミングで切り込んだ。
だ。

さかやのサーベルが切り裂き、杏子は槍を三節棍のようなものに変えて殴りつける。

「アカンサスサイス！」

二人の攻撃の隙を塞ぐようにジンの魔法が発動する。剣のような形をした小さな木の葉が無数に舞い、剃刀さながらの鋭さを以って切り刻んだ。

これだけの猛攻を受けても尚、魔女は祈りの体勢を崩さない。逆に黒い手が復活してジンの放った木の葉を握り潰してしまった。

「今回の魔女も強いなっ」

すぐに新たな魔法を唱え、左手を翳す。

「ソアグラビティ！！」

魔女の周囲に超重力が発生し、黒い手が軒並み押さえつけられる。

「どうだ！　これなら……！？」

超重力を抜け出した黒い手が猛烈な速度でジンに向かう。無敵の鎧（仮）は纏っているものの、どうせ衝撃は緩和できない。吹っ飛ばされるのを覚悟してジンは身構えた。

「さあ受け止めてやる！」

直撃する寸前で、マミさんのマスケット銃が黒い手を叩き落した。

「ね？　一人じゃなければ大丈夫よ」

ニコツと笑うマミさんはとても頼りに見えた。

「サ、サンキュー。マミさん……もうダメかと思ったよ」

ジンの気が逸れたため、魔法の効果が切れる。超重力から解き放たれた手がさやかに殺到した。

「さやか！」

「平気！ 杏子は攻撃に集中して！」

サーベルで黒い手を切り払い、疾駆する。今度はさやかを取り囲むように現れた黒い塊を、上空に跳んで回避した。

空中で一回転して姿勢を整え、足元に楽譜をイメージした魔法陣を展開する。爆発的な突進力を発揮してサーベルを突き立て、一気に肉薄した。

だが魔女から巨大な黒い木の根のような物が吐き出されて、突撃の威力を殺し、そのままさやかを飲み込んだ。

「さやかちゃんっ！」

たまらずまどかが叫ぶ。

「あれはまずいッ！ アイシクル！！」

「ダメエ！ さやかに手を出すんじゃないっ！」

ジンの飛ばした氷柱が黒い木の根に突き刺さって凍結した。杏子の槍が乱舞し、黒い塊をバラバラに引き裂く。

投げ出されたさやかの身体を杏子は抱き止めて着地する。

「あ、ありがと……」

「ったく。無茶すんなよな」

さやかを下ろして杏子は安堵のため息をついた。

「オラオラオラオラオラオラオラアッ!!」

ジンが輝く魔法の弾丸を連射して、黒い手をどんどん追いやっていく。

「マミさん! あんこ! さやか! 俺が手を抑えてる間に最大の攻撃をブチかませッ!!」

杏子とさやかはアイコンタクトを交わし、マミさんは特大の銃を構えた。

「いっけえ!!」

「終わりだよ!」

サーベルは右下から左上へ、長槍は左下から右上へ、十字を斜めに傾けた形で二つの魔力が炸裂した。それぞれを単発で繰り出すとは違う、お互いの威力を高め合う完璧な連携攻撃だ。

「ティロ・フィナーレ!!」

その十字の中央を寸分も変わらずに、弾丸が貫いていった。

「今だあ!!」

ジンは腕の包帯を筆取り、両手を組み合わせる。

「センチルス・ハアウト・カジュレ・テレトリア!!」

秘術が完成し、ジンの総身に光の力が満ちる。カッと目を見開いて魔女の元へと一直線に走り抜けていった。

「アリューション・ラーゴウト!!」

＊

結界が消失した。残されたグリーンシードを使用して彼女たちのソウルジェムの穢れを取り除いた。

いずれ彼女たちの魂も元に戻さねば。だが今はまだそれができない。

（つーか、まだ魔法少女Ⅱゾンビという事実すら知らないんだっけ。原作の流れとはだいぶ変わってきてるからな。機を見て、説明するか……気が進まんが）

ジンは破れた包帯を右腕に巻き直していった。

「ねえ、ジンのさっきの技って何なの？ マミさんが襲われたときも使ったよね」

制服姿に戻ったさやかが興味深そうに尋ねてくる。

「あー、あの技は、まあ、その、なんだ。魔女を救済する魔法みたいなもんだ」

明後日の方向を見ながら冷や汗を浮かべ、はぐらかす。さやかは納得がいかないのか、ジト目で睨んでくきた。

「時が来れば絶対に話す。嫌でも話す。だからその時がいつ来ても

いい様に、心の準備をしておいてくれ」

「……分かった」

「ん。じゃ、俺はちと寄るところがあるから先に帰って良いぞ」

ジンは足元に魔法円を描き、ある場所を頭の中に思い描いた。

＊

数秒間続くジェットコースターに似た浮遊感。そしてそれは、唐突に終わる。両足がちゃんと地面についているのを確認してからジンは目を開けた。

見滝原市のとある一角にその家は建っていた。ジンはドアを叩くが返事はない。

「俺だ」

一言、告げてからドアを開ける。中に入ると様々なものが浮遊していた。それが何なのかは知る由がない。

「対ワルプルギスの夜の作戦概要を伝えに来た」

一人、テーブルに置かれた見滝原市の地図や雑多の資料を見つめているほむらに声をかける。

ジンがソファに座ってもほむらはテーブルから目を離さなかった。

「ワルプルギス襲来まで二週間を切った。とりあえず出現位置はほむむの予測どおりでいい。俺も視ているからな」

地図に赤丸で囲われた地区を指で示す。高層ビル群が集中する場所だ。

「まず作戦の第一段階は俺とほむほむ、マミさん、あんこ、さやか、まどっちで迎撃する。無論、まどかと淫獣は絶対に契約させない」

地図の上に人形を人数分並べる。

「奇跡を売り歩くあいっほどではないが、俺も一時的に擬似契約ができる。まどっちの因果律もあるから予想以上の効果はありそうだ」
「まどかも戦わすの？」

今まで無言だったほむらが初めて口を開いた。

「一人でも欠けたら絶対にワルプルギスは斃せない。総力を結集し、戦うんだ」

人形を並び替え、赤丸に置いてある大きな人形と向かい合わせた。

「布陣はこうだ。俺とあんこ、さやかが突撃を仕掛ける。ほむほむはマミさん、まどっちと共に後方から援護射撃を頼む。いざって時は時間を止めて攻撃してもらいたい」

ほむらは無言で肯く。

「んで、第二段階だ。ホントは第一段階だけで撃破したいけど、無理だろうな」

ジンが解説する第二段階の作戦内容を聞いたほむらは、驚きの表情を隠せないでいた。

「そんなことが可能だと言うの？」

「可能も何も、これが成功しなければ負けるぞ」

？ワルプルギスの夜？の強さは本物だ。伊達に最強と謳われているわけではない。

「そこで最終段階^{ラスト}。俺の真の武器で？ワルプルギスの夜？を救済し、最終奥義を用いてまどっちの因果律をぶち壊し、終末で淫獣を葬り去る」

ジンはゆっくりと息を吐いた。

「どう転んでも——例え第二段階が失敗して負けそうになっても俺は終末を使う。まどっちたちのためなら止むを得ない」

魔女の救済も大事だが、まどかが契約してしまっただけは全てが水の泡となる。最悪の場合、？ワルプルギスの夜？は討伐するつもりだ。

「作戦の内容は以上だ。質問とかある？」

ほむらは首を振る。ジンはそうか、と言って早々に立ち上がる。色々と下準備が必要だ。一秒も無駄にはできない。

「まどっちたちには魔法少女のシステム説明と合わせて追って連絡する。じゃあな」

「待って」

「ん？」

「戦いが終わったら、あなたは……」

「俺と相棒の目的は果たされる。その時点でもうこの世界にとどま必要性はなくなるし、呪いが発動する頃合だろう。俺は消滅し、一切の痕跡も残さない。記憶も破壊されるから誰も覚えちゃいない」

それを理解した上で、相棒は俺を転生させた。彼女たちを救い、守りたいという願いがあるからこそ。

「じゃ、俺はもう行くから」

ジンはほむらの家を後にした。

ワルプルギスの夜 襲来まであと12日

絶対に最後まで死にません

工場地帯と市街地のほぼ全域。そこが？ワルプルギスの夜？の出現予測地点。許容誤差範囲、出現時の余波による破壊区域を考慮すると相当なものだ。

ジンは治ったばかりの右手と左手を翳し、呪文を唱え始めた。あちこちに魔法陣が浮かび上がり、仕掛けが施されていく。上空を特殊な光幕が張られて、ジンの周りから土塊が立ち上がり、ゴーレムとなって配置についていく。

天と地に巨大な魔法陣を描き、見滝原市全体を魔術によって武装させた。

「ふー……」

魔力が減少してきたので、下準備の基礎作りに一息入れる。

数分後、魔力の充填を行ってから再び作業を開始し、Xデーまでには全工程を終了させる見積もりだ。

「魔力の総量が高ければ一々、充填しなくても済むんだがなあ。魔力無限のスキルくらい妄想しろよ」

ブツブツと不平を漏らし、ジンはハンバーガーを食べ始めた。魔力回復の効率の良さは睡眠が一番、その次に飲食である。

時刻は午前二時を過ぎているが今夜中に作業を終えたいので、徹夜になりそうだ。しばらくの間は不眠と魔力確保による暴飲暴食が続く事になる。

「眠い……」

欠伸をかみ殺して涙を拭う。転生者のスペックなら不眠不休でも平気なはずだが、特殊な体質を有す影響で欲求が過剰になっている。ジンは人の三大欲求と定義される食欲・性欲・睡眠欲の内、性欲を完全に排斥していた。故に食欲と睡眠欲が増大し、少しでも抑えられると途端に禁断症状のようなものが出てしまう。

創造主も同様に性欲を故意に欠落させ、ジンにそのまま受け継がせたのが起因である。理由は知らない。尋ねても語ろうとはしなかった。ジンも男の過去を根掘り葉掘り、探るような無粋なマネはしない。

多少、不便には思うが好都合だ。

俺たちは下種な転生者どもとは違う。生半可な覚悟やくだらねえ目的、三次元世界げんじつで生きる事に絶望して二次元世界こうちに來たんじやない。

「睡眠がダメになるからメシをもっと喰わねえとやべーな。あー、胃もたれしそうだ……」

食事、陥穽、また食事を延々と繰り返す。

？ワルプルギスの夜？との最終決戦までこの生活は続く事になる。

「ぼちぼち、作業を再開するかね。あんまりダラダラしてる余裕もねえし」

ジンは重い腰を上げて、再び作業に着手した。

＊

見慣れた白い天井。

起き上がると、全身に鈍い痛みが走る。もう慣れっこの、しかし激痛に思わず顔を顰めた。

生まれてから99回目の手術は終わった。

治る兆しもなく、手術と様々な機械を用いて必死で生き繋いでいる。六人部屋の病室も今は俺をのぞいて誰もいない。

重患ばかりを集めるこの隔離病棟から生きて出られた人はいない。皆、途中で死んでいった。老若男女問わず、死んでいった。どんなに生きようと頑張っても、死んでいった。

薬の副作用で髪の毛は白髪になり、瞳も紅くなってしまった。長い間、運動をしていないので手足は皮と骨ばかり、日光も浴びないからゾツとするほどに青白い。

俺は医者と看護師の配慮で備え付けられた液晶テレビをつけた。ブルーレイディスクを入れて、何回も聞いたあの曲と一緒に口ずさんだ。

ほんの、一分前後のオープニングの歌詞に込められた、ある少女の気持ち。

何度でも、何度でも、あなたを救うために。
希望を持つ限り、報われない想い。

ふと頬を伝う一筋の涙に、俺は気付いた。
また泣いていた。この曲を聞きたびに、近くて遠い世界にいる少女たちの心が溢れてくる。

ずっと明日を待ち続けている。

一寸の光も許さない闇の中を走り続けている。

どんなに怖くても、挫折そうになっても、明日を待って。

俺たちにできることは、その闇をぶち破り、光へと導く事。
その為なら俺は――。

「鹿目剣さん、往診です」

ドアをノックして若い看護師と主治医が入ってきた。

奇しくも同じ苗字を持つ俺に与えられた奇跡なのだろうか。

あの日、『魔法少女まどか☆マギカ』の最終回が終わり、泣いていた俺の元へあいつは生れ落ちた。

稲尾ジン。

俺と瓜二つの顔をしたもう一人の俺。俺の妄想が極大化して、実体化したあいつは言った。

——俺と一緒に物語に反逆^{しんり}しようぜ。

二つ返事で了承した。その過程で転生者と創造主の知識を得て、神と死神の呪いを知った。

全部、理解し、決意と覚悟を固めて彼を転生させた。

その後は常に意識と五感が彼と共有している。彼がママさんを救い、あんことさやかかの死のフラグをへし折ったのもリアルタイムで目の当たりにした。

「鹿目さん……これは……？」

若い看護師は目を剥き、主治医なんて腰を抜かしていた。

「何でもないです。気にしないでください」

聴診の為に服を脱いだ俺の身体には、異様な文様が全体に刻まれていた。タトゥーや刺青にも見えるがそんなチャチなものじゃない。呪いの証だ。これが心臓に届いた時、俺は死ぬ。

つい数日前まではアザと間違えるくらいだったのがこんなに大きくなっていった。

恐らく彼の身体にも同じ症状が出てる筈だ。最後の時が近い。向こうの世界でもワルプルギスの夜襲来まで二週間を切った。

ホント、ありえねえ事ばかりが起こるな。俺の100回目——最後の大手術も二週間後だ。ワルプルギス襲来と同じ時刻から始まるんだ。

「し、しかし君、こんな症状はこの前の検査の時には……！」
「大丈夫です。絶対に最後まで死にません」

頼んだぜ、
ダチ公。

断章　くだらない愛

俺はよく二次元の女の子を好きになることがあった。
本当に惚れてしまう事もあった。

でもそれは大きな間違いだった。

彼女たちは俺を好きにはならない。

あの笑顔も、あの告白も。

全ては主人公だけに向けられるのだ。

俺ではダメなのだ。たとえ俺と一緒にいても彼女たちは笑ってくれないだろう。

彼女たちにはそれぞれ相応しい相手がいる。ずっと一緒にいるべき相手がいる。

彼女たちの笑顔は好きだ。好きな人に向けられる笑顔は本当にかわいかった。

俺を想ってくれないのは少し悲しいけど、その娘が幸せになるならそれで本望ではないか。

だから俺は見続ける。手が届きそうで届かない二次元の世界を。三次元の世界から見守り、誰かが悲しんでいたら助けてやりたい。

暁美ほむら。

俺は彼女が好きだった。でも彼女にはまどかがいる。まどかと幸せになるべきだった。

「なあ、ジン」

転生者、稲尾ジンと意識をリンクさせて話しかける。

「なんだ？ 相棒」

「俺っておかしいかな」

「おかしくねえよ。お前のその意思はすげえよ。今までの転生者と創造主の概念をぶち壊してるぜ」

愛されるよりも愛する喜び。

遠くから眺め、一方通行の恋に想いを馳せ、幸せを願う。

俺が本当にほむほむが好きなら、俺にできることは一つしかなかった。

彼女が笑顔でいられるように。

彼女の幸せを脅かすものを打ち破り。

彼女を守り続ける。

「神様が怒ったのも分かるな。だって許せねえよな。自己満足の幸せの為に奪うなんて」

俺は性欲を捨てた。

俺の信じた正義にそんなモノは不要だ。

「報われねえなあ、お前」

ジンは苦笑していた。

「だが悪くねえ生き方だ」

それで良いではないか。

幸せを願えるだけでも十分だ。

「安心しろよ。お前がその正義を貫く限り、俺は反逆し続ける。幸せの為に戦い続ける」

大好きだからこそ幸せに。

「頼むぜ、ダチ公」

「任せろよ、相棒」

俺の愛した全てのアニメに捧げる。

本当にバカで、お人好しで、ダメな奴のくだらない正義のお話

断章　くだらない愛（後書き）

恐らく次回はほむ×まど、杏×さや百合回になると思います。
マミ×シヤルはもう少しお待ちください。

ずっとずっと大好き（前書き）

バッドエンドは苦手です

ずっとずっと大好き

「もうこれで四体目だ……どうなっていやがる……」

流れ落ちる大量の汗を手の甲で拭い、手すりに寄りかかった。どんなに息を吸っても身体は酸素を欲した。

心臓は早鐘のように鼓動を刻んでいる。

「クソツタレ、魔力が尽きるぞっ！」

疲労を無視して食べ物を口に運んだ。吐き戻しそうになるのを堪え、鵜呑みにする。

見滝原市の魔術武装に取り掛かってから三日目の朝が来た。この朝日を拝むまでに四度に亘って魔女や使い魔の襲撃を受けた。

先は長いというのに、倦怠感がひどい。一つ一つの動作すら億劫に感じられた。一人で抱え込んでダメ、とマミさんから忠告を受けたばかりだが、生憎とこればかりは自力で達成しなければならぬ。

全体の工程はおよそ20%ほど終了したところだ。今の進度では確実に遅滞し、取り返しがつかなくなってしまう。

「力を借りるか……」

ジンはエバーチェンギングを一冊の分厚い本に変えた。黒いハードカバーの表紙には『Akashic Records』と書き綴られていた。

「あらゆる記憶の概念に命ずる。我が術を強め、効率を上げる式の記憶を呼び起こせ」

瞬間、脳が揺れた。

圧倒的な情報量が氾濫し、頭が割れるように痛い。目、耳、口、鼻、穴という穴から鮮血がしぶいた。気が遠くなるような年月から蓄積されていた森羅万象の記憶。人の脳では決して処理できるものではなかった。

紅く染まる視界の中に、開かれた頁の一文を捉える。

「これだな」

逆巻く情報の嵐の最中、見出した解を脳裏に刻んだ。ジンは本を閉じて乱暴に手放した。情報が断ち切られ、解放されるが頭痛は尾を引いていた。

休息を入れるのも惜しんで今し方、得た式を使用する。

「へえ……」

試しに術式を展開すると魔力の消費量が軽減していた。変換率も良くなっている。慢性的な魔力問題に一役買えそうだ。

「よっしゃ」

ジンはグッと拳を作って、微笑した。

＊

爆発的に高まっていた魔力の濃度が急激に低下していくのを、ほむらは感じ取った。ジンの作業場——？ワルプルギスの夜？の出現予想区域——より、やや離れた場所。

また彼は何かの術を使ったのだろうか。それが身をすり減らし、

どれだけの負担をかけているかが分からないような人ではない。

全てを理解^{わか}って、それでも迷わずに行動している。やがて訪れる死の恐怖すら噛み砕き、邁進していた。

彼の根底にあるものは何なのだろう。何が彼を衝き動かすのだろう。

「ほむらちゃん？」

立ち止まってジッと遠くを見つめる彼女にまどかは声をかけた。

「なんでもないわ。行きましょう」

ほむらは背を向けて歩き出した。

「まどか、今日は私の家に来て」

「え？」

まどかは少しだけ逡巡して首を縦に振った。

＊

街の中心の方で強い魔力を放っていたものが静かに消えていく。

杏子とさやかはそれがジンのものであることに気付いた。

「何やってんだ。あいつ」

「昨日の夜、別れてから結局帰ってこなかったけど……あんなところ

二人並んで公園のベンチに座り、りんごを齧る。

杏子は別れ際にジンがさやかに口走った言葉が妙に気になってい

た。ジンは何かを知っている。口ぶりからしてそれを話すのを嫌がっているようにも見えた。

「さやか」

「なあに、杏子」

さやかを見るたびに心が疼く。出会ってからそんなに長くも無いのに。

ずっと前から知り合い、否、大切な人だったような気がしてならなかった。

——さやかを幸せにしてやってくれよな。

ジンに呼ばれ、見滝原を訪れたあの日の言葉。見知らぬ魔法少女をいきなり、幸せにしてやれとは随分とおかしな話だった。でもこうして杏子はさやかと一緒にいる時間が多かった。

「ん。何でもない」

「何よ。気になるじゃない」

さやかが寄ってきた。肩と肩が触れ合い、吐息を感じるくらいに顔が近かった。

「お、おい……」

「？」

怪訝そうな表情をするさやかだが、ようやく気がついて真っ赤になって離れる。

「い、ゴメン」

「……別にあやまることはねえよ」

微妙な沈黙が降りる。そんな気まずさを紛らわすために杏子は、口を開く。

「さやか」

「杏子」

見事に被ってしまった。

「あのな」

「えっとね」

二度目。

今度はお互いに口を噤んで、暫し見つめ合う。さやかが吹き出したのをきっかけに二人は笑った。
ひとしきり笑って、それから――。

杏子はさやかに抱きついた。さやかもそっと抱き止める。

「しばらくこうしていいか？」

「いいよ」

＊

ほむらの住居に到着したまどかはイスに座る。

「まどか。前に話した事、覚えている？」

転生者、稲尾ジンが死の結末を秘匿しているようにほむらにもまた、秘密があった。

遠くて近い、三次元世界に住む鹿目剣に転生の決意をさせてしまふほどに悲しくて、つらい秘密が。

「覚えているよ」

ほむらは覚悟を決めた。

「私ね、未来から来たの」

ジンが異世界人ならば、ほむらは未来人だった。何回も繰り返し、絶望してきた。

今度こそ。淡い希望を抱いて絶望に負けぬように。

「変、だよね……気持ち悪いよね……でも……！」

ほむらは二の句を告げなかった。まどかがしっかりと抱擁していたから。

「まどか……」

「私、言ったよね。どんな秘密があっても嫌いになったりなんてしない」

その声はどこまでも優しく。その身体はとても温かくて。

「もう一回——ううん。何でも言えるよ。私はほむらちゃんが大好き」

「私も大好き。ずっとずっと大好き」

＊

この時、確かに彼女たちの運命は変わった。
だがそのしわ寄せは必ず起こる。
誰がそれを背負うのかは、神のみぞ知る。

＊

身体はもうとつくに壊れかけていた。

回復魔法でどんなに直しても気休めにしかなかった。今更、
魔力の消費量を抑えたところでまったくの無駄であった。

アスファルトに点々と血痕を残し、やがて血溜まりとなる。

「うっぜえなあ。こんなんで音を上げてんじゃねえよクソツタレ」

激痛も流血も度外視して魔法を使い続けた。

ぼとり、と右腕が取れた。断面を見ると溶解でもしたように、どろどろになっていた。

「チッ、このポンコツが」

ジンは舌打ちして蘇生魔法をかける。肩口から骨、血管、神経が再生されて瞬時に新たな右腕を形作った。

前述で消費量の軽減は無意味といったが訂正しよう。

燃費の悪い上級魔法が易々と使えるようになったのは、大した成果だ。

「呪いの効力が始めてやがんな……回復魔法と蘇生魔法を併用し、持続させれば身体の崩壊は食い止められるが……」

考えるのは止そう。二週間程度なら保てる筈だ。その後は楽になる。

死ぬだけなんだからな。

ワルブルギスの夜 襲来まであと11日

[illegible]

相棒も助かるかもしれない可能性を捨てて転生を望んだ。恐怖するなど筋違いだ。恐れるな。死から目をそらすな。進め。死へと猛進せよ。

全ては悲しい終わりを覆すためではないか。

ジンは努めて明るく振舞おうとしたが、胸に垂れ込める暗鬱さはついに消えなかった。

昼下がり。

初夏を感じさせる陽射しが、燦々と降り注ぐ屋上でまどかたちは昼食を摂っていた。

「あー、やっと見つけた!」

学校の外壁をよじ登ってきたジンが金網を飛び越えてきた。

「ジ、ジン! あんたどこから……」

「いやあ。だって入ろうとしたら警備員や職員に阻まれてよ。しょうがねえから屋上から侵入しようとしたんだ」

人を不審者扱いしやがって、と愚痴りながらジンはどっかりと座り込む。

「正義を志す俺が悪人に見えるわけが無かろう! あいつらの目ん玉は節穴か!」

「でもどうして今日は来てくれたの?」

マミさんが紅茶を片手に言う。

常にティーカップを手放さないとは……さすが。

「二人ぼっちは、寂しいモンで。下準備も済んだし、何かと暇なんだ」

「もう終わったのか? ギリギリまで作業は続くのかと思ってたぞ」
「俺が本気を出せばこの程度よ。あんこ、憧れてもいいぞ」

どや顔で睥睨するが見事に無視された。

「ジン君、お弁当は?」

「……あゝ」

「忘れたのね」

ほむほむの目が冷たい。完ッ全に買うのを忘れた。

「俺って、ほんとバカ」

「まったくだ」

リンクした意識から鹿目剣の嘆息まで聞こえてくる。

「うるせえ！ テメエはすっこんでろ！」

「え、あ、ゴメンなさい……」

ジンの気迫に驚いたまどかが頭を下げた。ほむほむの殺意が尋常ではなくなっている。

「ち、ちが！ まどかじゃない！ 俺の創造主だよ！ お、おい相棒！！ どうしてくれんだ！」

「俺は悪くねえだろ」

「テメーいつかぜってえぶっ潰す！」

結局、ジンが土下座して誤解を解き、まどかたちから少しずつ弁当を分けてもらった。

「あざっす！ このご恩は一生忘れません！」

「折角だから放課後、私たちと遊びに行かない？」

「え、そりゃあもう是非！ 何が何でもついていきまっせ！」

＊

空が夕焼けに染まる。周囲は飲食店やショッピングモールが乱立し、人がごった返していた。

「そーいえば街の中心に来るのは初めてだな」

ジンは途中のジャンクフード店で買ったハンバーガーを食べながら、物珍しそうに見渡す。

「お前、戦ってばかりだったじゃん」

鹿目剣の言うとおりであった。転生してからずっと魔女や使い魔と戦い、死の運命を書き換える為に東奔西走していた。こうしてまどかたちと遊ぶ暇もなかった。

「みんなとメシ食ってる時のお前、すげえ嬉しそうだった」
「……………」

「準備、終わったんだろ。今日からはもう休めよ」

「ああ」

「俺もしばらく休む。リンクは途切れるけど、心配すんな」

「身体、大事にしろよ」

「お前もな」

視覚を通じて相棒が笑いかけた。俺も親指を立てて、笑った。

「またな、ダチ公」

「おう、相棒」

プツ、と音がして繋がっていた意識が切れる。

「ジン、何してるのー！ 置いていくよー！」

先を歩いていたさやかが呼ぶ。

「悪い！ 今行くよ！」

ああ、そうか。

「何を話してたの？」

「男同士の友情を語り合ってたんだ」

俺は、ずっと前からみんなと一緒にいたいと思っていたんだ。

「ジンってそっちの気があるのか？」

「あんこ、俺はそんなじゃないぞ。むしろ女の子同士がだな……」

叶わない願いを抱いてしまったんだ。

「女の子同士？」

「いいか、世の中には百r」

「まどかに変なことを吹き込まないで」

自らの立場を弁えず——否、弁えていながら。

「でも俺はありだと思っけどなあ」

「あら、意外と純情じゃないのね」

「マミさん、俺の心は真っ白です。穢れなんて一点もありません！」

心までは誤魔化せなかった。

「なあ俺、さ」

「どうしたのジン君」

「何かしら？」

「ポッキー欲しいのか？」

「ジン？」

「稲尾さん？」

死にたくないって――。

「みんなに逢えてよかった」

願ってしまったんだ。

ワルプルギスの夜 襲来まであと10日

それが俺だ（前書き）

毎日更新を目指しています。

それが俺だ

五日目の朝が来た。

寝床のカプセルホテルに設置した目覚ましの音で覚醒し、のっそりと起床した。俺は大欠伸をして目をこする。寝間着のジャージを脱いで半袖とカーゴパンツに着替える。野球帽を被ろうとして、必要がないことを思い出した。

洗濯物を引っつかんでカプセルホテルの隣にあるコインランドリーへと向かった。ほとんどの洗濯機が稼働中だったが運よく空いているのを発見し、ぶち込む。洗っている間は暇なので部屋に戻ろうかと思ったが忘れそうなのでやめた。備え付けの少年漫画を読み始める。洗濯が終わった。丁度、いいところだったのだがまた明日も洗いに来るのでその時にまた読む事にした。

一旦、カプセルホテルに洗い終わった衣服を置いてから外に出た。見上げれば今日も底抜けの青空が広がっている。綺麗な空だった。

黒猫——青空——……。

激しい既視感。何かが脳裏で疼く。だがこれは俺の記憶ではない。相棒の記憶が混じっている。

「リンクしてる間に聞いとけば良かったな」

どこに行こう。

まどかたちは学校だし、相棒とのリンクは切れているし。

「僕でよければ話し相手になるよ」

俺の前にインキュベーター孵卵器がいた。

＊

「ぶっちゃけお前と話す事なんてないけどさ」

俺インキュベーターと孵卵器は公園のベンチに腰を下ろした。

「まどかが契約しないから血相変えて交渉にも来たのかよ」

「まどかの件はもう諦めたよ」

「ほお……」

相変わらずの無表情から意図を読み取るのは難しい。しかし、こいつはよからぬ事を目論んだのだろう。

「お前、あんなに契約させたがってたのに、こういう風の吹き回しだ」

「君がいるからさ」

なるほど、今度は俺の力に目をつけたのか。

「俺は男だ。お前も男とは契約できねえんだろ」

「でも君の力は桁違いにすごい。まどかや？ワルプルギスの夜？よりも恐ろしいものだ」

「何が言いたい」

「僕に力を貸してよ」

「宇宙存命のためか」

まどかすらも凌駕しているとは。相棒は俺にどれだけの妄想力を注ぎ込んだんだ。

「フン、テメエは終末で滅ぼしてやるつもりだったが……」

宇宙が緩やかに崩壊へと進んでいるのも事実だ。まどかたちの世界を壊させるわけにもいかない。

俺はインキュベーター孵卵器の首を掴み、締める。

「気が変わった。今ここで潰す」

俺を中心に鎖が伸び、お互いに絡み合い、風景に溶け込んでいった。

「空間属性の魔法、閉鎖鉄鎖だ。俺とテメエのいる空間は隔離された。どんなに暴れても外界に影響は出ない」

「無意味に潰されるのは困るだけだな」

「テメエがまどかたちにしてきた仕打ち、忘れてねえぞ」

腕に力が一層、かかる。この時点で普通の人間なら首の骨が折れる。

「テメエはママさんに何をした。さやかに何を教えた。あんこに何を言った。ほむほむにどれだけの苦しみを与えた。まどっちを何回、泣かせた」

ギリツと歯を食いしばった。そうやって抑えていないと、理性がぶっ飛びそうだ。

「君たちはいつもそうだ。たかが個体にこだわり、感情的になる」
「テメエは言ったな。魔法少女は家畜だと。宇宙を救うためのエネルギー源だと」

「そうさ。君たち人間だって生きる為に生き物を殺している。なの

に僕を責めるのはおかしくないかい」

「いただきますって言葉、知ってるか」
「？」

「ごちそうさまって言葉、知ってるか」
「何を言っているんだい」

「テメエの言うとおり、人間は生きる為に家畜を殺している。ただけどな、人間はテメエらとは違う」

普通に生きてきた女の子に宇宙の為に死んでくれ、だと。

「人間はなあ！ 生き物を殺して、それをメシにして食う前に心を込めてお礼の言葉を言うんだ！！ 命をいただきます！ ごちそうさまでしたってな！」

エントロピーだとか、熱力学だとか！ 宇宙を守るなら一人の命なんてどうだっていいのかよ！

「心ないテメエらにそれが言えるのか！？ 心を込めて、死んでいく魔法少女たちに言えるのか！？ 言えねえよな！ 感情を不要と抜かして捨てたようなお前らに！！」

たとえば言えたとしても俺はそれを許さない。死んでいい命なんて、この世界にはない。そもそも感情があればこいつらもまともだったのかもしれない。

「わけが分からないよ」
「それが分からねえようじゃ、俺たちにはぜってえに勝てねえ！！」

インキュベーター
孵卵器を地面に叩きつけた。アスファルトが砕け、陥没する。

「……お前は嫌な奴だ。でも宇宙の為に頑張っていたのは認めるぜ」
呼吸を整え、脱力してベンチに座した。

「宇宙も俺が守るさ。第二法則だろうが宇宙の真理だろうが反逆してやる」

「無理に決まってるじゃないか」

「俺を誰だと思っている？ ナメんな」

新たにやって来たインキュベーターがひしゃげた、前の身体を喰らう。

「宇宙の真理に反逆せし戦士」

自分を指差し、相棒が名付けた異名を告げる。

「それが俺だ」

閉鎖鉄鎖が解除され、破損したアスファルトが元通りに修復する。

「じゃあな、インキュ……いやキュウベえ」

「初めて僕をもう一つの名前で呼んだね」

「テメェに感情があって、もっといい奴だったら最初から名前で呼んでやったよ」

俺は振り向かず、そのまま立ち去った。

＊

気の向くままに彷徨っていると、川原にたどり着いていた。

「暇だな」

人気は少なく、水のせせらぎと風の音だけが響く。

「寝るか」

心地よい風を浴びながら土手に寝転ぶ。睡眠をとっていなかった反動が出たらしく、眠気が収まらない。

俺は睡魔に身を任せ、瞳を閉じた。

＊

——ハンギヤクシャヲ シュクセイセヨ

＊

「っうお！」

俺は飛び起きた。寝汗がひどく、服がびしょ濡れだった。太陽は半分以上、地平線に沈んでいる。

「何なんだ今のは！！」

夢、なんて生易しいもんじゃない。背筋に悪寒が走るほどにリアルで不気味だった。

「チッ、これも呪いの一つか？」

半日近く眠っていたにも関わらず、眠気も疲れも取れていない。
変な夢のおかげですこぶる不愉快だった。

「あー！ 朝飯と昼飯食い損なった！」

最悪で、最低だった。

「しゃーねえ、夕飯はちと奮発して高いモンにでもしよう」

ワ
ル
プ
ル
ギ
ス
の
夜
襲
来
ま
で
あ
と
9
日

あなたを一人にさせないわ

六日目の朝。

いつものように目覚ましの音で目を覚ました俺は、洗濯を済ませ、朝飯を食い、外に出た。

本日も快晴、雲ひとつない。

「黙ってるわけにはいかねえよな」

魔法少女のシステムの真実。

魂と肉体を切り離し、ゾンビのようにしてしまう。痛覚も失い、身体がぶっ壊されても戦い続けることができる。

魔法を使い、ソウルジェムが完全に汚濁した時、魔法少女は魔女と化す。その魔女を斃すために新たな魔法少女がやってくる。

結果、悪循環となり、多くの悲しみを作ってきた。

「今日、話そう」

俺は一人、首肯した。

＊

夕刻までジンはゲームセンターやネットカフェで時間を潰し、下校してきたまどかたちを引き止めた。

「大事な話がある。みんなに集まってもらいたい」

場所はやはり、マミさんの自宅であった。

「全員、集まったな」

ジンは重々しく息を吐いた。正直、今でも話したくはない。正史の流れではさやか的心を壊した根本の原因だ。

「その時が来たんだ」

さやかがまっすぐにジンを見据える。その瞳に迷いはなかった。

「魔法少女の本当の姿を、話す」

ジンは丁寧にはっきりと伝えていく。魔法少女の誕生と末路、キュウベエの秘密。

解説している間、一同は無言で聞いていた。恐れていたさやかやマミさんの乱心は免れたようだ。

「……以上だ」

胸くそ悪い。希望で無垢な少女を釣り、絶望へと沈ませる。外道という言葉すら生温い。

「だから俺は、そのふざけきったシステムを跡形もなくぶち壊す」
「どう、やって？」

杏子に寄り添いながらさやかが言う。

「秘術、アリューション・ラーゴウト。魔女、魔法少女問わず魂を肉体へと還元する、光の力だ」

お菓子の魔女や影の魔女で使っただろ、とジンは両手をパン！

と叩いた。

掌が淡い光に染まる。

「魔女相手に使う時は魔女化を解除する呪文も併用するんだ。魔法少女に使う場合はこうするだけな」

「じ、じゃあ早く私たちにも！」

マミさんが身を乗り出した。

「……」

「稲尾さん？」

「それは、待って欲しい」

ジンは暗い面持ちで口を開く。

「魂を肉体に還元、つまり普通の人間の身体に戻るんだ。魔法少女としての力はあるけど、もう痛みに対して無敵ではいられなくなる」
「！」

今まで戦い抜いてきた彼女たちなら分かるだろう。どんな形であれ、その不死身に近い肉体によって数々の死闘に耐えられたのだ。

「ワルプルギスの夜？」という最強の魔女との戦いを控えた今、元の身体に戻って無事で済む保証はない。

むしろ死亡する確率が跳ね上がる。

「魔女化して後がない時は俺も秘術を使わざるを得ないが」
アリユーション・ラーゴウト

まどかたちは無言になる。

俺は最低だよな。元に戻す事を条件に戦わせているようなものだ。

「ゴメン……嫌だったらそれでいいんだ。今すぐ、元に戻す。最終決戦も俺が何とかするから」

うな垂れるジンのでこを杏子が引っ叩いた。

「痛……」

「何、辛気クセエこと言ってんだよ。あたしらの仲に遠慮はいらねえだろ」

「そうよ。むしろジンには一杯カリがあるんだからね。少しは返さない！」

杏子とさやかが笑顔で。

「あなたを一人にさせないわ」

マミさんが微笑んで。

「稲尾ジン、私たちがそれくらいで逃げると思っているのかしら？」
「ジン君。私もほむらちゃんもさやかちゃんも杏子ちゃんもマミさんも、ジン君の友だちだよ。だから安心して」

ほむらとまどかが手を握ってくれて。

嗚呼、決意が揺らぐ。死をも恐れない筈だったのに。
死にたくない。まどかたちと一緒に、生きていきたい。
ハッピーエンドの世界で生きたい。

芽生えた想いは一秒毎に強くなっていく。

転生者という身分も忘れてしまいたい。

だが神も死神もそれを許さない。

世界の調和を乱す転生者に生きる権利は無かった。

うたかたの夢を抱き、そして殺されるだけの存在だった。

転生者も身勝手に生きていた。

物語を思うがままに書き直し、二次元人を陵辱していた。

だから死に様は無様なものだった。狩人と呪いに罅られ、命乞いをし、死神は嗤ってそれを踏みにじり、殺した。

俺も同じように死んでいく。

転生した時点で判っていた。相棒も俺も、まどかたちを守って死ぬつもりだった。

なのに。

なのに、生きたいと思っていた。

まどつちと、ほむほむと、あんこと、さやかと、マミさんと一緒に生きていきたい！

ずっと友だちでいたい！

どうしようも抑えられなかった。

取り繕ってもごまかしても言いつくろっても。

この気持ちは日に日に強く、強くなっていった。

俺はどうすれば――。

「そうか。ありがとうな、みんな。その代わり俺は絶対に守る。一人も死なせないから安心してくれ」

こうして話し合いは終わった。一緒に夕食を食べる事を勧められたが断っておいた。

今は一人で考えたかった。

生きる為にもがき足掻くべきなのか、死を受け入れて死ぬべきなのかを。

ワルブルギスの夜 襲来まであと8日

じゃあな、佐倉杏子

七日目、？ワルプルギスの夜？襲来まで一週間を切ったというわけだ。

俺は無心に天井を眺めていた。一睡もしていないが、今は気にならない。生きても死しても俺は悔いるのだろう。

生きれば、俺が生きてしまった事により世界は未曾有の変革を遂げる。俺という反逆イレギュラーが存在するだけで世界は軋み、新たな道を進む。それが良い方向へ行けばまだ報われる。しかし最悪へ——結果的に？ワルプルギスの夜？よりも強大な魔女を産んでしまうかもしれない。

それほどまでに、俺は世界にとって害悪なのだ。まどかたちを守る理念にも反する。

俺が死ねば——死ねば、世界はハッピーエンドを迎える。誰も死なない、誰も犠牲にならない、誰もが笑っていける。三文芝居のような、笑ってしまうくらいに最高のハッピーエンドを。

だが俺は死を恐れ、まどかたちと共に生きたいと望んでしまった。愚かしい考えだとは百も承知だ。忌み嫌われている転生者の立場も忘れてはいない。

頭では理解していた。けれど心は言う事を聞かない。生きたい、と実にふざけた主張を掲げている。認めたくないが本気で彼女たちに惚れたらしい。

バカバカしいと鼻先で笑ってもいい。俺もそうしたい。

だって可笑しいじゃないか。神から見捨てられ、生きる権利を剥奪された転生者クズが二次元人に恋をした？

大体、その権利を奪われたのも転生者の吐き気を催す行いが原因だ。俺もそんな下種なゴミ溜めとは違うが、転生者であることは事実である。

今までにまともな転生者はいなかったわけで、これからも現れな

いであろうと決められているわけで。

転生した俺も肅清の対象に入った。申し開きなんてする気もない。

結局のところ、俺一人では答えは出せなかった。

まどかたちに相談したら俺が呪いを解けていないことがバレてしまふ。ほむほむは真実を知っているものの、彼女に負担はかけたくない。

「相棒頼み、か」

俺は意識をリンクさせる。多分、繋がらないと予想したが杞憂だった。

すんなりと俺と相棒の意識はリンクした。

「なんだよ。しばらくリンクすんなって言っただろ」

不機嫌そうな相棒の声が響く。寝起きらしい。

「悪い。でも相談があつてな」

「お前から相談なんて、珍しいな……マジか？」

俺は頷く。

「言ってみろ」

芽生えた生への執着と彼女たちへの一方的な想いを、相棒に打ち明ける。

相棒は少しの間、無言だったが唐突にまなじりを抑え、舌打ちした。

「しょうがねえよそれは」

「それで済む問題じゃねえから、俺は！」

「落ち着け。お前の気持ちはウソでも何でもねえ、真剣マジの想いなんだ。ヘタすりゃ、お前——」

かつての転生者クズ共と同じ過ちを犯すぜ。

「ツ！ ざけんな！ 俺はあんなキチガ〇とは違う！！ 俺はそんなじゃねえ！！」

「だから落ち着けよ。俺もそっち方面に関しては奥手だ。つーか興味ねえ。ぶっちゃけ、どうしたらいいのか分からん」

そうだった。そんなモノに一々、発情している暇も余裕も無かった。

俺たちは理性のみによって動く。くだらない本能など不要だ。
インキュベーター

孵卵器インキュベーターが感情を捨てたように、俺たちは性欲を捨てた。睡眠欲と食欲が強くなったが、大した問題ではない。

でも恋を抱く程度のモノは残っていた。いや、捨て切れなかったのかもしれない。

「……なあ、ダチ公」

「何だよ」

「俺たちはまどつちもほむほむもさやかもあんこも、大好きだよな」
「……ああ」

「守ってやりたいよな。ハッピーエンドにしたいよな。そのために俺らは全てを棄てたんだから」

「さつきから当たり前の事言ってんじゃ」

「でもよ、いくら好きだからって言って、ムリヤリに干渉したらどうなる？」

「世界は狂う。誰にも予測できない、最悪の結末を迎える」

「だったらもう答えは出てんじゃないか」

戦え。守れ。そして死ね。

「俺らが生きてりゃ、みんなを笑顔にはできない」

愛するものに振り向いてもらえなくても、それで幸せなら。

愛するものの隣に居るのが自分じゃなくても、それで幸せなら。

愛するものが遠くに行ってしまったても、それで幸せなら。

「喜んで立ち去ろう」

「……お前ってほんとバカだな」

「バカでいいじゃん。天才なんて、疲れるだけだ」

「お前のような創造主で良かった」

「何言ってるんだよ。お礼を言うのは俺のほうだぜ」

我が心の迷いは晴れた。

もう何も恐れるものはない。

彼女たちの未来を切り開き、死んでいこう。

「？ワルプルギスの夜？まで一週間だっけ？　ガンバ、だぜ。ダチ公」

「お前も手術に負けんなよ。相棒」

リンクは途切れた。途切れる瞬間、視覚を通じて相棒の姿が流れ込んできた。

相棒は泣いていた。

相棒も怖いんだ。死ぬのは嫌なんだ。それでも強がっていたんだ。

「バカだよ、お前は」

＊

少し遅めの朝飯を食べて俺は外に出る。行くあてもなく、ネットカフェで適当にネットサーフィンやネットゲーを楽しみ、昼飯を食べた。

ネットが飽きたので今度はゲームセンターへ足を運んだ。格ゲーをプレイしていると肩を叩かれた。

「今、手エ離せないから！ 待ってくれ！」

負けた。コマンド入力に失敗した。ボタン一つで超必殺技が出せるような格ゲーは無いのか。

「あ、あんこ」

「よっ」

＊

「学校、どうした？」

「あたしは元からあの学校の生徒じゃないよ」

「え？ でもこの前、屋上にいたけど」

「あれは無理矢理、さやかに連れてかれたんだ！ 制服貸せば良いってモンじゃないだろ、ったく……」

「バレなかったのかよ」

「全然。平気だったよ。どうなってるんだあの学校」

「おかしいな、俺は警備員と職員に追い回されたというのに」

女の子は見逃すけど男の俺はダメ、と。

一回、校門を爆破してやろうか。

「ジンは普段、何してるのさ」

「俺？ ネカフェかマンガ喫茶、ゲーセンに入り浸ってんぞー。良
い子みんなはマネすんなよー。社会的に終わるぞー」

「誰に言ってるんだよ」

「ま、細かい事は置いといて、せっかくだし俺と格ゲー勝負しねえ
か？」

「いいぜ」

結果は俺の惨敗だった。強いってレベルじゃねーぞ！

「もうダメだ…おしまいだあ…」

俺はがっくりと膝を落として落胆した。一応、相棒のスペックを
引き継いでるから自信あったのに。

「そ、そんなに落ち込むなよ。ほら、何か驕るからさ」

「マジで！？ サンキュー！」

「単純な奴…」

その後、あんこにアイスを驕ってもらい、ゲームセンター内を巡
った。

「おっ、あれはUFOキャッチャーじゃないか！ よっしゃ、見て

ろ！ さっきの汚名挽回や！」

「汚名は返上じゃないのか？」

「こまけえこたあいんだよ！」

俺は早速、プレイを開始したが。

落とせない。景品がどうやっても落とせない。

「ジン、センスないな…」

「あ、あんこ。頼む、代わって…」

「しゃーねえなあ」

手馴れた動作で見事に景品を一発で落とした。

「あんこちゃんマジ聖女！ あざっす！」

「な、何言ってるのさ！」

俺は景品の箱を開けるとストラップについた、デフォルメ調の動物が三匹、入っていた。

その内の二匹をあんこに渡した。

「俺とさやかとあんこ。三人で分けられるな」

「あ、ありがと」

「お礼を言うのは俺だぞ。落としたのはあんこなんだからな」

＊

すっかり日が暮れた見滝原の街中を俺とあんこが歩く。
今、彼女はホテルを借りてるらしい。俺と同じだな。

「じゃ、俺はこっちだから」

「今日は楽しかったよ。また遊ばないか？」

「ああ。今度はさやかも誘ってな」

「また、な！」

あんこの後ろ姿を見送りながら、俺は胸の高鳴りを感じた。

周りに聞こえてしまうんじゃないかって、くらいに心臓の音が大
きい。

顔が熱い。身体が火照っている。

あんこが好きだ。あんこ、あんこ。俺のそばに居て欲しい。俺を
見て欲しい。ずっとずっと――

――そしてそれは、唐突に冷めていった。

俺は、もうあんこに対して恋愛感情がなくなっていた。

「呪いに、感謝する日が来るとは……」

俺のくだらない、あんこへの恋心を呪いが食い潰した。どうやら
想いが急激に高まると発動するらしい。

さやか、マミさん、ほむほむ、まどっちへの想いもこれなら消せ
そうだ。

俺は繰り返し呟く。これが正しいのだと。間違えてなど、いない
と。

「じゃあな、佐倉杏子」

一方通行の片思いに決別を告げる意味を込めて、俺は彼女のフル
ネームを呟いた。

ワルプルギスの夜 襲来まであと7日

幸せになれよ、美樹さやか

八日目の朝日を見てから俺は、さやかの家の前で待っていた。手首には昨日のストラップをつけている。

「ジン？　どうしたのこんな朝から」

さやかは驚きながら俺に近付いてきた。
胸がかすかに高鳴る。

「さやか。今日は学校サボって俺と遊ばないか」

「え、えー!？」

「ダメ、か？」

「そ、そんないきなり言われても……困るっす」

「一日、今日だけだ。どうしても今日はさやかと一緒に、いたいんだ」

「うーん……ま、いいかね。今日だけなら」

「ありがとう、さやか」

＊

俺とさやかは並んで歩道を歩く。

「あ、ジンのつけてるそのストラップ、あたしと同じだ」

「おう。昨日、あんこがUFOキャッチャーで取ってくれたんだぜ」

「ふーん、そうだったんだ」

さやかは携帯につけたストラップを見せてくれた。

「それで、どこに行きたいの？」

「まずはどっかでメシ食おうぜ。俺、まだ食ってねえんだわ」
「オッケー」

手近なファーストフード店に入り、席に座る。さやかは向かい側に。

俺はハンバーガーとポテトを頼み、さやかは朝飯は食べたのでドリンクだけだった。

「これ食ったら……カラオケでいいか？」

「お、いいね」

俺はさっさと朝飯を平らげてファーストフード店を後にした。
商店街の近くにあるカラオケに入る。

「じゃ、最初は俺が歌うぜ！ 俺の歌を聴けえええッ！！」

俺は主に熱血系のアニソンしか知らないので、それしか歌えなかったがさやかは色々な曲を歌っていた。

まあ、上条さんが入院中の時は様々なCDを持っていたので、当然か。

「さやか、歌上手いな。俺は絶叫の熱血ソングしか歌えねえのに」

「そ、そうかな」

「自信持てよ。今度は杏子も誘って、驚かせてやれ」

「杏子と……そうだね。もちろん、ジンも来るよね？」

「ああ、約束だ」

俺はさやかと指切りをした。

＊

俺とさやかはカラオケを十分に堪能し、喫茶店で一休みをする。想いが最高潮になるまでもう一押しだな。

「次はどこに行くのかな？」

「映画」

「どんな映画？」

「魔法老年よしお☆マジカ」

「な、何それ……」

「最強の老魔導士が魔法少女たちをハッピーエンドに導く話だ。最高に燃えるぞ」

「ジンの趣味が良くわからないよっ」

＊

スクリーンには年老いた男が杖を振り翳し、魔法少女を殺しかけていた敵を一撃で灰燼に帰すシーンが映し出されていた。

「よっしゃ！ いけえ！ ブチかませ！」

俺は、俺とさやか以外に客がいないのをいいことに、歓声を上げる。

隣に座っているさやかも目を輝かせて見入っていた。

「結構、面白いだろ。正義貫く王道ファンタジーって感じだよな」

「やっぱ正義の味方ってカッコいいぜ！」

正義の魔法少女を目指す。原作でもそう言ってたな。正義を貫くのは誇っている。

だけど、周りが見えなくてはダメだ。さやかを思ってくれる仲間
は、いつも傍にいる。

「正義の味方は一人じゃない。それを忘れるな」

「え？ 何か言った？」

「いや、何も。おっ！ そろそろ名場面来るぞ！」

「それは期待するしかありませんなあ！」

＊

映画を見終わった俺たちは公園のベンチに座っていた。日は暮れ
て、夜の帳が降り始めていた。

「学校なのに無理矢理で悪かった」

「ううん。今日は楽しかったよ」

「そうか」

鼓動が早くなってきた。さやかが、いつも以上にかわいく見えた。

「……じゃあ、帰るね」

「ああ。あまり遅くなると親が心配するモンな」

さやかはベンチから立ち上がって、手を振った。

俺も手を振り返し、笑う。

「っ」

想いがあふれ出した。濁流のように、怒濤のように、氾濫した。
心は狂おしいほどにさやかを求めていた。

行かないでくれ――。

脳内をさやかとの思い出が駆け巡る。

消えろ！！ 消えてしまえ！！ 俺如きが恋愛感情を抱くな！！

俺は！！ 俺は！！ 転生者なんだ！！

俺は遠のいていくさやかに、手を伸ばしかけて、下ろした。

さやかへの想いは、潰えた。

二次元人と結ばれた転生者なんていない。みんなゴミのように途中で死んだ。ざまあ。

「幸せになれよ、美樹さやか」

彼女の幸せを願い、俺は彼女のフルネームを呟いた。

ワ
ル
プ
ル
ギ
ス
の
夜
襲
来
ま
で
あ
と
6
日

これからよろしく、巴マシ(前書き)

これって鬱展開なんですかね？

これからよろしく、巴ミミ

九日目。

俺は目を覚まし、決められた順序で、機械的に行動した。気がつけば俺は普段着に着替え、外に出ていた。

最近、無気力というか、どうにもぼんやりする事が多くなった。それが当たり前なのだが、ついこの間まではもっと楽しかったようにも思えた。

何だろう。俺は何かを忘れてしまった、ような。

思い出せない。思い出そうとすると、ひどく気だるくなる。

あんこ、さやか。

前はこの二人の名前を聞くたびにときめいていた、のか？ 分からない。

どうでもいいや。彼女たちが幸せなら、俺も幸せなんだ。

幸せなんだ。

＊

俺はミミさんのマンションの前にいた。ミミさんは学校に行ってしまったらしく、昨日のさやかのようにには誘えなかった。

もつとも、ミミさんはまじめというか、そういうのは断りそうだが。

太陽はまだ東の空にある。下校時刻までは相当の時間があつた。時間を潰す必要があつたがネカフェ、ゲーセン、マンガ喫茶に行くのも飽きていた。

何もする事が無かつた。

「魔女もほとんど元に戻せたし、魔女化の兆しのある魔法少女には手を打っておいたからな……」

つまるところ、俺と相棒の役目はほぼ全うしつつあった。残すのは？ワルプルギスの夜？の救済のみ。

「淫獣の野朗は……死に際に俺の全生命エネルギーを宇宙にブチ込んでやれば、宇宙は救われる。そうすれば奴も黙るだろ」

もし、その後もまどかや他の少女たちに手を出せば――。

「後継者が、必要だな」

俺と相棒の遺志を引き継ぎ、死を恐れずに戦い、まどかたちを守る最強の後継者が。

だがそんな男はいない。少なくとも俺と相棒と同じタイプの男はいない。酒池肉林の二次元世界で、命張るバカはいない。

「……………」

俺と相棒以外は。

「…………クソ」

俺はギリッと歯を食いしばった。

＊

ようやく太陽が西に沈み始めた。俺の足元には食い終わったコンビニ弁当やスナック菓子のゴミが散らかっていた。

「稲尾さん？」

「こんにちはーす」

ママさんが帰宅してきた。俺は挨拶をしてゴミを回収しながら、
尋ねる。

「あの、今日ちょっと家に上がらせていいッすかね？」

「あら。どうしたの？」

「えー、なんつーか今日はママさんと話したいなーって、ハハッ」

理由としてはイマイチだったか？ 断られたらどうしよう。

「いいわ。ついてきて」

「あざっす！」

ママさんに連れられて見慣れた自室に通された。俺がテーブルに
座っていると紅茶とケーキを運んでくれた。

「あ、ども」

俺は早速、ケーキを食べる。思ったとおり、おいしかった。

「うまいっすね、このケーキ」

「ありがとう」

会話が続かない。話題を振ろうにも、持ち合わせていなかった。
このままでは想いを最高潮にする事ができなくなってしまう。

「あ、あの！ TVゲームやりませんか！？」

「え？」

いくらなんでもこれは無かったか。男友達ならまだしもマミさんは女性だし、ゲームとか興味なさそうだし。

「いいわ」

「あ、あざっす！」

「でも私はTVゲーム、持ってないのよ」

「ご心配なく！」

俺は魔法陣を空に描く。パチン、と指を鳴らすと魔法陣からWi
〇やP〇3が出てきた。

「便利ね」

「へへ、俺が確立したんですよ。この魔法」

＊

最初は地力や経験の差で俺が勝っていた。しかし先輩魔法少女は伊達じゃない。

現在では俺よりもずっと強くなってしまった。

「さすがっすね……マミさん」

俺はため息と共に肩を落とした。

「ふふ、稲尾さんもなかなか強いと思うわよ」

「いやあ俺なんてまだまだ弱いっすよ。世界には強い奴らがたくさんいます」

ふと、時計を見ると針は七時を指していた。長居した割には気持

ちは未だ、最高潮に達していない。

「あら、もうこんな時間なのね。ご飯、食べていく？」

「良いんですか？」

「ええ。一人分、増えるだけだから」

そう言ってマミさんは台所に入ってしまった。

原作では孤独だった。まどかやさやかと一緒に魔女狩りツアーをやったのも、全て寂しかったからだ。

でも、マミさんは一人じゃない。みんながいる。これから先輩として、頑張ってください。

「お待ちせ」

マミさんが作ってくれたご飯を食べ、少しだけ他愛もない会話を
する。

もっと話したいけど、時間だ。

「俺、この辺で帰ります」

「もう？ 残念ね」

俺は立ち上がってゲームを魔法陣の中に放り込み、手を止めて携帯ゲーム機をマミさんに差し出す。

「これ、上げます」

「どうして？」

「俺に勝った証です。受け取ってください」

「分かったわ」

マミさんは携帯ゲーム機を受け取った。

「今日はありがとう。マミさん」

心に満ちるのはマミさんへの想い。苦しくて、たまらない。マミさんと離れたくない。

嫌だ。この気持ちを失いたくはない。マミさん、俺を助けて――。こんな、ひどいよ。

「お邪魔しましたあ！」

「いつでもいらっしゃい。歓迎するから」

玄関のドアが閉じた。

俺は自嘲する。くだらねえ事でピーピー、騒ぐんじゃねえよ。俺自身の甘さにウンザリだ。

巴マミへの想いは呪いが喰らってくれた。

「これからもよろしく、巴マミ」

先輩としてがんばるその姿に憧れて。俺は彼女のフルネームを呟いた。

＊

俺はゲームセンターの中をふらふらと歩いていた。

「あれは……」

ふと、俺の目に入ったのはプリクラ機だった。

「……………」

俺は金を入れて台の上に立つ。七人用の、一番大きいサイズを選択する。

もし俺がこの世界の住人で。

「ハイ、チーズ」

機械的な声がしてパチリ、と俺の姿が写りこんだ。
まどかたちの友だちだったら。

「笑顔が硬いな」

プリクラ機からプリクラが出てきた。写った俺の顔は無理矢理、
作った笑顔だった。

きっとみんなと一緒に写れたんだろうなあ。

「バカバカしい……」

視界がぼやける。

俺の両隣の空間に、まどかたちがいてくれたら。
目頭が熱くなり、液体がボロボロと零れ落ちてプリクラの上に水滴を残す。

「ふざけんなよ。俺は——」

死ぬんだ、とは叫べなかった。

「クソ……！ クソオツ……！」

早く、早く呪いが俺の中に芽生えた想いを消してくれなくては、

抑えられなくなる。

頼むから、消してくれ。こんなに苦しいのはゴメンだ。
迷わないって決めたのに。

「消えろ おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお——!!」

ワ
ル
プ
ル
ギ
ス
の
夜
襲
来
ま
で
あ
と
5
日

ありがとう、鹿目まどか（前書き）

友だちにこの小説の主人公を話したら「すげえ鬱展開だな」と言われた。

やっぱ主人公だけ鬱展開なんですかね？

ありがとう、鹿目まどか

十日目。

いつ目を覚まして、洗濯を終え、普段着に着替え、朝飯を食べたのだろう。

ハッとした時には俺は外に出ていた。

「俺……」

気のせいではない。この奇妙な物臭さ、憂鬱さは明らかに俺の気概を殺んでいる。

加えて軽い記憶障害のようなものも併発していた。無意識というか、思い出せないことが多くなっていた。

呪い、の影響と見ていい。転生者の個々によって呪いの効果は異なるといわれ、どんなものなのかは実際に発生しないと分からない。断言はできないが俺の呪いの効果は、二次元人への想いの破壊と存在の完全抹消と類推できる。

だが自身の精神面の不安定と記憶障害は説明がつかない。呪いの効果と判断するのが妥当だが、いかなせん納得がいかなかった。

理由は、ない。だけど直感が告げている。

——俺は、大切なモノを失いつつあると。

何だ。俺は何を捨てたんだ。

あん……こ……さやか……マミ、さん……。

痛い。彼女たちを想うと心が、頭が痛い。

「つく」

思い出せ……俺の転生の根源にある想いを……。

一瞬、鋭い激痛が頭を貫いた。

俺は……。

いやもう面倒だ。忘れたという事は、どうせその程度の事だったんだ。

思い出す価値すら、ない。

＊

俺は見滝原中学の前に立つ。校門を一足飛びで乗り越え、校門に着地した。

きよろきよろと見渡すと、丁度まどかたちのクラスは体育らしく、トラックのところにいた。

「まどっちゅー！」

大声でまどかを呼び、手を振った。まどかは驚いて、若干引きながらも手を振り替えしてくれた。

かわええ……さすがほむほむの嫁。

「こらあ！ またお前かあ！」

「またあなたですかっ！」

血相を変えた警備員とまどかの担任（早乙女先生だっけ？）が走ってきた。

「げえっ！ やっぱこの学校、女の子には優しくて男はダメなんだな！」

俺は振り向き様に逃げ出し、ポケットに手を忍ばせた。追っ手が風下に来るように、さりげなく誘導し、ポケットからけむり玉を出して投げつけた。

パン！ と派手に音を立てて白煙が濛々と舞う。

「H A H A H A H A ! 俺を捕まえるなど、100年早いわ！」

今の内、と俺はまどかに近づいた。

「今日の放課後、ヒマか？」

「え、うん」

「よっしゃ、じゃあ俺とデートしよ」

「え!？」

「……あなたは死にたいのかしら」

「へあっ!？」

俺の背後にいつの間にかほむほむが立ち、凄まじい殺気を放っていた。

「こ、言葉の綾だよ！ まどっちはほむほむの嫁！ そうだろ!？」

「……もしまどかに何かあったら」

「あったら？」

俺はごくり、と唾を飲み込む。

「気をつけることね」

ほむほむは黒髪をサッと手で払い、去っていった。

「うひゃゝ、ほむほむの眼力マジパネエ……生きた心地がしねー……」

「ジン君、放課後は……」

「あ、オツケー？」

「うん。あんまり遅くまで遊べないけど、いいよ」

「分かった。じゃ、俺校門で待ってるから！　また会おうぞお！」

しゅたつと手を上げ、俺は全速力でまどかから走り去った。

＊

夕刻。下校する生徒を何気なく眺めながら俺は校門に寄りかかって、待っていた。

「お、お待ちせえ」

まどかが走ってくる。俺の元にたどり着くと、荒い呼吸を繰り返していた。

「わざわざ走らんでも、俺はいつまでも待ってるのに。大丈夫か、おい」

「人を待たせるのは良くないから……」

何ていい娘だ。ほむほむもこの娘と一緒にならきつと幸せになれるだろうな。

「ジン君、もう平気だよ」

「ムリすんなよ」

「大丈夫だから。心配しないで」

俺はまどかと並んで歩き始めた。何かが満たされていくような感じがした。

こうして、好きな人と歩けるのは本当に嬉しい。永遠にこの一時が続いて欲しかった。

「CDショップにでも行くかい？」
「うん」

だが、そんな幸せなどありえない。この偽りの心には偽りの感情しかない。

俺は往く。誰もいない道を。物語に^{しんじつ}反逆し、全ての悲しみを破壊するその日まで。

＊

俺たちはCDショップで音楽を聞いたりしていた。俺は欲しいCDがあったので買うことにした。

「まどっちは何か買わないのか？」

「お金、持ってきてないから」

「それくらい、俺が出すよ」

「え、でもそんな……」

「いいから、ほら」

俺はまどかの背中を押してやる。最初は渋っていたが、ようやくCDジャケットを選んで持ってきた。

「ふーん、コネクトって名前のアイドルユニットが歌ってるのか」

「すごい曲なんだよ。ジン君も今度、聞いてみる？」

「おう、約束だ」

まどかと指切りする。きつと、聞こうな。
外に出るとすっかり夜になっている。

「家まで送るよ」

「いいよ、すぐだから」

「まどっちに何かあったら俺がほむほむに肅清される。頼むから送らせてー！」

「う、うん。分かった」

「安心せい、痴漢やDQN如きに遅れを取るような俺ではない。そんな下種共なんぞ去勢したるわ！」

「あはは……」

夜道をまどかと二人で歩く。

「……魔女、あと四日で来るんだよね」

「そうだ。だが心配はいらねえよ。俺がついてる。誰も死なせないさ」

まどかの表情はどこか暗い。まあ、不安や緊張はあるよな。ついこの前までは普通の、女の子だったんだから。

俺が転生したばかりの時はもっとひどかったけど。

「怖いよ……」

「大丈夫だって」

「でも私、夢で何回もみんなが！」

因果律の影響か。バッドエンドを迎えた時の記憶が流れ込んでいるんだな。

「俺も視てる」

「え？」

「だから、絶対に終わらせる。この世界は悲しみを多く背負いすぎた。悪いが俺が全部、持って行くぞ」

これ以上の悲しみは要らない。

「マジで平気平気！ 俺を信じろ」

まどかの頭を撫でる。ああ、やわらかい。二次元人に触れるこの至福、何物にも変えがたい。

もっと触りたいが、どこからともなく殺気を感じ始めたのでやめた。

丁度、まどかの家も見えてきたことだし。

「ほい、到着」

「ありがとう、送ってくれて」

「何、気にする事はない」

まどかは手を振りながら玄関のドアを開けた。俺も手を振り返し、そこであることを思い出した。

「あ、まどっち！」

俺はポケットから昨日、撮ったプリクラを渡す。

「お守り程度にはなるはずだ。一応、術をかけといたから」

「大事にするよ」

「ま、要らなくなったら捨ててくれや」

「そんな、絶対に手放さないもん。ジン君のくれたものなんだから」

心が疼く。

来た。

呪いが、発動する。

「じゃあね！」

「おう、あばよ」

今度こそ別れを告げ、ドアが閉まった。

「くぁ……！」

俺は自分の身体を抱えるように、抑えて蹲った。

渦巻く。まどかへの想いが圧倒的な力で。大好きと叫びたい。その身体を抱きしめたい。

彼女の笑顔が、仕草が、何もかもが愛おしい。彼女の全てが、欲しい。

欲しい。

「だ……まれ……ッ！！」

エバーチェンジングを短剣に変えて、太ももに突き刺した。鮮血が飛び散り、激痛によって理性が保たれる。

しかし、それでも想いは消えない。

「うああああああああああああああああああ！！！」

俺は頭を抱え、叫んだ。同時に閉鎖鉄鎖が起動し、周囲が隔離される。

「うるさいうるさいうるさい!! 消えてしまえ!! こんな、こんな、想いなど!! 跡形もなく、消え失せろおおおおおおお」

魔力が暴走し、俺の意思とは関係なしに漏れ出して地面や建物を破壊した。

路面に爪をつきたて、呻く。
痛い、苦しい、怖い、嫌だ。

「ああああああああああああああああああああ!!」

全身を、何かが貫いたような気がした。
俺は力を失い、倒れ伏す。

「はぁ……はぁ……ッ!」

まどかへの想いは散った。呪いが喰らい尽くしていた。

「まどか……」

彼女を思い出しても二度とあの想いは湧かなかった。
俺は立ち上がり閉鎖鉄鎖を解除して、まどかの家を見上げる。

「ありがとう、鹿目まどか」

まどかの優しい笑顔が見れたことに喜びを。俺は彼女のフルネームを呟いた。

*

壊れていく。

俺の知らない何かが、少しずつ、確実に、失われていく。

だけど知らなくていい。

失っていいから失っているのだ。人間は不要物は対外へ捨てる。

必要の無い事は忘れる。

それだけの事だ。

俺は一々、食ったパンの枚数を覚えちゃいないし、知ろうとも思わない。

――？

何か、見える。

女の子、魔法少女？

何だ？

俺の知らない姿……？

この世界では、ない？

別の、時間軸……？

未来を視る？

おり、
こ——？

ワ
ル
プ
ル
ギ
ス
の
夜
襲
来
ま
で
あ
と
4
日

曉美ほむらのことが、大好きでした

十一日目。

メシを食っても味がしない。昨日は眠れたかどうか分からない。気をつけていないと名前まで忘れそうになる。

記憶力が随分と悪くなったけど、己が果たすべき目標だけははっきりと覚えていた。

身体がだるい。何事にも気力が出ない。

でもまどかたちに心配はかけたくないから、いつもどおりでいよう。

……いつもどおりって、なんだっけ？

＊

俺はほむほむの自宅、通称ほむホームへと向かった。
ドアをノックするが返事はない。

「入るぞ」

一言、断ってからドアを押した。カギはかかっていない。
無用心な。

「ほむほむ？」

俺は室内を見渡したが、ほむほむの姿は見つからなかった。留守か？

一旦、出直そう。鉢合わせると誤解されそうだ。

「お邪魔しやした……!?!」

俺は目を剥く。目の前にあるソファでほむほむは眠っていたからだ。

し、しかも服装が、下着……。

「うわらばっ!」

俺は鼻血と吐血をして卒倒した。

視界がブラックアウトしていく中、理性の大切さを改めて実感する。

＊

相棒が泣いていた。

俺はどうしてそんなに泣く? と問うた。

相棒は言った。こんな悲しい結末は嫌だと。

どうもアニメの話らしかった。概要だけ聞かせてもらったが、確かに悲しい話だった。

そこで俺は転生の話を持ちかけた。物語を書き換えられる可能性と背負うリスクを説明する。相棒は二つ返事で快諾した。

妄想が極大化し、俺は実体を持つ。最強の武器と最強の鎧、最強の能力を得た俺は転生した。

泣き顔を笑顔に変える為に。絶望の闇を払い、希望の光を見せる為に。

俺たちは、物語に反逆した。

＊

「はっ！」

俺は勢い良く起き上がる。その拍子に額から何かが落ちた。手で掴むとそれはぬれタオルだった。

「やっと起きたのね」

制服姿のほむほむが俺の脇に立っていた。どうやら俺はソファに寝かされていたようだ……。

「血塗れで倒れてるから、何かと思ったら……」

「いや、だってあんな格好を見て平然としていられるわけがない。相棒だったら致死量の出血をするぞ」

「それで、何か用かしら」

ほむほむは向かいのソファに座って足を組んだ。
ウホッ いい黒パンスト、じゃなくて!!

「ほむほむ、俺と遊ばないか」

「あなたはそうやってまどかや美樹さやか、佐倉杏子、巴マミと遊んでる。目的は何？」

ほむほむはごまかせない、か。お見通しなんだろうな。

俺は素直に呪いによる恋慕の抹消を教えた。

「みんなと一緒にいれば自然と想いは高まる。そうすれば呪いが喰らい、俺は迷いを残さずに逝ける……そういう算段だった」

「迷って、しまうのね」

「ああ。想いが最高潮になる時が一番、つらい。心そのものが溢れてくるんだ。でもそれを超えれば後は楽になる」

楽になるでは、多少語弊があるな。虚脱感と倦怠感、記憶障害に苛むというべきだろう。

「残すのはほむほむへの想いだけなんだ。こいつさえ、消えれば何も怖くない」

「消せるの？　今のあなたに」

ほむほむはジッと俺を見つめる。

「ムリでも何でもやらなきゃならねえ。俺はこの世界の住人ではない。忌み嫌われた転生者だ。そんな想いを持つこと自体、おこがましい」

「いいわ。そこまでの覚悟があるなら、あなたの想いが消えるまで付き合ってあげる」

「ありがとよ。恩に着るぜ」

＊

俺とほむほむは街へ出た。

「ま、色々見ようぜ」

まずはゲーセンにでも行くでしょう。

以前はあんこと格ゲーをしたり、一人で撮ったプリクラをお守りにした場所だ。

「UFOキャッチャーやるか？」

「あなたが、やりたいのならやればいいわ」

俺は金を投入して操作する。あんこにコツを教わったので一回で景品のぬいぐるみを落とせた。

「ほら」

「何かしら？」

「俺がぬいぐるみ持ってたらキモいだろ。だから上げる」
「……しようがないわね」

ほむほむはぬいぐるみを受け取る。心なしか嬉しそうなのは気のせいだ。俺如きが彼女を笑顔にはできない。彼女にはまどかが必要なのだ。

ま、それに俺が死んだらそのぬいぐるみも俺に関わる物品として、消えちまうんだけどな。

「お、プリクラだ。一緒に撮ろうぜ」

ほむほむと一緒に機械の前に立つ。俺は気付かれないように、ほむほむと一人分の間を空けた。

ここは、まどかの分だよ。

「結構、綺麗に写ってんな。後でこいつに術を仕込んでお守りにして、渡すよ」

「……笑えばよかったかな」

「え？」

「何でもない」

俺たちはゲームセンターを後にして、今度はカラオケに入った。

「いえーい！ 盛り上がるぜえー！！」

「マイクを持ったまま怒鳴らないで」

さやかと一緒に歌った部屋で、俺は熱血ソングを歌い、ほむほむはさやかとは異なる、別の美しさを持った歌声を披露した。

俺はその歌声に聞き惚れ、何回か放心してしまった。

「ほむほむ、声キレーだよな」

「……………」

やっぱり、こういうのは無視なのね。

俺たちはカラオケから出て、次の目的地に向かった。

「映画でも見ようか」

「そうね」

さやかの方は熱血系を見たが、今度は感動系だ。

人知れず魔と戦い、死んでいく一人の魔術師の生涯を描いた物語。

「ブワワッ」

予想通り、俺は話の後半で涙腺崩壊していた。一人で愛するものを守り続け、最後までその気持ちを伝えなくて死んでいった魔術師は、幸せだったのだろうか。

ほむほむは涙一つ流してなかった。すげえ。

「稲尾ジン、鼻水ぐらい拭いて」

「す、スマン」

俺はほむほむからティッシュを借りて、涙でぐしゃぐしゃになった顔を拭いた。

「ほむほむ、泣かないんだな」

「あのくらいで流すような涙はないの」

そうだな。ほむほむは、本当の絶望を何回も見てきたんだな。

「さ、行こうぜ」

俺はほむほむの手を握ろうとして、自身の立場を考えてやめた。
その代わり、隣に並んで歩く。

「……………」

「……………」

会話が続かない。

そもそもこれは、俺の想いを潰すための行動であって、遊んでも
デートでもない。

無駄は省き、想いを高めればそれでいいのだ。

「稲尾ジン」

「ん？」

「店、寄っていい？」

「オッケー。つーかどんどん寄り道して良いぞ」

俺はほむほむの後についていく。

たどり着いた場所はまどかと訪れたCDショップだった。

ほむほむは店内に入り、迷う事無く昨日まどかが買ったのと同じ
奴を手にする。

「好きなのか？ それ」

「ええ。まどかも好きだから、私も」

いいカップルだな。早く結婚しろよ。百合に勝るものなし、だな！

「メシ、食おうぜ。腹あ減った」

「……あなたは……」

俺たちはファミレスに入って、ご飯を食べた。

ほむほむの表情が初めよりも大分、軟らかくなったように見える。

＊

夜の公園のベンチに俺とほむほむは座る。

「今日は一緒にいてくれてありがとう」

相棒が本気で惚れた女の子。

意識がリンクして無くても、俺も相棒と同じ心を有している。

「あなたのためでしょ」

「ああ、でもすげえ嬉かった。ほむほむと一日、デートできただけで俺は一生分の幸せだったよ」

最後の想いが消えつつある。

今までのような衝動はない。心は穏やかなままだった。

「最後に、お願いがあるんだ」

俺はそつとほむほむの綺麗な髪に触る。

「髪を梳かさせてくれないか？」

「……ええ」

俺はブラシで彼女の髪の毛を梳く。
求め、欲した二次元。今、こうして触れ合える。

「俺だけの特権」

命も未来も捨て、彼女たちを守る。

「いつまでも、こうしていたいなあ」

みんなには相手がいる。互いに愛し、幸せになるべき相手が。

「あ、れ？」

転生者にそれを奪うことはできない。願っても叶わない。恋すること自体が罪にすらなる。

「ゴメン。目にゴミが入った……」

それでも好きだった。せめて、生きていたかった。

「ゴメン……」

俺は往く。彼女たちを守り、死する運命の道を。それが現在^{いま}だと信じて、もう二度と振り返らないと誓う。

「ほむほむ」

きつと、どこかで。

「俺は――」

きっと、生まれ変わって。

「俺は――」

きっと、この世界に。

「暁美ほむらのことが、大好きでした」

ワ
ル
プ
ル
ギ
ス
の
夜
襲
来
ま
で
あ
と
3
日

笑って、逝きてえよな（前書き）

毎日投稿宣言、見事に崩壊orz

笑って、逝きてえよな

十二日目。

俺は複数のとある気配を察し、その場所へと向かった。
問題の記憶障害は今朝の時点では特に起きていなかった。

「よく、来てくれたな」

待っていた四人の人影に話しかける。

「まあね。命救ってくれたんだから、きっちりと思は返さないと」
「他のメンバーは？」

「海外に向かった。そこにいる転送系の力を持つ魔法少女と協力して、例の作戦を遂行する算段だ」

「りょーかい」

この分なら上手くいきそうだ。後は？ワルプルギスの夜？の戦闘力と俺たちの結束力、どちらが上回るかで勝敗が決まる。

「残り三人は市内にて待機。君は俺と一緒に来て欲しい」

俺は一人を指差した。

「私？」

「会わせたい人がいるんだ」

＊

例によってマミさんマンションに全員集合。

「最終決戦を目前に控えた今、作戦の全容を話そう」

俺が合図を送ると、彼女は少し遠慮がちに部屋に入ってきた。

姿こそ人であったが、その衣服はかつてのある魔女を髣髴とした。

「この姿……え、ウソでしょ？」

予想通りマミさんは驚き、その入ってきた人物をまじまじと見つめる。

「かつてのお菓子の魔女、シャルロッテ。今は魔法少女だ。ソウルジェムはないが」

正史では巴マミはシャルロッテに頭部を食われて即死し、まどかたちの平穏は崩壊していった。

つまりあの瞬間こそが、後の運命を左右する最大の分岐点だった。

「彼女にも本名があるんだが、便宜上、魔女名で呼んでくれ。本人も承知している」

「承知も何もチーズ目の前にチラつかされたら、頷くしかないじゃん！」

「いや、だって……ほら、本名は公式でも明らk」

シャルロッテに向こう脛を蹴飛ばされた。俺は悲鳴すら上げられず、悶絶する。

小さいくせになんという破壊力。さすが魔法少女と褒めてやりたいところだあ！

「えっと、よろしくお願いします」

シャルロッテは笑顔で頭を下げた。将来、大物になりそうだな。何とか痛みが引いてきたので、俺は立ち上がる。

「では作戦会議に移ろうか……」

＊

廊下で数人がむせび泣いていた。

隔離病棟の患者がまた死んだらしい。遺族の一人、母親らしき人が名前を叫んでいた。

小鶴ユウタ。

どこかで聞いたような名前だったが、思い出せない。この隔離病棟では病室から出てくる人は滅多にいない。

大抵の連中は諦観して、死んだようにベッドで一日中、寝転んでいる。

俺も人のことは言えないが、ジンが生まれてからは変わったつもりだ。散歩をするようになったし、メシもちゃんと食ってる。

ジンは向こうで頑張っているんだ。俺も少しでも生き永らえるように努力しなければならない。

一緒に逝くと約束したのだから。

泣き崩れている遺族の間を通り抜け、自分の病室のドアを開けてベッドに腰掛けた。

六人部屋のせいで殺風景というか、生活感に乏しい。俺が使ってるベッド以外は何も置かれて無いし、誰かが来る予定もない。というか、隔離病棟（こんなとじろ）には誰も来ないほうがいい。

だってここは、そんなに長くは住めない人たちが来る場所だ。医者も患者もとつくに諦めている。中には自暴自棄を起こして犯

罪を犯したり、自殺する連中もいた。

前に俺と同じ病室にいたおっさんは精神錯乱になって、最後はひどいものだった。

「いいな……最期を見てくれる家族がいる奴は」

俺の両親は、公表では事故死だ。

だけど真実は違う。俺と同じ原因不明の病にかかって、狂死した。俺も同様の末路を辿るだろうが、生憎こちら呪いがおまけでついている。

呪いで死に、存在自体を無かった事にされるか、得体の知れない死の病で死ぬか。

どっちも対して変わらん。

「最期くらいは――」

全身に及ぶ黒い文様。呪いの証であるこれが心臓に届く時、俺は死ぬ。

「笑って、逝きてえよなあ」

明後日。？ワルプルギスの夜？出現時刻に合わせて俺の最後の手術が開始される。

死の恐怖は不思議となかった。きっとダチ公と共にいられるからだ。

ダチ公がいれば、もう何も怖くはない。

＊

「以上が作戦の内容だ。ほむほむには既に教えてあったが、細かい

変更なども含め、全てが完了したので改めて説明した」

作戦を知っているほむほむとシャルロッテ以外は皆、啞然としていた。

「そんな突飛な作戦が本当に可能なの？」

マミさんも驚きが隠せないでいた。

「できなければ勝ち目はない。俺は終末を使い、？ワルプルギスの夜？を討伐する」

「終末って？」

今度はさやかが質問する。

「簡単に言えば神殺しだ。相手がどんな存在だろうと、一撃で葬る。だが俺は？ワルプルギスの夜？も助けたい」

それ以上は誰も口を開かず、沈黙していた。俺は立ち上がり、戦場視察に向かう事にした。

「みんなはしっかりと休んで、英気を養ってくれ。俺はちと野暮用で出てく」

「私は？」

シャルロッテがそっと耳打ちしてきた。

「当日まで自由でいい。待機してる三人にもそうしてもらおう」
「うん。分かった」

彼女はそう言ってマミさんに近寄った。
あの二人の組み合わせもありだと思った。

＊

俺は出現予測区域の全貌を見渡せるように、高層ビルの避雷針の上に立つ。

微かだが瘴気が流れ始めていた。

「強大な敵の到来の予兆は、不気味なものだ……」

額や頬を冷や汗が伝う。二日の猶予がありながら、武者震いが止まらない。

俺は気合を入れる。賽は投げられた。後は全力で立ち向かうのみ。
絶対に？ワルプルギスの夜？も助けてみせる。

自分を信じる。まどかたちの運命を覆し、インキュベーター孵卵器を黙らせ、世界中の魔女も助けられたじゃないか。

無限の可能性を秘める転生者オレを信じる。俺の相棒は本気で俺を妄想したじゃないか。

「勝つぞ。この戦い。絶対に、ハッピーエンドにしてみせる」

俺は背後に現れた三つの気配に、振り返らずに言葉をかけた。

「力あ、貸してくれ」

薔薇園の魔法少女、ゲルトルート。

ハコの魔法少女、エリー。

影の魔法少女、エルザ。

「ぶち壊すぞ、そのふざけた運命を!!」

俺は天を指差し、咆哮した。

ワルブルギスの夜 襲来まであと2日

誰かのピンチに颯爽と現れるヒーローに、憧れたんだ（前書き）

シャルロットの性格は作者の妄想です

百合シーン多め？

マミシャルがうまく表現できん。同人誌見て勉強します

誰かのピンチに颯爽と現れるヒーローに、憧れたんだ

十三日目。

明日だ。明日、全てが終わり、全てが始まる。

俺と相棒の大願は成就し、まどかたちは誰もが幸せに暮らせる世界を生きていく。

長いようで短かった、みんなと過ごした日々。俺は忘れない。まどかたちが俺を忘れても、俺は忘れない。

存在を消され、何もかもが残らなくても忘れない。こんなにも、素晴らしい人々と出逢えた奇跡、忘れはしない。

転生者を憎む神も死神も、ここまで物語を改悪しんりされたら、下手に手出しできない筈だ。

俺は自身の行いを悔いてはいない。バッドエンドが嫌いだからハッピーエンドにただだけ。それが大罪になろうとも、構うものか。マミさんは生き残り、あんこを事前に呼ぶことでさやかか魔女化のフラグ自体を打ち消し、あんこはさやかか生き残る事で生存し、まどかの契約も回避、ほむほむの永遠のループからの解放。思い残す事はなかった。

自己満足だろうが

自慰だろうが。

ご都合主義だろうが。

神に認めらねえ転生者クズだろうが。

目の前で泣いてる奴を笑顔にしてやれる。

そんな生き方に、俺は憧れたんだ。

——誰かのピンチに颯爽と現れるヒーローに、憧れたんだ。

＊

主治医と看護師が病室から出て行った。必要な検査は昨日の内に終わり、夕食後の食事は控えるようにと言われた。

明日、俺たちの戦いは終わる。

感慨は湧かなかった。死を目前にすると吹っ切れるものなのだろうか。死刑囚の気持ちを少しだけ理解できたような気がする。

俺はブルーレイを起動して、液晶テレビをつける。

アニメをもう一回、見直そう。

「我が生涯に一片の悔いなし」

グッと拳を天に掲げる。

「へへ、一片やってみたかったんだ。これ」

俺は誰もいない病室で一人、笑った。

——己が信じた道に、迷いなし。

＊

ジンがほむホームと勝手に命名した、暁美ほむらの自宅。日も暮れかけた頃、玄関のチャイムが鳴り、ほむらはドアを開けた。

そこに立っていた人物を見て、思わず表情が緩む。

「まどか……」

「ほむらちゃん、遊びに来たよ」

早速、家の中に招き入れて、二人はソファに腰掛けた。

「あ、お茶淹れてくるね」

ほむらは立ち上がって台所に向かう。初めての来客、それも自分の想い人なので上手くお茶をカップに注げなかった。

何回かこぼしながらも、運んでテーブルの上に置いた。

「明日から、最後の戦いなのに私のところに来ていいの？ 美樹さやかや巴マミと一緒にの方が……」

「うん。私はほむらちゃんと一緒にいたい。さやかちゃんやマミさんも最後の夜はそれぞれの、想う人のところで過ごすって」

それを聞いた瞬間、ほむらはまどかを抱きしめていた。

「明日、勝とうね。私、がんばるよ」

「まどか……これだけは約束して。絶対に死なないって」

「うん。ほむらちゃんと一緒に未来に生きたいよ」

二人は向き合い、そして誓う。夜を越えて、先にある朝日を見ようと。

「ほむらちゃん、指切りしよっか」

繰り返してきた時間の中でこれほどに、安らかな時間はなかった。

まどかと指切りをして、再び見詰め合う。

さつきから心臓は高鳴りっぱなしだ。顔も熱い。

「ん……」

まどかの小さな唇に、ほむらは自分の唇を重ね合わせた。

甘くて、やわらかい感触。

舌と舌を絡め、二人はソファの上に倒れた。ほむらはまどかに覆い被さるような体勢になる。

「まどか、いい？」

「ちょっと恥ずかしいかも」

「大丈夫、私も初めてだから」

二人は再び口付けを交わした。

――二度と離れない、離さない。わたしの、最高の友だち。

＊

杏子は市内のあるホテルの一室を仮の住まいにしていた。ジンに呼ばれた際に契約金も多少なりと受け取っていたので、生活には困らなかった。

それに今では見滝原に呼んでくれたことに感謝している。こうして、美樹さやかに出逢えたのだから。

「へえ、杏子ってこんなところに住んでるんだ」

「住んでるわけじゃねーよ。仮だ、仮」

さやかは窓際に寄り、見滝原市を一望する。摩天楼や色とりどりのネオンが輝く夜景を見つめた。

「ね？ この夜景を見ながらご飯にしない？」

「別にいいけどよ」

杏子はダンボールを開けて中に入っているレトルト食品を取り出

した。

「そういうのばかり食べてるね、杏子は」

「しゃーねえだろ。こっちの方が楽なんだよっ」

テーブルの上に並べ、二人は向かい合って座った。

「杏子、あーんして」

「ば、バカなことは……っ」

「嫌なの？」

「……嫌じゃねえよ」

「じゃあ、あーん」

観念して素直に口を開ける。

「今度は杏子の番ね」

「えっ」

問答無用でさやかは開口して待っている。こうなってしまうては、無視するわけにもいかない。

杏子はポテトをつまんで、口に運んでいく。

「あむっ」

「さ、さやかっ！」

ポテトもろとも指まで挟まれてしまう。抜こうとしてもしつかりと抑えられていた。

「ちょ、おい！」

「離して欲しい？」

「当たり前だ！」

「しょーがないなあ」

さやかは名残惜しそうに杏子の指を離した。

「あれ？ 杏子、口許にご飯粒ついてる。取ってあげるぞ」

身を乗り出して顔を近づけてきた。

「いい、よね？」

「何でそんなに……」

「だってさ、明日、あたしたちが生き残れる保証は無いんだよ。そりゃ、ジンもまどかもマミさんも転校生も、杏子だっている。でもやっぱりちょっと怖いかなって」

さやかは席に座りなおして、乾いた笑みを零した。

「心配すんなよ」

そっとさやかの隣に行って頭を撫でる。

「あたしが守ってやる」

杏子はさやかと口付けした。

「ありがと、杏子」

——さやかがいなくなるなんて、認めない。そんなのあたしが許さない。

＊

いつも一人で過ごしていた夜。
まどかたちと知り合ってから、一緒に泊まることも多くなっていた。

だが今日の相手はまどかたちではない。
お菓子の魔法少女、シャルロッテだった。

「ねえ、マミお姉ちゃん」

「ん？ 何？」

「私の事、嫌いじゃない？」

「どうして？」

「だって、私魔女になっていた時の記憶があるから……その……」

「嫌いじゃないわ。あれはあなたの意思じゃない。それに、あの時は稲尾さんが助けてくれたもの」

「稲尾ジン……そういえば、ぶっ飛ばされた記憶がある」

シャルロッテは仏頂面になってむくれた。

＊

以下回想

一本の剣がシャルロッテの眉間に突き刺さった。

その衝撃でシャルロッテは吹き飛ばされ、お菓子の壁に叩きつけられる。

「え？」

マミ、まどか、さやかはいっせいにその剣が飛んできた方向に視線を送る。

『炎』という文字が刺繍された野球帽を目深に被り、白銀に輝く鎧を纏った男。

紅いマントをはためかせて両手に、二つの剣を握っている。

「……本体は、あそこだよな」

男はイスの上に座るシャルロッテの本体を瞥見し、腰を落として二本の剣を構える。

横槍を入れられたシャルロッテはファンシーな顔を怒りに歪ませ、男へと飛び掛った。

「グレープバイン！！」

男はシャルロッテの一撃を回避し、更にすれ違い様に斬撃を食らわした。

魔女の身体に何かの紋章のような傷が穿たれる。

「まだまだあ！！ プロンタルスプリットオツ！！」

振り下ろした剣から殴りつけるような衝撃波が迸り、再度シャルロッテを壁面に打ち据える。

「まだ、ダメか……クソッ！ 双赫・三千世界！！」

無数の剣影が男の周囲に出現、間髪も入れずにシャルロッテへと殺到した。

爆音と振動が空間を揺るがして白煙が上がった。

「……………」

男は追撃をかけず、だが油断なく煙の奥を睨みつける。
やがて煙は散っていった。晴れた先にはぐったりとしたシャルロ
ツテがいる。

回想終わり。

＊

「一応、痛覚とかはあるんだから。あんなにやらなくても」
「でもあれで元に戻れたのよね」

マミはシャルロツテの髪の毛を触る。サラサラとしていて、綺麗
な髪だった。

「……私、前の記憶もあるんだ。私を倒しにきた魔法少女をね」
「それ以上は何も言わないで。大丈夫、私たちはあなたを嫌いにな
ったりなんかしない」

「マミお姉ちゃん……」

マミはシャルロツテの小さな身体を抱きしめた。

——もうあなたは一人じゃない。だからもう何も怖くない。

＊

深夜。

俺は一人、見滝原の街中を歩いていた。

病院、中学校、川原、工場、商店街、駅、道行く人々。

「見納め、だな」

俺は街の景色を脳裏に焼き付ける。全ての思い出を心に刻み付ける。

二度と訪れる事はできない世界だが、せめて忘れないように。

「あーあ、もつとここにいたかったなあ」

恋焦がれ、次元を飛び越え、出逢い、そして――。

ワ
ル
プ
ル
ギ
ス
の
夜
襲
来
ま
で
あ
と
1
日

最終決戦 開戦（前書き）

連続投稿

最終決戦 開戦

十四日目。

来る最終決戦の日。

俺はカプセルホテルをチェックアウトし、必要の無いものは処分した。どうせ死んだから全部消えるが、あれだ。

立つ鳥跡を濁さずって奴だ。

俺は外に出て、まず大気に満ちる禍々しい気配に圧倒される。見上げれば空は闇よりも暗い漆黒に覆われていた。

もう日の出の時刻だというのに、闇が支配している。

人々は空を指差したり、何事かと話し込んでいた。丁度、電気屋の前を通りかかると液晶テレビでは天気予報を放送していた。

見滝原市の上空に空前の大型台風が発生しようとしている、と天気予報士のお兄さんが慌てた口調で説明している。普通、台風は海上で発生するものだが明らかに異常だった。

画面が切り替わり、今度は専門家たちが議論を交わしていた。別のチャンネルでは総理大臣が非常事態宣言を発令、と報道している。車道を広報車が何台も走り、住人はただちに避難するように呼びかけていた。

「こりゃいよいよだな」

昨日とは一転、物々しい雰囲気包まれた街を見て、気が自然と引き締まる。

そういえば空前の大型台風が出現すると騒がれている割には、静か過ぎた。闇の空だが雨が降る気配なく、風も吹き荒れず、稲光も見えない。

文字通り、嵐の前の静けさといったところか。恐ろしく獰猛で凶

悪な何かが息を潜めている、そんな光景に俺は身震いする。

俺は避難を始めた住人たちとは逆の方向へ向けて、歩いて行く。

「最後の戦いだ、派手に暴れてやる」

＊

手術当日。

俺は熱や血圧を測り、問題なしと言われる。安定剤を飲んで手術衣に着替え、名前の書かれたリストバンドを手首につけた。

ストレッチャーで手術室に運ばれ、手術台に移る。俺は無言で天井を見つめる。

周りでは着々と準備が行われ、軽く息を吐く。

「では、今から麻酔薬を入れますね。ちょっと沁みるような痛みがあります」

その声を聞いてから十秒足らずで俺の意識は、落ちていった。

＊

？ワルプルギスの夜？出現予測区域のギリギリの外側に俺たちは集まった。

あんこ以外はみんな制服姿だった。

「僕もこの戦いの行く末を見届けさせてもらおうよ」

どこからともなくキュウベえが現れ、俺の肩に乗る。

「なんだ、お前も参戦するのか？」

「君が望むなら。それが僕との約束じゃないか」
「約束？」

まどかが小首を傾げる。

「いや、こちらの話。そんじゃまどか、簡易契約始めるぞ」

俺は右手をまどかに向けた。

「魔法少女——」
マジカ

次の瞬間、まどかの胸にピンク色の光が灯り、消えていった。

「ほい、終わり」

「え？　これだけなの？」

「だって簡易だから。ほむほむ、出現時刻まであとどんくらい？」

「二分を切ったわ」

「オッケー」

俺はエバーチェンジングを調整し、軽く身体をほぐす。

「みんな、頑張るわよ！」

ママさんが。

「私もいるからだいじょーぶ！」

シャルロツテが。

「よーし、さやかちゃん元気100%！」

さやかが。

「まったく、共同戦線なんて性に合わねえど、やってやろうじゃん」

あんこが。

「私、絶対に負けない」

まどかが。

「今度こそ、終わらせる」

ほむほむが。

「開戦だあ！！」

最後に俺が叫んだ。

まどかたちの服装が魔法少女の衣服に変わり、俺は白銀の鎧と紅いマントを纏った。

「……来るっ！」

ほむほむが空を見上げ、構えた。

白い濃霧が垂れ込め、質量のある足音が響いてきた。

見ると、前方から奇妙な衣装を施したゾウの群が悠然と歩んでくる。運動会などで使われそうな旗を引っ張り、まるでそれはサーカスのようだった。

5

不意に巨大な数字が上空に浮き出す。

4

邪悪な気配が一気に高まり、街灯がビリビリと震えた。

3

ゾウの群の後方に、何かがぼんやりと見え隠れする。

2

それは上下逆さになった人形。遠目から見てもその大きさ、邪悪さは他の魔女を凌駕する。

1

ついに、その全貌が現れた。

不気味な哄笑を上げ、ゆっくりと空に浮かび上がる。

「なんて奴だ……ッ！」

俺は改めて思い知った。

最強の魔女の恐ろしさを。

某月某日、午前7時12分。

舞台装置の魔女、最大最悪にして最強、付けられたその名はワル
ブルギスの夜。
見滝原市に到来。

最終決戦 永き夜は囁く

「どれ、まずは俺の罠に嵌ってもらおうとするか」

俺は指を鳴らす。

ワルプルギスの夜出現予測区域を想定して張り巡らした罠が、一気に起動した。ワルプルギスの夜を包囲するように四重の円形魔法陣が出現した。

「第一の陣形。ファンタジアワールド!!」

ワルプルギスの夜に向かって、炎や氷、水、雷、風、土など様々な魔法が炸裂する。

「す、すげえ……」

あんこが咄然と見上げた。まるで攻撃魔法の見本市のようであった。

数百回にも及ぶ攻撃がようやく収まり、風に吹き散らされていく爆煙の中心では、無傷のワルプルギスの夜が浮かんでいた。

純粋な魔力の塊がワルプルギスの夜から放たれ、轟音と共に一番内側に展開されていた魔法陣が碎け散った。

「チッ！ 第二の陣形！ ゴーレムーズ 巨人創造！」

あちこちの大地が盛り上がり、人の形を成していく。ワルプルギスの夜よりも寸胴で巨大なそれは、土塊の兵隊であった。

眼孔の奥に淡い光をチラつかせて咆哮した。それだけで空気が振動し、まどかたちはたまらず耳を塞ぐ。

「行けエツ！！」

俺の合図に、ゴーレムたちは緩慢な動きでワルプルギスの夜に殺到する。一振りで大山を崩せそうな腕をゆつくりと、しかし必殺の威力を秘めてワルプルギスの夜に殴りかかった。

鈍い音が鳴り響き、次々とゴーレムたちが殴っていった。

「どうだ……!？」

内心では俺は分かっていた。このくらいで、大人しくなるような奴が最強の名を欲しいままにするはずがない、と。

[illegible]

ワルプルギスの夜が狂ったような笑い声を上げた。

刹那、ゴーレムたちは一瞬にして崩壊していく。大量の土砂をぶちまけ、呆気なく巨人の群は消滅した。

「ッ！ 第三の陣形！！ 災いの風！！」

いずこからか、妖しげな緑や紫、蛍光色の霧が漂い、ワルプルギスの夜を包む。

並みの魔女なら到底、耐えられない状態異常の嵐。これなら多少の効果は……。

俺の期待を嘲笑うかのよう、三番目の魔法陣が壊れた。

「そんなバカなことが……！　俺が全力の魔力を注いで張った罠だぞー！！　何でもまるっきり効いてねえんだ！！」

最強。

これが最強。

常に遥かな高みから下界を見下ろす、王者の風格。

「つざけんな！ 最終陣形！！ アルマゲドン……！！？」

第四の罠は発動しなかった。既にワルプルギスの夜によって破壊されていた。

「……スマン、みんな」

俺はエバーチェンジングを二丁拳銃に変える。

「これより直接戦闘を開始する！！ あんこ、さやか！ 俺の後についてきてくれ！ ほむほむたちは後方から援護を頼む！！」

「行くよ、杏子！」

「おう！」

俺たちは地面を蹴って、一斉にワルプルギスの夜へと突撃する。

「喰らえ！！ バウンスノーバウンス・バウンド！！」

無数の鏡の破片が散らばり、俺は二丁拳銃を乱射した。鏡に跳ね返り、跳弾した弾丸が四方からワルプルギスの夜に降り注いだ。

続けてさやかとあんこがそれぞれの得物を振り翳し、肉薄する。

サーベルと長槍がワルプルギスの夜を切り裂き、ダメージを与えた。

「よっし！ 効いてるぞ！ ラピッドファイア！！」

更に俺が銃を乱射してワルプルギスの夜を街の外へと追いやっていく。

「ジン！ 上だ！」

「どわっ！？」

攻撃に集中しすぎたらしい。いつの間にかへし折られたビルの一部が、俺の頭上にあり、突っ込んでくる。

俺は咄嗟にガードに転じたが、直撃の寸前でロケット弾がビルに命中し、爆碎した。バラバラと落ちてくる破片を振り払って、俺は体勢を整えた。

飛んできた方向を見るとRPG-7を構えたほむほむがいた。

「気をつけることね」

「サンキュー、助かったぜ」

俺は短いお礼を告げ、二丁拳銃の銃口をワルプルギスの夜に向けた。

「アークイレイザー！ シルバーストレイフ！！」

左右の銃口から異なる弾丸が発射され、ワルプルギスの夜に炸裂する。

「あんこ！ さやか！ 俺が今から奥義をブチかます！ その直後の隙をカバーしてくれ！」

俺は銃で十字を描き、独特の構えを取った。

「エンシェント・クロスダガー！！」

交叉した眩い弾道が迸り、ワルプルギスの夜に被弾し、高熱の衝撃波を撒き散らした。

攻撃後、硬直する俺の両脇をさやかとあんこが駆け抜けて、十字の斬撃を食らわした。影の魔女との戦いで見せた、コンビネーションだった。

「ふー……」

俺は二丁拳銃を大鎌に変化させ、二人と入れ違いにワルプルギスの夜に接近した。

「デュノ・ドルア!!」

漆黒に染まった刃で刈り取る。深々と抉り、傷跡を穿つがすぐに消える。

「稲尾さん!」

大砲のようなマスケット銃を構えたマミさんを一瞥して、その場から離れた。

「ティロ・フィナーレ!」

「私もいつくよ!」

閃光の砲弾がワルプルギスの夜を貫く。シャルロッテが手を掲げると、あのファンシーな生き物が召喚されて凶悪なあざとで噛み千切った。

「崩魂狩奪!」

再度、踏み込み大鎌で薙ぎ払った。黒い刃が食い込み、確かな手応えを受けるがワルプルギスの夜は依然として、その邪悪さや生命力は衰えていない。

むしろ……。

「時を止めるわ。みんな私に掴まって」

ほむほむの声が脳内に響いた。俺たちは踵を返し、ほむほむの元へ集まる。

腕に装着された円形の盾のようなものがカチリ、と音を立てた。同時に世界は灰色に染まり、あらゆるものが停止する。

「時を止める魔法なんて、俺の場合使うと全魔力を失うんだがなあ……」

「止まってる時間はそんなに長くは無いわ。早く攻撃して」

しみじみという俺を遮り、ほむほむはRPG-7やFIM-92などの重火器を次々と盾の中から出しては、ぶっ放していた。

マミさんはマスケット銃を乱射し、まどかは弓を引いてピンク色の魔力を伴う矢を放ち、遠距離攻撃の術を持たないあんこ、さやか、シャルロッテは大人しくしていた。

俺も魔法攻撃を開始する。

「フアー・ニス、ブルーレイル、ヴァル・デ・グラス、パルスコレダー、オリゾン・エール、マグナ・マイン、シルヴァントピア、アマ・デトワール!!」

再びカチリ、と音がして時が動き出した。ワルプルギスの夜の全方位で止まっていた幾多のロケット弾や魔法も共に動き、一挙に炸

裂する。

大地を揺るがす轟音と凄まじい爆炎が巻き起こった。間髪いれずにほむほむは起爆スイッチを押した。ワルプルギスの夜の周辺に立ち並ぶ鉄塔の根元が爆発し、倒れ掛かった。

派手に噴煙を巻き上げ、ワルプルギスの夜も巻き添えにした。

「今だ！！ キメるぞ！！」

あんことさやかのコンビネーションが決まり、俺の大鎌が一閃、マミさんのマスケット銃が火を吹き、まどかの矢が貫通し、シャルロッテの召喚獣が噛み砕き、最後にほむほむが仕掛けた大量のC4爆弾が誘爆した。

焦熱と大爆発、闇の夜空を灼く紅蓮の炎。ワルプルギスの夜が押し倒された辺りは炎の海と化していた。

さすがの最強もあれだけの猛攻を加えられれば、無事ではない筈だ。

「やったか！？」

「あたしたちにかかれば、こんなものよ！」

さやかはもう勝ったつもりでいる。だが、俺も勝利を確信していた。第一段階で行動不能にできれば、それに越した事はない。

「ワルプルギスの夜の救済の準備に……！？」

その時、俺は炎の中で何かが閃くのを見た。

そして次の瞬間に、俺はほむほむを突き飛ばしていた。

「っ！？」

突然の行いに狼狽するほむほむだが、すぐに表情が凍りついた。
俺の身体をワルプルギスの夜の魔力がブチ抜いたのだ。衝撃と雷
以外は全て跳ね返すはずの、無敵の鎧が一撃で破壊された。

「がっはぁ……!!」

俺は貫かれた脇腹を抑え、悶えた。鮮血が噴水のように噴出す。

「まだ、動けるのかよっ!!」

俺たちは見る。紅蓮の業火の中から、平然と空に浮かんでいくワ
ルプルギスの夜を。

「ウソだろ……」

あんこの啞えたポッキーが折れて地面に落ちる。

「そんな……」

まどかやマミさんの顔が絶望に染まっていった。
ワルプルギスの夜を守るように人の形——魔法少女のような影——
の手下たちが飛び交う。

「ダメージが通ってないのか!?!」

俺は傷を無視してふらつきながら立ち上がった。

「あなた、まだ傷が!」

ほむほむが近寄ろうとすると、さやかがワルプルギスの夜を指差

した。

「こっちに、来る！」

数体の手下を引き連れ、接近してくる。その様子は正に霸王の行進。

如何なる敵も障害も物ともしない。邪魔するものは蹴散らすだけ。どれだけ足掻こうが、決して揺るがない不動の強さ。

——最強。

俺は思わず、口に出していた。

最終決戦 奇跡と魔法

「ど、どうするの!？」

シャルロッテが俺とワルプルギスの夜を交互に見て、戸惑う。

「シャル、お前は第二段階を手伝え!　ここは俺たちで食い止める!」

「で、でも」

「早く行くだ!　このままでは全滅する!」

「わ、分かった」

シャルロッテは頷き、駆け出していった。途中で振り返り、

「死なないでよ」

「ああ。最後まで、生きてやるさ……最後まで、な」

俺は鎧の被害状況を確認する。腹部の装甲は完全に砕け、溶解していた。相当の熱量、しかも最強の鎧を破るほどの魔力。

「ありえねえ……」

俺は鎧を打ち捨てた。もうこうなってしまうては、使い物にならない。大鎌を握り締め、ギツと前を睨む。

腹部の怪我は回復魔法で癒した。

「マミさん!　まどっち!　あんこ!　さやか!」

戦意を失いかけていた四人に声をかける。

「大丈夫だ」

一言、そう告げて俺はワルプルギスの夜へと跳躍した。後ろからはAK-47を持ったほむほむが続く。

「つうあああああああ!!」

大鎌を乱舞し、手下たちを切り捨てていった。ワルプルギスの夜も手下も不気味に笑い続け、俺たちへ殺到してきた。数匹を打ち漏らすが後方のほむほむが残らず掃討する。

「これで、どうだ! ダークスクレイバー!!」

漆黒の残像を描き、真横に一閃する。二三匹の手下を巻き込んでワルプルギスの夜は、吹き飛ばされた。

ほむほむはGAU-8を構え、ワルプルギスの夜に射撃を行う。

「30mmガトリング砲っ! あんなモンどこで手に入れた……いや、あの盾の中に収納できるサイズなのか!？」

俺も魔法を使い、追撃を加える。

「紫電の嵐! エレキバーストオ!!」

大鎌を持っていない、左手から輝く稲光の束が放たれる。ワルプルギスの夜を飲み込み、稲妻が弾けた。人間がともに喰らえば炭化するほどのエネルギーだ。

「……避ける!!」

俺は身をよじる。高速で近付いてきた手下たちの攻撃を僅差で回避し、大鎌で切り裂く。

「ほむほむ、大丈夫か？」

「ええ、何とか……」

CAU-8を手放し、デザートイーグルに持ち替えていた。

前方では雷撃を鬱陶しそうに払い除け、変わらぬ様子で浮遊するワルプルギスの夜があつた。

「あいつ、痛覚とかはねえのかよ。あれだけの攻撃を受けてンのに」「ワルプルギスの夜は魔女が持てる能力の限界を超えている。樂觀でいるような相手じゃない」

「そうだな……こうなればもう一回、俺が奥義をぶち込んでやる。援護、よろしく」

俺は足元に魔力を練り、爆発的な加速力を得て突進した。前に立ち塞がる手下はほむほむの銃弾に打ち抜かれ、掻き消える。ギリッと歯を食いしばって大鎌に力を送る。

「おおおおおおおおおおお！！ 冥翔緋桜閃！！」

加速の勢いと大鎌に秘める破壊力を上乘せし、真っ向から振り下ろした。桜の花びらが舞い落ち、血のように紅い閃光が突き抜ける。だが、それだけだった。

ワルプルギスの夜は痛手を感じさせず、俺を魔力の塊で殴りつけた。鎧を着ているならまだしも、生身の俺には少々厳しい。

骨が碎ける音を聞きながら意識が持っていかれそうになる。浮力を失い、地上に落下する俺を時間停止でほむほむが抱きとめ

てくれた。

「二度も助けられるなんてな……自分で助力を買って出ておきながら何てザマだ」

「喋らないで。早く回復魔法を」

俺は咳き込み、血を吐く。肋骨が折れて肺に刺さったらしい。

「……ダメだ。魔力が、そう長くは続かない。これからは回復にまわしてた魔力も全て攻撃に使う」

呪いの効果で崩壊を始めている身体を繋ぎとめる魔力も、無論攻撃に転じさせる。一日くらいなら転生者の頑強さで保てる筈だ。

「ほむらちゃん！ ジン君！」

瓦礫の向こうからまどかが走ってきた。所々、薄汚れてはいるものの外傷は見受けられない。

「まどか、バマミたちは？」

「あっちのほうで手下を食い止めてる。あの魔女、避難所を目指してるらしいの！」

俺は唇を噛む。かなりヤバイ状況になってきた。シャルロツテや他の魔法少女からの連絡はまだ来ない。

第二段階に移行するのに手間取っているようだ。

「ぐ……俺が気張るしかねえだろうが。ギリギリまで、粘ってやるさ」

「ジン君!？」

血を吐き、流しながら俺は立ち上がろうとする。

「その怪我じゃ満足に戦えるわけが……」

止めようとするほむほむを押し退け、俺は上空のワルプルギスの夜を見上げる。

「ここから先は一步たりとも通さねえ!! どうしても進みてえなら俺を倒してみろ!! シュトルム・ウント・ドラング!!」

俺の前面に魔法陣が展開し、烈風の怒濤が生じた。轟然と唸る爆風がワルプルギスの夜に叩きつけられ、進撃を遮った。

「お前の相手は俺だああああ!!」

エバーチェンジングをハンマーに変え、飛び上がる。

「スレッジハンマー!!」

鋭く重い一打。しかし金属すら砕く威力にも怯まず、手下たちの反撃が返ってきた。

ハンマーで群がる手下の攻撃を受け流し、ワルプルギスの夜の進路を阻んだ。

「トリーズンブロー!!」

自らの血で武器を握る手が滑りそうになる。何回、攻撃を与えてもワルプルギスの夜は止まらない。

「奥義！ 鎚皇碎！！」

魔力で殴られ、手下たちの容赦のない反撃。

「次の、攻撃をッ！」

エバーチェンジングを別の武器に換装しようと、ワルプルギスの夜から目を離れた。

形状を弓にして、矢を番えて構えると、目前に一軒家が迫っていた。

「くっそお！！ マイトタスラム！！」

散弾のように飛び広がる矢が一軒家を破碎する。だが大量の瓦礫が俺にぶつかり、勢いに押されて地面に叩きつけられた。

「がは……ぐう……」

右目が痛い。なぜか瞼を開く事が出来ない。泥と汗、血で汚れた手で右目の辺りを探ると木片のようなものに触れた。

それが右目に刺さっていた。

「稲尾ジン！」

「ジン君！」

ほむほむとまどかが駆け寄って来る。こんな凄惨なもの見せられねえよな。

俺は木片を引っこ抜き、血が噴出す前に服を千切って眼帯代わりにする。

「ジン君、その目は!？」

「俺は平気だ。それよりもソウルジェムの濁りはどうだ？」

「私は、まだいける。巴ミミ、美樹さやか、佐倉杏子は少し濁ってきたみたい」

「そうか……」

俺は弓をギュツと握る。

現状では、ワルプルギスの夜は辛うじて抑えられている。

しかしこのまま戦況が好転しなければ、まどかたちの身が危うくなってしまう。

「避難所前に集合するように伝えてくれ。そこに防衛線を張ろう」

＊

ワルプルギスの夜との戦闘が始まってからどれほどの時間が経過したのかは把握できない。

ただ、集まったメンバー全員に疲労の色が濃く出始めていた。

満身創痍で、傷ついていた。その中でも一番、重傷なのは俺だが。

「少し見ないうちに、随分やられたみたいだね」

さやかは半ば折れたサーベルを投げ捨て、マントから新しいサーベルを取り出した。

「このくらい屁でもねえよ」

血をタオルで拭い、地べたに座る。ワルプルギスの夜は俺の防壁によって、何とか進撃を食い止めている。

気休め程度なのですが、今は休息が要る。

「倒しても倒してもキリがねえ。あの手下、無限に湧きやがる」

あんこはボロボロになった槍を抱きかかえ、あぐらをかいてたい焼きを齧った。

「さすがに厳しくなってきたわね……」

マミさんはティーカップを片手に、俺の防壁に幾度もぶつかるワルプルギスの夜を見ながら呟いた。

「勝つわ。絶対に、負けない」

ほむほむは銃のマガジンを入れ替えたり、分解して整備している。

「目、ホントに平気なの？」

まどかはずっと俺のやられた右目を心配していた。あんまり俺にばかり関わるとほむほむが怒りそうで怖いんだが。

「平気だって。後で魔法で治せるから」

俺はドン、と胸を叩く。

「だからまどかも俺の心配じゃなくて、自分に気を使えよ」

低く轟く音が断続的に聞こえてくる。

「防壁が破られる。みんな、準備はいいか？」

俺の声にまどかたちは頷く。

*

ワルプルギスの夜の魔力によって建物は崩壊、もしくはは武器として空を旋回して俺たちへ突っ込んでくる。戦いは激しさを増し、ほむほむとまどか以外は戦鬪の混乱の中に消えてしまった。

血と埃のにおい、銃声や魔法の爆音、ワルプルギスの笑い声、怒号、剣戟。先の見えない死闘は続いていた。

「そろそろ、マジでまずいな」

痺れる左手を引く動作に合わせて、右拳を突きこむ。鈍った拳ではあるが、何とかダメージを与えられた。

楽しそうに笑い、負傷などまるで感じさせない正確さで腕を振るう。

「つてえ！」

魔力が胴体に潜り込む瞬間、反射的に横へ跳躍した。それでも殴られた脇腹に激痛が走るが、そうしなければ胴斬りにされていたかもしれない。

「ジン君！　しっかりして！」

血が吹き出さないように傷口を押さえた手に、俺は精神を集中した。だが、最早消耗は限界に達そうとしていた。予想通り回復の魔力は残っていない。

「ダメか……くそ！」

「そんな……」

泣き出しそうに歪んだまどかの顔に、いきなり鮮血が浴びせられた。それはエバーチェンジングを剣に変えて突き出した俺からしぶいたもので、そうしたのはまどかの背後に先程の手下が迫っていたからだ。

「まどか、ボーっとすんな。危ないぞ」

「う、うん……ゴメン……」

まどかの声が哀れなほど震え。俺の脇腹から流れ出る血は止めなく、血の気が失せていくのを感じた。

せめて止血だけでも、と服を破ろうとしたが半袖はズタボロになり、十分に切り取れる部分すらない。

「まどか！　稲尾ジン！」

手下を蹴散らし、ほむほむが傍にやってくる。手にしているのはRPDだった。

「ひどい怪我ね」

「俺よりも、他のみんなは見つかったか？」

「佐倉杏子と美樹さやかは見つかったわ。巴マミは……」

「生きてるよな？」

「気配はする」

「よし、まずはさやかとあんこに合流するぞ」

戦いは、まだ終わる気配は見せない。

＊

俺はほむほむとまどかに肩を貸してもらいながら、二人のいる場所にたどり着くと、そこにも二体の手下の姿があった。

避難所へ続く道の最終防衛線の周囲は敵の攻撃も苛烈だったらしく、惨たらしい有様になっていた。その二体の手下が俺たちを視認してこちらに迫ろうとしていた。

俺たちは身構えるが、それよりも先に飛び出す影がある。

「コラーッ！ お前らー！」

治療能力に特化したお陰で比較的、傷が少ないさやかは駆け寄り様、痛烈な斬撃を浴びせた。

そのまま敵を蹴ってさやかは場を譲る。そうしてできた空間に新たな影が飛び込む。

「あたしらの街で好き勝手やってんじゃねえぞ！」

あんこの槍が変形し、体勢を崩していた手下の身体に巻きつく。グッと引き絞ると手下の身体はひしゃげ、消滅する。あんこの左腕はだらりと下がっていた。骨折でもしたらしい。

もう一体の手下が笑いながら二人に向き直った。そこへ俺たちも駆けつけた。あんこが不敵に笑いかけ、自分の折れた左腕を示す。

「よお、無事だったか。回復魔法かけてくれ」

「悪いけど、俺もこの様だ。魔法は使えん」

「ちっ。仕方ねえ、こいつ倒したら包帯でも巻くか……行くよ!」

剣が切り裂き、サーベルが断ち切った。槍が突き込まれ、銃声が鳴り響き、魔力を伴った矢が突き刺さる。

防衛線の最後の手下が笑い声を上げて消えていった。

「ソウルジェムを見せて欲しい」

簡易契約で魔法少女になったまどか以外のソウルジェムは大分、濁っていた。

「余裕はねえな……使ってくれ」

俺はグリーンシードを人数分、手渡す。

「グリーンシードは一人一個しかない。そこで、さやかとあんこはマミさんを探し、渡してくれ」

「分かった。あたしたちに任せて」

あんこが腕に包帯を巻くのを待ってから、さやかたちは再び戦場へと消えていった。

「さて、俺たちはあいつをどうにかしねえと……」

一進一退の攻防を繰り返しているの、ワルプルギスの夜は避難所には近づけていない。

俺は剣を握り、地面を蹴り上げて突撃する。

「エンジェルブリング!!」

光り輝く刀身でワルプルギスの夜を斬りつける。僅かだが、ワルプルギスの夜から吸い上げた体力で回復した。

ほむほむはデザートイーグルを撃ち、まどかの矢が打ち込まれる。

「いい加減、大人しくなりやがれ!! チリングガイスト!!」

掌から極寒の冷氣が吐き出され、空気中の水分を凝結させる。細氷が降り注ぎ、ワルプルギスの夜に無数の裂傷を刻んだ。

「ジ・アース!!」

大地が隆起し、巨大な生き物のあぎとようになってワルプルギスの夜を左右から挟み込んだ。地面に引き込もうとするが、挟んだ土の壁が破壊され、ワルプルギスの夜は反撃と言わんばかりに高層ビルを投げつけてきた。

「うわっち!?!」

俺はギリギリで回避したが、後方のまどかとほむほむの反応が遅れていた。

「っ！」

「ほむらちゃん!？」

ほむほむはまどかを庇い、差し迫るビルに背を向ける。

「させるかぁ!!！」

俺は瞬間移動で強引に割り込み、エバーチェンジングを長方形の盾に変える。

「フアランクスシフトォ!!！」

強固な防御の魔法が発動する。

だが、魔力が不十分で魔法は不完全だった。ビルが激突、その衝撃も勢いも殺せず、俺たちはビル諸共、別のビルの壁面に叩きつけられた。

＊

まどかは閉じていた目を開く。痛みこそあるが、目立った傷はない。隣を見るとほむらが同じように倒れていた。しかし自分と同様に怪我はない。

「無事、みてえだな」

すぐ上から声がかかる。声の主を見て、まどかは目を見開いた。ジンが自分たちを庇うように覆い被さっていたのだ。全身は真っ赤に染まり、周りは血の海だった。

「ジン君！」

まどかは起き上がってジンを抱こうとし、更に息を呑んだ。
ジンの背中には瓦礫や鉄筋、ガラス片などが突き刺さっていた。
中には貫通しているものまである。

「ジン、君……」

「そんな、顔するな。ほむほむが悲しむだろ」

隣にいたほむらも起き上がり、ジンの惨状を見て呆然としていた。

「あなたは……私たちを……」

「あったりまえだろ。男として、当然だ」

ジンはうつ伏せに倒れる。その顔は悔恨で染まっていた。

「……ゴメン、俺、もう……」

どんどんジンから生気が失せていくのがわかる。

「最初から終末を使えば、みんなを……守れたのに、何でこんな」
「……っ！」

ほむらも唇を噛み締めた。まどかだけを救うために、繰り返してきた時間。だが彼女も心の隅で願っていた。

まどかだけではなく、みんなが生きる世界を。

「やっぱ俺は転生者^{クス}なんだな……自分の都合で物語をかき乱す。それだけの、存在……」

「そんな事ないよ！ ジン君は、みんなを、魔女にされた子達も救おうとしていた！ 何もかもを、否定しないで……」

まどかは嗚咽をこらえて叫んだ。

「でも俺は、何も守れなかった……相棒との約束も、ハッピーエンドも……」

ジンは拳をきつく閉じる。爪が食い込み、血が流れた。

「また、繰り返すの……？　でも繰り返し多分だけまどかの因果も増えて……」

ほむらはがらん、と腕に装着された盾を投げ出した。

「……まどか……」

その瞳から、一筋の涙が零れ落ちた。

「諦めてんじゃねーよ、ダチ公」

まどかたちの前に、一人の男が立っていた。

最終決戦 Connect

「……相棒……?」

ジンと同じ顔をした少年。ただ、髪の毛は白くジンよりも長い。瞳の色も紅かった。

「まずはその怪我をどうにかしねえとな。天使の落涙」

少年が手を翳すと真っ白な天使の羽が舞い落ちて、ジンやまどか、ほむらの身体に付着する。

すると、瞬く間に傷や痛みが癒されていった。ジンの身体に刺さっていた残骸も細かい砂のようなものになり、溶けてしまった。

「俺は稲尾ジンの創造主、鹿目剣。ダチ公が世話になったな」

「まどかと、同じ苗字……?」

「何でお前がこっちの世界にいるんだ!？」

ほむらとジンが剣に詰め寄った。

「あー、質問は一つずつな。まず、ほむほむの質問から。まどかと同じ苗字なのは偶然だ」

「偶然……」

「んで、ダチ公の質問の答えは、なんと言うか……一時的に俺の意識だけがお前の心に引っ張られて、こっちに来てしまったらしい」

「どういうことだ?」

「つまり、俺は手術によって身体は完全に眠ってる。だが意識だけはお前とリンクし続け、そのまま身体との繋がりを切られて、こっちの世界で具現化したというわけさ」

剣はジンの肩に触る。

「な？　ちゃんとお前を触ることができる」

「お前がここに来れた理由は分かった。でも、さっきの魔法は！？
お前、一般人じゃ……」

苦笑して剣はジンのデコを軽く叩いた。

「バーカ、お前を妄想したのは誰だ？　お前の身体を介して具現すれば、お前と同等、いやそれ以上の力を発揮できる」

腰間に下がった身の丈よりも長いダンビラを抜刀する。剣の服装はどこか東洋の剣士を思わせた。

「ま、チート能力があるとは言え俺は戦いに関しちゃ、トーシローだからな。だから力、貸してくれ」

剣はジンに、まどかに、ほむらに手を差し伸べた。三人は頷いて、剣の手と重ね合わせた。

「ダチ公と俺でワルプルさんを足止めする。ほむほむとまどっちはさやか、あんこ、マミさんと合流次第、連絡してくれ」

「分かった。まどか、行きましよう」
「うん」

まどかとほむらは手を繋いで走り去っていく。

「ありがとう、鹿目剣」

ほむらが去り際に、そう言い残していった。

「うおー、俺ほむほむにお礼言われた。かっかっかっ！ 後でネットゲーのダチに自慢してやろ！」

「まったく、お前はホント俺そっくりだな。ほら、奴さん痺れを切らしたみたいだぜ」

ジンと剣はすぐに表情を改めた。

ワルプルギスの夜が移動を始め、こっちに向かってくる。

「俺がここの世界に来れた現象を、俺はこう名付けたんだ」

剣のダンビラがガラリ、と輝き、ジンは大剣を担ぐ。

二人は瓦礫を踏み台にして勢い良く飛び上がった。

「コネクト
Connect」

心と心が繋がる、小さな奇跡。

＊

ワルプルギスの夜の進路を妨害するように、二つの光が縦横無尽に飛び回るのが見えた。

時には爆発、時には氷雪、時には雷光が、炸裂して闇夜を彩る。

「すごい……」

無事にマミと合流できたさやかが空を見上げ、呟いた。傍らにはマミと杏子が寝かされている。

ソウルジェムの穢れは浄化できたものの、疲労がたまりすぎたの

で一時的に休ませていた。

「さやかちゃん！」

瓦礫の山を乗り越え、まどかとほむらがやってきた。

「おお、まどか！ それに転校生も」

「ママさんたちは？」

「そこで寝ているよ。疲れがたまってるし、手下もあらかた片付いたからね。休んだほうがいいんだ」

「さやかちゃんは？」

「あたしは自己治癒が得意だからね。その気になれば痛み自体を消せるし」

本人の言うとおりでたつた。まどかたちは皆、傷ついていたがさやかだけは、開戦時と比べてほとんど変わっていない。

「みんなの怪我も治せばいいんだけど……」

さやかはどこか歯痒そうに、顔を顰めた。

「その気持ちだけでも、嬉しいよ」

「ええ、私も同じよ」

まどかは笑いかけるがほむらの表情に変化はない。

「転校生が笑うところ、見たことないなあ」

さやかが口を尖らせてばやいた。

「ならあなたも私の事は名前で呼んでくれない？」

「そうだね。ほむほむ」

「……なんであの男たちと同じ呼び方をするの」

＊

「来た！ ほむほむからの連絡だ。合流できたってよ」

ジンは大剣でワルプルギスの夜の魔力を斬り飛ばしつつ、叫んだ。

「了解い！」

剣も負けじと大声で返事をして、ダンビラを鞘に戻して構えた。

「神速拔刀！！」

一瞬、白い光が閃く。一拍置いて空気を切り裂く音が響き、ワルプルギスの夜に横一文字の傷を長々と刻んだ。

音を置き去りにし、抜き身すら見せない神速の居合い斬り。ジンの視力でもまったく捉えられなかった。

「よし」

剣はすつと身を翻し、下降していく。

「ほむほむたちと合流するぞ。ワルプルさんはしばらく動けん筈だ」
見ると、ワルプルギスの夜は停止し、刻まれた刀痕を癒していた。

「あの傷は簡単には治癒できない。つか、ワルプルさんまだ上下

逆さなんだな。元に戻らんうちに、どうにかしねえと」

「戻るとやばいのか？」

「……終末を使って、相打ちなるかどうかってところかな」

「マジか？」

「大マジ」

そんなやり取りをしながら二人は地表に着地した。すぐにほむらたちと合流し、さやかが目を丸くして驚いて説明を聞いてもらうまでに少し時間がかかった。

「天使の落涙」

剣の回復魔法でマミと杏子の傷も癒し、再び一同が会した。

「ワルプルさんはまもなくノックアウトから復帰する。第二段階移行までは粘ろう。俺の回復魔法なら体力と魔力、ソウルジェムの穢れを払える」

「もう作戦はねえ。各自、己が得意とする最大の戦法でぶつかってくれ。総力戦だ」

ダンビラと大剣が。

「そっちの方があたし的にはぴったりだ」

「杏子、ムリはダメだからね！」

サーベルと長槍が。

「あなたたちには恐れ入るわ。何回、奇跡を起こそうとするの」
「奇跡は願えば起こせるんだよ、きつと」

弓と盾が。

「私もそう思う」

最後にマスケット銃が掲げられた。

ここに集う七人の戦士は思いは違えど、信じるものは一つ。

——永き夜に終わりを、夜明けを。

「みんな、行くぞ!!」

最終決戦 夜明け

二人の男たちから最上級クラスの魔法や奥義が次々と打ち込まれていく。まどかたちはその隙を埋めるように攻撃していった。

だが天地を揺るがすほどの攻撃を幾度、受けようともワルプルギスの夜は決して倒れなかった。

「火力不足、なわけはねえよな。腐っても転生者と創造主だ。いくら相手が最強でもこれだけの攻撃を喰らえば……」

ダンビラで魔力を切断し、剣は息を吐く。

衰えない生命力と魔力。最強の転生者と創造主のタッグすらあしらわれる。

「こっちもお前のチートで無敵になってるようなモンだがな。でもこれじゃ、ケリがつかねえぞ！」

ジンは大剣でワルプルギスの夜に斬りかかる。鋭く、覇気を伴って繰り出される一撃は必殺の威力を秘める。

「引け！ ダチ公！」

剣はジンの襟首を引っ張り、引き倒した。刹那、ジンのいた空間を魔力の塊が薙ぐ。

「ひ、ヒエー……サンキュー、相棒」

「連絡はまだ」

来ないのか、と問いたただそうとした時だった。

ワルプルギスの夜に蔦が絡みつく。それは剣でもジンでも、まどかたちの誰でもない魔法だった。

蔦からはバラの花が咲き乱れ、紅い花卉を散らす。ワルプルギスの夜が振りほどこうとすると、今度は黒い影のようなものが地面から生え出し、がんじがらめにする。

「来た……！」

ジンの顔が明るくなる。

悶えるワルプルギスの夜を巨大なハコが閉じ込め、ややあつて爆発した。

まどかたちもジンの元へ集まってくる。

「来た！ 来た！！ 来たぞ！！」

ジンは興奮気味に天を仰いだ。まどかたちもそれに倣い、上を見上げて息を呑んだ。

＊

俺の脳内にシャルロッテの声が響く。

『遅れてごめん！ でも間に合ったよね！？』

ああ。間に合ったさ。

闇の空の下、集う幾千もの光。魔法少女一人ひとりが放つ魔力の光だ。

「世界中の魔法少女が、集結した」

俺の呼びかけに応じてくれた全世界の魔法少女。一人より、二人。二人より、三人。三人よりもいっぱい。

「すげえ！ マジで世界中の魔法少女が来てくれたのか！！」

剣も子供みたいにはしゃいで、同じようにはしゃぐさやかと抱き合った。

「よっしゃあ！！ 行くぞお！！」

俺は右手を天高く掲げた。闇の空を裂き、後光が差し込む。

溢れる光の中、一本の剣が落ちてくる。俺はそれを掴み、高々と翳す。

剣の名は聖剣エクスカリバー。あらゆる闇を切り裂き、光を齎す最強の剣。

「ワルプルギスの夜を、助ける！！」

世界中の魔法少女たちが、まどかたちが、剣が俺の後に続く。

叩き込まれる魔法の嵐に今まで悠然としていたワルプルギスの夜が初めて、笑い声ではなく悲鳴を上げた。

「喰らええ！！」

さやかと影の魔法少女エルザ、ハコの魔法少女エリーが共に突っ込む。蒼き閃光を帯びた一撃と束ねられた影がワルプルギスの夜を打ちのめし、巨大なハコが落下して押しつぶした。

「そろそろ、あんたも年貢の納め時だねっ！」

あんこが長槍を振り翳し、何十、何百と突き込む。止めに槍を変形させ、殴りつけた。

「派手に行くわよっ！ テイロ・ファイナーレ！！」

大砲から巨大な弾丸が打ち抜き、シャルロッテの召喚獣が食いちぎり、薔薇園の魔法少女ゲルトルトの蔦が締め上げた。

「……大したものね」

ほむらは時間を停止、自作の手榴弾を大量にばら撒く。時が動き出し、大爆発が巻き起こった。

「ご都合主義、ベタ、王道、大いに結構！ 俺はこんな展開を望んでいた！！ 秘奥義！！ 斬魔四神剣！！」

青龍、朱雀、玄武、白虎、東西南北に印を結び、剣はダンビウを振り翳した。聖獣の力が宿り、ワルプルギスの夜を一太刀の名の下に切り伏せる。

ワルプルギスの夜は地上に落下する。それでも尚、邪惡な笑い声を上げて暴れようとしていた。

「まどか、お前の因果律を解放する。一時的だがまどかは女神となる。俺の最強の奥義と合わせて、まどかの願いを託すんだ」

「うん！」

俺は指を鳴らす。まどかの身体をピンク色の光が包み、衣装が変わった。瞳は金色に染まり、髪を結んでいたリボンが解ける。

手には一輪の花を咲かせた、弓。その弓にまどかは弓を番えた。

「ワルプルギスの夜。今、お前の絶望をぶち壊す!!」

俺は聖剣エクスカリバーにありったけの力と想いを送り込んだ。刀身から光が伸長する。その光の刃は剣のダンビラより長く、その力は世界中の魔法少女たちよりも強い。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！
おおおおおおお！」

俺はエクスカリバーを握り、飛び上がった。満ち溢れる光の力が空を覆う闇夜を払う。雲間から太陽がのぞき、暖かい陽射しが差し込む。

「全ての悲しみに終止符をぶち込む!!」

太陽の光を背に受け、俺はエクスカリバーを振り下ろした。

「断斬運命剣！！」 ネガティブ・クラッシャアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアア！！！」

蓄積された光の力が解き放たれ、ワルプルギスの夜の魂を封じている部分を露にする。

「まどかぁ!!」
今だぁ
ああああああああああああああああああああ

ああああああ!!」

俺は力の限り、叫ぶ。

「もう誰も絶望させない！それが私の願い！！」

まどかの想いが込められた矢が放たれた。ピンク色の光と共にワ
ルプルギスの夜を貫き、全てを包んだ。

＊

夜が、明けた。

光明の見えない永遠の夜が終わりを告げたのだ。空を支配してい
た闇は消え失せ、底抜けの青空が広がっている。

昇る朝日が瓦礫の山と化した見滝原市を照らした。

「夜明けた」

隣に立つ剣が言う。周りでは集結した魔法少女たちがお互いに談
笑したり、新たな友だちとの会話に勤しんでいる。

疲労困憊のまどかたちは傍で寝ていた。彼女たちは、もうソウル
ジェムを身に着けていない。魔法の力は残るが、普通の女の子に戻
ったのだ。

「終わったな、俺たちの戦い」

「ああ」

目標を果たした歓喜も、達成感もない。あるのは全てをやり遂げ
た者にしか分らない、心地よい疲れ。

「お疲れ様」

足元にいたキュウベえが肩に乗った。

「ホントに誰とも契約する気はないんだな？」

「もちろんさ。僕らが契約に固執したのも全ては宇宙のためだ。その宇宙が救えるなら、僕らの出番はない」

「そうか。なら、受け取れ。俺の力だ」

キュウベエの背中にある口に、転生者の証である不死鳥を模したペンダントを入れてやった。

「きゅっぷい。じゃあ、僕は一回、自分の星に帰るよ」

肩から飛び降りてキュウベエの姿は、瓦礫に紛れて見えなくなった。

「……さて、と」

剣は身体をほぐしながら後ろを向いた。

「俺は先に逝ってる。お前は、ちゃんとお別れをしとけよ」

片手を挙げ、去っていく。足元から徐々に薄れていった。

「お疲れさん」

剣の姿が朝日の中に消えた。リンクは完全に途絶え、何もかもが絶たれる。

「あの……」

無言で剣が消えた場所を見ていた俺に、声がかけられた。振り返ると、どこかワルプルギスの夜を思わせる服を着た少女がいた。

「本当にありがとうございます。あなたたちには言葉では言い表せないくらい……！」

「今日からは普通の女の子として生きろよ。失った時間、しっかりと取り戻すんだぜ」

「はいっ！」

少女は眩しい笑顔で答え、エリーやエルザ、ゲルトルート、シャルロッテが待つほうへ走っていった。

「はあ、しかし本当に疲れたあ……」

「お疲れのようね」

ほむほむが寝転んだ俺の隣に座る。まどかたちも起き上がり、夜明けを喜んでいた。

「どうだ、願いが叶った感想は」

「そうね。とっても感動しているわ」

「その割には無表情だな」

「ほむらちゃん！」

と、そこへまどかがやってきてほむほむに抱きつく。

「ま、まどか！？」

ほむほむは顔を真っ赤にして、なすがままにされていた。

「杏子お！ あたしたち、夜を越せたんだね！」

「お、おい！ そんなに引っ付くなよっ」

「えっいいじゃん。それとも嫌なの？」

「ち、違っ！ は、恥ずかしいんだよ！」
「あはは」

ほむほむと同じくらい顔が紅潮しているあんこも、さやかに弄られていた。

うーん、やはり百合はいいな。

「稲尾さんもいかが？」

寝転ぶ俺にマミさんがティーカップを差し出した。

「あざっす」

起き上がって紅茶を飲む。疲弊した肉体が癒されていくようだった。

「うまい」

俺は飲み干し、素直に感想を言った。ティーカップをマミさんに渡して立ち上がる。ズボンについた埃を払った。

清々しい夜明け。

誰も死なせず、絶望させず、俺たちは夜を越えたのだ。

それは、つまり――

「ジン君？」

まどかが俺を見て、目を見開く。ほむほむやじゃれ合っていたさやかたちも、何が起きたのか分からないという顔をしている。

「ハッピーエンドだ」

俺の身体は、薄れ始めていた。

バイバイ

「どういう、ことなの？」

まどかは何とか言葉を紡いだ。

「ゴメンな。実は俺、呪いを解けなかったんだ」

その一言に、ほむほむを除いてまどかたちの表情が凍りついた。

「てめ、ウソついたのか！？」

「解けてないって……じゃあジンはどうなるの！？」

あんこが俺の胸倉を掴み、さやかはペタン、と座り込んでしまう。

「前に説明したとおりになる。俺はこの世界から消えて、記憶すら残らない……正しくは最初から存在しなかった、かな」

「ふざけんなっ！」

あんこは乱暴に俺を突き飛ばした。

「稲尾さん……」

年長者であるママさんも動揺していた。ほむほむだけはいつもと変わらない面持ちで俺たちのやり取りを見守っている。

「どうして黙っていたの……？」

まどかがかすれそうな声で言う。

「心配かけたくないからだ」

「ジン君は私たちの友達だよ！ だから心配して、当然でしょ！？」

友だち。

まどかの声に覚悟が揺らぐ。こんな転生者^{クス}の俺を友だちとして、見てくれるのか。

その優しさに、目頭が熱くなった。

「俺の目的はハッピーエンド。それだけだ。この世界には、もう俺は要らない」

その為だけに生まれ、戦い、ここまで来た。

目先の感情で揺れるな。

「要るとか要らないとか、そんなの関係ないよ……」

「関係あるさ。俺はこの世界にとって害毒なんだ。このまま居座れば、世界はどう転ぶか分からなくなる。そしたら俺の今までしてきた事が無駄になるんだ」

俺は諭すように、言い聞かせる。

頼むからこれ以上、俺の決意を揺らさないでくれ。

「自分ひとりが犠牲になるつもりなのかよ」

あんこが険しい顔で俺を睨む。

「残された奴の気持ちは、どうなるんだ」

「その気持ちも破壊される。転生者と幸せになれた二次元人は、いない」

「……行こう。さやか」

あんこは舌打ちして、へたり込んでいるさやかを負ぶった。

「え？　で、でも」

「行くんだ！」

有無を言わずにあんことさやかは避難所のほうへと立ち去っていった。

「……私も行くわね。あなたには、何を言っても届かないわ」

マミさんもそっと去っていく。

俺は心の中でお礼を告げた。気持ちを汲んでくれて、ありがとう。

「そんな、みんな！　待ってよ！」

泣きそうな顔でまどかが叫んだ。

「まどか」

俺はまどかに近付き、額に指先を当てた。

「トロイ世界樹の子守唄メライ」

まどかはよろめく。

「な、何を……？」

「睡眠魔法。普段は効き難いけど、疲労してるなら十分な効果がある」

「ひどいよ……どうして、こんな……」

「ゴメンな。でも次、目を覚ます時は俺のことなんか、忘れてるから」

「……ジ、ン君……」

まどかの瞳が閉じられた。涙が一筋、頬を伝う。
俺はまどかを抱きとめ、ほむほむに差し出した。

「逝くのね」

「ああ」

まどかを受け取ったほむほむは、やはり無表情だった。

「最後の頼みだ。いいかい？」

「いいわ。好きにきなさい」

俺はほむほむの両頬を両手で挟んだ。やわらかい、ほっぺの感触に思わず顔がほころぶ。

「気持ちいい」

「変態ね」

「変態と書いて紳士と読む。ここ、重要だぞ」

しばらく頬をムニムニしていたが時間が来てしまったようだ。
名残惜しいが俺は手を離す。

「……」

俺の身体は半分以上が虚空に消えかけている。辛うじて実体を留めているのは、肩から上だけだ。

「楽しかったよ。みんなと一緒に過ごせた時間は、一生の宝物だ」

俺の脳裏を走馬灯のように、今までの思い出が溢れては消えていった。

それは転生者という立場すら忘れさせてくれた。
本当に本当に、嬉しかった。

「俺は今、卑怯な事をする。転生者の分際で、立場を弁えない行動をとる」

そう言って俺は曉美ほむらを抱擁した。
女の子特有の甘い香りが鼻をつく。

「……ジン！」

「バイバイ」

一瞬、ほむほむが泣いているように見えた。が、すぐに視界は暗転し、闇に飲まれていった。

ありがとう

ワルプルギスの夜を越えて、一ヶ月が過ぎた。

壊れてしまった街は様々な国々からの支援を受け、あつと言う間に復興した。

「ほむらちゃん、今日みんなでカラオケに行かない？」

すっかり元通りに建て直された見滝原中学校には、かつての戦いの爪あとは微塵も見られない。

「ええ、行くわ」

放課後、まどかの誘いをほむらは二つ返事で応じた。

「やっぱりカラオケは多いほうがいいもんね」

「そうと決まれば早く行こうぜっ」

さやかと杏子がカバンを掴んで教室から出て行った。佐倉杏子はそのまま見滝原中学に転校する事になった。

と、言うよりも最初から転校の手続きが済んでいたのだ。だが誰がその手続きをしたのかは分からないらしい。

「今日は私たちも付き合いますわ。お稽古ありませんし」

「僕はずっと入院してたから上手く歌える自信ないなあ」

恭介と仁美。この二人は最近、付き合い始めたのだという。あまり関係が無かったので知らなかった。

「さ、行こう。ほむらちゃん」

ほむらは頷いてまどかと手を繋いだ。

＊

底抜けの青空が広がる。

その青空の下をまどかたちは歩いていった。お互いに談笑をして、時にはふざけあっていた。

「でね、杏子ったらね！」

「お、おい！ それは秘密だって、言ったじゃないか！」

「それ、本当かい？」

「杏子さんって大胆なのね」

さやか、杏子、恭介、仁美が笑い合う。

「あ、ママお姉ちゃん！」

「お待たせ」

ママさんのマンションで一緒に住み始めた、シャルロッテが合流した。

「……………」

ほむらは立ち止まり、空を見上げた。夜と死闘を繰り広げたあの日は、今では夢物語のように思える。

でもどうして自分たちは夜を越せたのだろうか。今まで繰り返してきた時間の中で、全員で夜に挑んだパターンはない。

自分ひとりでは魔法少女たちを守るはずが無かった。まどかで

さえ、守れなかったのに。
まるで、誰かが――

一瞬、脳裏を笑顔で笑う二人の少年の姿が過ぎった。

ほむらはハッとして振り返る。

「――ジン」

不意に、口から言葉が漏れた。

「稲尾、ジン」

その名前は聞いた事はない。
どうして知らない名前を言えたのだろう。

「ほむらちゃん？ どうしたの？」
「何でもないわ」

ほむらは踵を返し、まどかたちの元へと走っていった。

最初から彼らはいなかった。
全ては幻。魔法が見せた夢。
泡のように弾けて消える、ちっぽけな願い。

もう、誰もいない。

「
あ
り
が
と
う
」

o	x	
f	r	p
t	e	u
h	b	e
e	e	l
	l	a
u	f	m
n	i	a
i	g	g
v	h	i
e	t	
r	e	m
s	r	a
e	s	d
—		o
	t	k
	o	a
	t	m
	h	a
	e	g
		i
	t	c
	r	a
u		—
t		t
h		a

あいつがいない世界なんて、どうでもいい

「行くのか」

「どうせこの世界に未練はない」

「バカな奴だ」

「それが親友ともの願いだ」

「フン、約束を破った挙句、無理難題を押し付け、死ねと言う奴が親友ともだと？ 笑わせる」

「テメエには一生涯理解できねえよ」

「理解したくもない」

「別にいいさ。俺もテメエなんかとは分かりあいたくもねえ」

「カカカ……言ってくれる」

「何だ？ 殺り合う気か？」

「いいや、今のお前と戦うのは得策じゃないな。以前だったらぶっ殺せたが」

「おやおや。仮にも神の名を冠するクセして、エラく弱腰だな。そんなに俺が怖いのか」

「怖いね」

「……人間、辞めちまったからな」

「少なくとも俺の知ってる中で、お前みたいな奴はいなかった」

「元々、俺はありえねえ能力を持ってたんだ。どんな変異が起きてもおかしくはない」

「……本気で行くのか」

「言っただろ？ あいつと交わした約束なんだ。忘れて、のほほんと暮らしてられるかよ」

「お前はあいつと同じ、誰もいない道を往くんだぞ。その果てにある答えは、お前が一番良く知ってるだろ」

「一人じゃないよ。あいつが残してくれた足跡を辿るさ。きっと終着点で待ってくれている」

「それは生きる権利を放棄するほどのものなのか」

「あいつがいない世界なんて、どうでもいい」

「勝手にしろ。俺はもう、止めねえ」

「今までありがとうな」

「……フン」

＊

俺は最後に、振り返る。そこには誰もいなかった。

誰も、いなかった。

何も無い場所へ手を向けると、空間が不自然なくらいに歪む。渦巻き、振れ、黒い穴がぼつかりと口を開けた。黒い穴の中には宇宙のような景色が広がっている。

「じゃあな」

今まで世話になった世界へ、お礼を告げて穴に向けて一歩を踏み出した。

『がんばれ』

すっかり冷え込んだ夜風に乗って、かつての親友ともの声が聞こえたような気がして、俺は微笑した。頬を伝う涙も、これで最後だ。

「さ、行こうか」

俺の戦場はここじゃない。
在るべき場所へ、命を燃やせる地へ。
交わした約束を守る為に。

—戦士は再び、真理に反逆する—

あんたも、こっち側なのか？（前書き）

あんまり原作キャラが出てこない話になりそうだ・

あんたも、こっち側なのか？

巨大な満月が貼りついた漆黒の夜空を、二つの影が舞う。

片方は身の丈よりも長いダンビラを軽々と振り回し、東洋風の戦装束を身に纏う。

片や、ダークスーツに裏地が紅い黒マントを羽織り、黒髪をオールバックでぴっちり固めた30代くらいの男性。

「テメエ！ 転生者だろ！！ 何の目的でこの世界に来た！」

ダンビラを突きつけ、若者が吼える。

「ふむ。それよりも我輩の質問に答えて欲しいものだな。貴公、なぜ転生者と創造主を知っている？ 一つの世界に転生者は一人だけのはずだ」

いきり立つ若者とは対照的に、オールバックの男は冷静に応じた。

「答えて欲しければテメエの正体と名前を教えろ。返答次第ではぶち殺す」

「ならば我輩は黙するのみ。そして邪魔立てする貴公を殺す」

ニィ、と笑うと鋭い牙がのぞく。

「テメエ、吸血鬼か？ しけた転生者を妄想したもんだなおい」

「我輩の主を愚弄するか？ 楽に死ねんぞ」

「ハッ。上等。二次元人を陵辱するしかねえ転生者^{クズ}が粋がってんじやねえぞ！！」

若者はダンビラを振りかざし、男に肉薄する。

力任せに振りぬかれたダンビラは、しかし空を斬るだけだった。直撃の瞬間、男はマントを翻し、姿を消していたのだ。

「そんな頭の悪い戦法では、我輩には勝てぬ」

若者の背後に現れた男は、パチンと指を鳴らす。その音に誘われてこうもりの群が何処からか、湧き上った。

「殺れ」

こうもりの群は大挙を成して若者へと殺到する。

「頭が悪いかどうか、しっかりと見とけ。初心の太刀・乱影」

若者の姿がブレる。いくつかの幻影を作り、こうもりの群を目にも止まらぬ刀捌きで打ち倒していった。

「ほう」

あっという間にこうもりの群を全滅させた若者が再び男に迫った。刀を逆手に握り、振るかぶる。

「式振の太刀・岩融」

命中の瞬間に力を爆発させ、その威力で相手は三つに寸断される、筈だった。

だが男は吹き飛ぶだけで済んでいた。

「……マスケット銃」

男はどこから取り出したのか、一丁のマスコット銃を持っていた。それで先の攻撃を防いだらしい。

若者の脳裏を金髪ロールの少女の姿が過ぎる。

「それはテメエの創造主の趣向か」

「そうだ。我輩の主はこの世界のある魔法少女にご執心でね。マスコット銃を用いた格闘術も教わった」

「……やらせるか」

「？」

若者は殺意を漲らせた、ぎらつく目で男を睨みつける。

「テメエらなんざに、あいつが守ったこの世界を汚されてたまるかあッー！」

若者から放たれる殺気が爆発的に高まった。

黒い憎悪を綯い交ぜにしたような負の感情が、ぶちまけられる。

「終極の太刀……」

圧倒的な闘気が男を襲う。その場にいるだけで、体力が失われていくようだ。

「これほどとはっ！ 貴公、何者だ！？」

「往生しろ。もうお前に、生きる権利など……ぐあっ！」

唐突に若者は顔をゆがめ、頭を抑えて蹲った。

「ど、どうしたのだ？」

「……俺、たちは違う……俺たちは、ああああああああああああああああああああ……」

ダンビラを手放し、若者は地上へと落下していた。

「な!？ お、お前たち貴公を助ける!」

男の指令に従い、こうもりの群がダンビラと若者を受け止める。

「ふう、まったく我輩は何をしているんだか。今まで殺しあっていた相手を助けるなど……何? それでいいと?」

男は誰もいない虚空へ振り返り、そう言った。まるで誰かと会話をしているように、独り言を続ける。

「で、どうするのだ。この男。え? 素直に目的を話せと? いや、しかし」

渋面を作るがややあつて男は仕方なしに頷いた。

「……なんで助けたんだ」

こうもりの上で寝かされていた若者が目を覚まし、問いかける。

「我輩の主の命だ」

「あんたも、こっち側なのか? こっち側の目的があるのか?」

こっち側。その言葉に男は首を傾げ、カイゼル髭を指で弾く。

「その問いの意味は分かりかねる。が、我輩の主の目的はある魔法

少女と仲良くなる事。それだけである」

男の答えに若者は暫し呆然として、吹き出した。

「何がおかしいのだ」

「いや、悪かった。お前の主の目的が、なんというか昔の俺たちとダブってね……」

本当にバカで、お人好しで、ダメな奴の正義を貫いていた頃。
他の転生者から見ればあまりにも無意味と嘲笑われた。
それでも良かった。

彼女たちの幸せのためなら、死すら怖くない。

「今までの非礼を詫びるよ。俺は、鹿目……」

若者は口を噤み、言い直す。かつての名は、ない。

「稲尾ジンだ。よろしくな」

共に戦い、共に生き、一人で逝った親友（おとも）の名を継ぐ。

「我輩はホーナー・フォルスター。以後、お見知りおきを」

若者と男はがっしりと握手を交わした。

登場人物紹介

稲尾ジン （旧名 鹿目剣） 男 ???歳

転生者稲尾ジンのかつての創造主。

生存した理由、約束の内容などは一切不明。創造主としての能力は失い、かなり弱体化している。

以前の名前を捨て、稲尾ジンの名を騙っている。

装備

ダンビラ…使い古された刀。切れ味はなく、その刀の重量で敵を叩き割る。

戦装束…年季の入った衣服。薄汚れている。

【技】

初心の太刀・乱影…乱れ飛び、幻影を作って攻撃する。幻影にも攻撃判定があり、コンビネーションも可能だが実力的に不可能。

式振の太刀・岩融…逆手に持ち、相手の懐へと飛び込んで命中の瞬間に、パワーを炸裂させる。その威力で相手は三つに寸断されるらしい。

終極の太刀…不明。発動しようとするとう厨二病のような頭痛を引き起こすので、一回も成功していない。

ホーナー・フォルスター 男 31歳

転生者。吸血鬼としての能力を有し、見た目もいかにもといった感じ。吸血衝動はない。

貴族っぽい雰囲気もあるが別にそういうわけではない。
ある魔法少女と同じマスキット銃の使い手。

装備

マスキット銃…ある魔法少女とまったく同じ形状をしている。弾数は無限、らしい。もちろん近接戦闘にも使える。

【技】

フルークフリーデ…こうもりを操る技。たくさん呼んで、傘に集ませるとリアルこうもり傘。

エナジードレイン…いわゆる吸血。相手が男性でもできるが、腹を壊す。

変身…こうもりや霧に変身する。しかし膨大な魔力を消費するので好んで使うことは無い。

バース・ヴァンガード 男 20歳

転生者。西洋騎士風の姿をしている。

楽天的で楽観的。人懐こく、どこか動物を思わせる雰囲気がある。

槍術に長け、達人といわれる。

装備

長槍…ある魔法少女とまったく同じ形状をしている。本家と同様に変形する。

鎧…全身を覆う西洋風の鎧。なぜか真っ赤。

長嶋平八郎 男 55歳

転生者。筋骨隆々の大男。

戦場を知り尽くし、伝説の傭兵と恐れられていた。現在では戦場で負傷したため、戦線からは退いている。

豪快で荒らしい性格だが、頭に血が上りやすいのが難点。

装備

盾…ある魔法少女とまったく同じ形状をしている。時間操作も可能。

銃器…盾に収納されている。

金田美鶴 男 19歳 男

転生者。生粋のオタク。

アニメ、ゲーム、マンガなどのジャンルに精通。自分も同人誌をい

くつか出版し、高い評価を得ている。
エロ系は苦手。

装備

サーベル…ある魔法少女と同じ形状をしている。刀身が砕けても再生する。

巴けん ホーナー・フォルスターの創造主。男。
佐倉純也 バース・ヴァンガードの創造主。男。
暁美ダイゴロウ 長嶋平八郎の創造主。男。
美樹ゆたか 金田美鶴の創造主。男。

その言葉だけでも嬉しいぜ

俺とホーナーは喫茶店に入店して席に着いた。

「昔、創造主だったのさ」

開口一番、俺はそう言った。ホーナーは興味深そうに続きを促す。

「俺とダチ公は、彼女たちをハッピーエンドにする為に転生し、戦い、目的を果たした」

ウェイトレスがテーブルに来て注文を聞く。俺はブラックコーヒー、ホーナーも同じものを頼んだ。ウェイトレスが立ち去るのを見てから、俺は説明を再開する。

「戦いが終わって、ダチ公も俺も呪いで死ぬ筈だった。だけど……」

＊

辺りは漆黒だった。何も見えず、足は地に着かず、手を伸ばせど触れるものはない。

闇の虚空が延々とあるだけだった。

これが死というものらしい。死後の世界について語っている本がいくつか読んだが、どれも出鱈目だな。実際はこんなものだろう。

「よっ相棒」

突然、懐かしい声がして俺は顔を上げた。と言っても何も見えないので、顔を上げられたかどうかは分からない。

視線の先にはダチ公の姿がぼんやりと浮かび上がっていた。闇の中でも彼は輝いていた。

「お別れは済んだのか」

「ああ、最後にほむほむに抱きついてきた」

ダチ公は笑顔で言う。

「じゃ、逝こうか」

俺の言葉にダチ公はなぜか首を振る。横に。

「え？」

「悪いけど、お前は来ちゃダメだ」

殴りつけられたような衝撃を覚える。どんな時でも一心同体、一蓮托生の俺を拒絶する？

理解できない。

「どうしてだよ！ 一緒に死ぬって約束したじゃねえか！！ 一人にはさせない、俺たちは永遠に共に逝くと誓ったじゃねえか！！」

「お前には後継者になってほしい」

「何……？」

「幸せになったまどかたちの世界を未来永劫、見守って欲しいんだ。もしその世界を汚そうとする転生者がいたら、お前が裁くんのだ」

ダチ公の言う事も一理ある。だが、俺は。

「お前だけ逝くなんて、認められるかよ！ 俺はまた、一人になるんだぞ！」

「分かってる。分かってるさ」

「分かってねえよ!!」

「分かってる」

ダチ公は真剣な眼差しで俺を射抜く。

嗚呼、この目は。

「お前を一人にするなんて、俺も嫌さ。だけど、まどかたちの世界を見守る存在が必要なんだ。俺たちがしてきた事を無駄にしない為に」

父親が駄々っ子を諭すような口ぶり。俺は何も言えなくなり、黙る。

「頼む。お前しか、信じられる奴はいないんだ」

この目つき。この目つきになったダチ公は、どこまでも意固地になる。説得も話し合いにも応じない。

俺は諦める事を余儀なくされた。

「俺が生きて、どうするんだよ。お前がいなければ創造主としての力をなくして、ただの一般人に成り下がるんだぞ。それに病気のせいで身体も衰えてる。こんなポンコツにできることなんかあるかよ」
「神と交渉した。俺が地獄の最下層、無間地獄に堕ちるのを条件に、お前の存命を認め、一人前の戦士になるまで師事するとな」

無間地獄。その言葉に俺は背筋が凍る。

八つある地獄の内、もっとも恐ろしく、もっとも苦しみ、どんな極悪人も泣き叫ぶという。

他の七つの地獄でさえ、無間地獄に比べれば夢のような幸福と言

われてる。

「正気、なのか？ 本気でそんな事を……！」

「そうだ。神は転生者がもがき苦しむ様を見たいのさ。創造主は腐っても人間だ。呪いで殺せても、無間地獄送りは創造神が許さない。だが転生者は別だ」

二次元でも三次元でもない、どこにも属せない存在。
だから翱翔うが殺そうが、誰も咎めない。

「……イカれてる」

「俺もそう思う。でも今はしょうがない」

ダチ公の姿が崩れ出した。細かい粒子になり、背後の闇よりもお暗い闇へと吞まれていく。

「おっと、もう時間か」

ダチ公はまるで約束の時間に遅れそう、といった感じで言う。

「無間地獄に堕ちるだけで二千年かかるらしい。もうお前とは会えそうにないな」

「……助ける」

「ん？」

「必ず、お前を助けに行ってやる！！ 何百年、何千年かかろうと構わない！！ 必ずお前を助けてみせる！！ だから、待ってる！！」

「はは、その言葉だけでも嬉しいぜ」

ゆっくりと姿が薄れていく。俺はせめて、手を掴もうとしたが届

かない。

「じゃあな、相棒」

最後に満面の笑みを浮かべて。

「ジイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイン！！」

稲尾ジンは、消えた。

＊

話し終えた俺は、コーヒを一気に飲み干した。
苦い。

「そのようなことがあろうとは……」

ホーナーも絶句して、眉間にしわを寄せる。

「我輩も神と死神の残忍さは聞いていたが、予想を上回ったぞ」

「本当にヤベエのは神だ。死神はむしろ、俺を面倒見てくれたよ。
戦い方や生き方を教えてくれた」

「なんと！？ 冥界の使者は人間の世話をするのか！？」

「死神が牙を剥くのは、極悪人だよ。そんな死神ですら恐れるのが
無間地獄」

俺は空になったコーヒークップを見つめる。

「死の世界から生還した俺は、病院の霊安室から抜け出し、死神と

出会った。90年くらいはそこで修行したのかな？」

「90年！？ 貴公、今何歳だ！？」

「俺の時間は蘇った時から止まってしまった。今でもこの身体は当時のまま、16歳だ。正しくは、正式に後継者になって3年たつてから109歳だけだな」

90年。人間からすれば長寿になるのだろう。だが、ダチ公は未だに最下層へと落下している最中だ。半分も落ちていない。

二千年はあまりにも永すぎた。

「90年たっても『魔法少女まどか☆マギカ』は人気作なんだな」

「うむ。あの作品は正に名作。真の名作はいかに時が過ぎようとも決して色あせぬ。人の心に残り続ける」

俺が修行中の頃は死神が代行後継者をやってくれた。始末した転生者の数は100人前後だと聞く。

元々、創造主としての力を有する三次元人は多くはない。中には己の力に気付かぬままのものもいる。

希少な創造主と転生者が90年間で100人も訪れた世界。死神もこれほどに転生者が集中する世界は他にはないと言っていた。

ちなみに、俺が3年間の内に斃した人数は11人。

「ま、俺の話はこのくらい。それでホーナーのおっさんはどうするの？ そのマスケット銃の魔法少女に会いたいのか？」

「我輩はマミるのを阻止したかったのだが、どうもこの世界はハッピーエンドを迎えてしまったようだな」

「ああ。俺のダチ公が防いでくれたよ」

「ならば、呪いが発動するまでの余生をのんびりと過ごそうかね。我輩の主も同意した」

ホーナーは大欠伸をする。

「そっか。俺もおっさんみたいな転生者は久しぶりだ。最後まで付き合って構わないか？」

「うむ。話し相手にでもなってくれたまえ」

俺とホーナーは立ち上がり、とりあえずホテルにでも泊まろうかと、喫茶店から外に出た。

「カプセルホテルならいいとこ知ってるぞ。俺のダチ公が使ってた」
「我輩、普通のホテルがいいぞ……」

「なあ、あんたら」

不意に俺とホーナーに声をかけられた。

声の主を見ると全身を真紅の西洋風の鎧で覆った、好青年が立っていた。手には見覚えのある形状の長槍が握られている。

兜からのぞく顔は人懐こそうな感じである。

だが、俺とホーナーは彼を啞然と見つめる事しかできなかった。

「おいらの名はバース・ヴァンガード。一つ聞きたいんだけど、いいかい？」

ウソ、だろ？

「あんたら、転生者だよな？ 一つの世界に転生者は一人だけじゃ、なかったけ？」

尋ねてくる男も、転生者だった。

こりゃ、あともう一人来そうだな

「バカな……」

頭の中では次々と質問や疑問が渦巻くが、口に出せない。

なぜ一つの世界に転生者が二人も現れた？

死神が代行後継者をやった時も正式に後継者になってからも、こんなことは一度も無かった。

「お前、何者だ？」

「何者も何も、転生者だよ。転生の証だってあるぞ」

ほら、と鎧姿の男、バースは転生者の証である不死鳥のペンダントを見せた。

偽物はいない。そもそも二次元人がどうやって転生者になりすませる？

「一体、どういうことなのだ？」

ホーナーも困惑が隠せない。

俺は深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

「結論だけ言えば、原因は分からん。今まで同じ世界に複数の転生者が確認された事例はない」

「そっかあ。んー、おいらはこの槍とまったく同じの槍を持つてる魔法少女に会いに来たただけなんだけどな。どうしてこうなったんだろ？」

バースは首を傾げる。

「それがお前の転生理由？」

「そそ。彼女を助けたくて、転生したんだけど……ハッピーエンドを迎えたみたいだね」

「俺の転生者が成し遂げた」

「え？ 君、転生者と違うのか？」

「……また、説明するのか」

俺はため息をついた。

＊

再び喫茶店に入り、店員や客に変な目で見られながらも、俺は話し終えた。

「……そっか」

バースはそう言って、眉間を指でつまむ。

「ジンの気持ちに分かるとは言えんけど、少なくともそのアホ神に怒りは覚えたわ」

口調こそは静かだが、微かな怒気を含んでいた。

「何かあったら遠慮なくおいらを頼ってくれ」

「ああ、ありがとよ」

俺とバースが握手をしたところで、どら声が店内に響き渡る。

「その者ども！ ちょっといいか！」

俺たちは怪訝そうにそちらを見ると、迷彩柄のヘルメットと衣服を着込み、腰にはウェポンケースを吊るし、RPG-7を肩に下げた男だった。

がっしりとした体つきに、鋭い眼光。正に軍人を絵に描いたような男だが違和感があった。

右手に装着された、見覚えのある円形の盾。
明らかに他の装備とは異なっていた。

「おい、まさか……」

俺は口許が引き攣るのを感じた。
マジでこの世界に何が起こってるんだ？

「ワシの名は長嶋平八郎！ 階級は二等兵！ 役職は転生者！ 諸君らに問いたい！」

テーブルの前で立ち止まり、カッと俺たちを睥睨する。

「諸君らも転生者なのか？」

俺とホーナー、バースは顔を見合わせた。

「こりゃ、あともう一人来そうだな」

＊

平八郎もやはり、ホーナーやバースと似たような目的だった。
彼はこの盾と同じ形状の盾を持つ魔法少女を助けたく、転生し、
そして俺たちの活躍で世界はハッピーエンドを迎えたと知り、気概

を殺がれたらしく今は難しい顔で腕を組んでいた。

「どーなってるんだ。わけがわからねえ」

俺はホーナー、バース、平八郎が持っている武器を調べる。

やはり間違いなく彼女たちの武器と同じだった。

ホーナーのマスクット銃はバマミ、バースの長槍は佐倉杏子、平八郎の盾は暁美ほむら、そして……。

「あ、あの。き、君たち」

俺たちが屯するテーブルにまた新たな男がやってきた。

でっぷりと太った身体。横幅だけなら平八郎よりもでかい。まるで饅頭に首を乗せ、手足をくつつけたみたいだ。

頭にハチマキを巻き、メガネをかけている。店内にはクーラーがかかっているというのに、額に汗を滲ませている。

服装は柔道着のようなものだった。背中にある、見覚えのあるサーベルがなければ到底、転生者には見えない。何で、ありのままの姿を妄想したんだよ。転生者なんだから、美男子にすればいいものを。

「ぼ、僕の名前は金田美鶴。き、聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「なんじゃ、ワレは」

ぎろり、と平八郎に睨まれて美鶴はヒッと息を呑んだ。

「転生者だよ。俺以外全員」

俺は、説明をホーナーに任せて机に突っ伏した。

＊

結局、彼女たちと同様の武器を持つ男が一堂に会した。後は『弓』だけなんだが……俺、なんだろうな。捨てた名もそうだったし。

「で、どーするん？」

バースがコーラを飲みながら言う。しかしそれに答えられるものはない。

誰もが押し黙るので、仕方なく俺が口火を斬る。

「転生者と創造主の歴史の中で、こうして転生者が集まる事はなかった。つまり、これは異常事態になる。なぜこうなったのかは、俺にも分からねえ」

分かるのは、この世界は俺とダチ公によってハッピーエンドになり、誰にも予測できない未来へと向かっている。

転生者が二次元世界にとって危険だと、知ったからこそ俺たちは必要最低限の行動しかなかった。

だが、それでも問題が生じたらしい。こうして、転生者が一箇所集まったのだ。しかも全員が彼女たちと何らかの接点がある。

「うむ。どうにも嫌な感じがするのは我輩だけではないようだな」
「確かに、ワシも転生してから妙な気を感じる。大気が怒りに満ちとる……」

ホーナーと平八郎は既に異変を感知してるらしい。

俺は3年近く世界を見ていたが、まったく気付かなかった。だらしねえな。

「そこで俺たちは共に行動するのがいいと思う。ヘタに動くよりはマシだ」

「我輩は賛成だな」

「おいらも同じく」

「異常事態における鉄則は一人にならぬこと。ワシもジン殿の決定に従おう」

「ぼ、僕も」

全員賛成。

その後、俺たちは街にあるホテルにチェックインして、眠りについた。

結構、寂しいものだな

俺は目を覚ました。ひどい悪夢を見たような気がしたが、思い出せない。

ま、別にいいか。

隣で鼻ちようちんを膨らませているバースは、見事にベッドから落ちていた。それでも目を覚まさない彼の眠りの深さに感服する。

洗面所で顔を洗い、コンビニで買ったカップラーメンを平らげた。歯を磨いて普段着に着替え、ダンビラの手入れを始めた。

と、そこで俺はおもむろに手をかざした。

脳内でかつて彼女が使っていた弓をイメージする。当然だが、想像したものが具現したりはしない。俺にはもうそんな力は残っていない。

ただ、できるかと思っただけ。

ここに集った男たちの中で自分だけが、彼女たちとの繋がりがない。遠い昔、一緒に弁当を食べたり、魔女と戦ったりしたが、それはダチ公が経験した事だし、その記憶も破壊されている。

俺たちのことを覚えているのは、俺たち自身と神と死神だけだ。

「結構、寂しいものだな」

昔はよく一人がかっこいいとか、ほざいていたが本当に一人になって気づいた。

俺のことを褒めてくれる人も叱ってくれる人もいない。くだらない話で笑い合える友だちもいない。

「でも約束だもんな」

この世界を見守り続ける。転生者たちを退け、守り続ける。

悲しみも苦しみも、全部持っていく。
誰も絶望させない。

「むう……」

バスが目をこすりながら起床した。特徴的な紅い髪が寝癖で乱れている。

「おう、起きたか。顔洗って来い」

「りよおかい……」

どうやら寝起きが悪いらしいな。

＊

ホテルのロビーに俺たちは集まる。さすがに戦闘服のままだと怪しまれるので、平八郎とバスは私服に着替えていた。

「で、どーするん？」

喫茶店の時と同様にバスが言う。

またしても誰もが押し黙ったので、仕方なく俺が口火を切った。

「みんなはどうしたいんだ。魔法少女に会うくらいの自由行動ならいいぞ」

「そのつもりだったんだけどな。ぶっちゃけおいらは彼女が無事ならそれでいいんだよね」

「我輩も同意見である」

「ワシも」

「ぼ、僕も」

何て奴らだ。揃いも揃って、俺と同じ様な事を言いやがった。
俺は憮然としてため息をつく。

「それならそれでいいか……」

結局、市外へは出ないという約束をして解散となった。
市外どころか全員、部屋に戻りやがったけどな。

＊

部屋に戻っても退屈なだけなので、俺は守護神^{ガーディアン}へと切り換えた。
大仰な名前だが、別に大して強くはない。その間は理から外れる
ので、常人はもちろん転生者にすら視認できない状態になる。

代わりに能力値も全盛期までとはいかないが、ある程度は強化さ
れる。装備もかつてダチ公が使っていた変形器^{エバーチェンジンギンシンフル}と無敵の鎧に変化し
た。

後は適当に世界を彷徨い、下種な転生者を始末したり、人の手で
は解決できない問題があればそれを解決したり、不要な絶望をぶち
壊したりするだけだ。

「ん？ 早速、問題発見」

風任せに空を漂っていた俺は、高度を下げて地表に近付く。
そこには異形の怪物と蹲る一人の魔法少女を見つける。

「やれやれ、また出たのか」

ダチ公の秘術により、魔法少女たちは元の身体に戻っている。従
って魔女は生まれなくなったが、妙な奴が出没するようになった。

魔女ではないのだが、魔法少女以外には見えない。無害ではないので俺も発見次第、殲滅していた。

出没した理由？ 知らん。

「よつと」

エバーチェンジングを弓に変換、魔力で編んだ弓を番える。

理由は分らんが俺の魔力の色はピンクだ。男がピンクとは、随分とキモいかもしれない。

ピンクの魔力の矢が怪物のどてっ腹にぶち込まれ、爆砕した。

「他愛もない……」

突然、怪物が吹き飛ばされたのを見て魔法少女は辺りを見渡す。

すぐ隣に立つ俺には気付かない。

「ま、これからは気いつけなよ」

ポンポン、と魔法少女の頭を小突いて俺は地面を蹴立てて、飛翔した。

「次はどこに行こうか」

高く高く突き抜けるような青空。

ふと、昔を思い出して胸が痛む。分かっている。分かっているても、心が言う事を聞かない。

「……みんなに、逢いたいなあ」

空を見上げ、風の吹くままに放浪する。

帰り着く場所はあるのだろうか。誰もいない道の先に、ダチ公は待ってくれてるのだろうか。

「あー、なんで俺の鬱フラグは壊せねえんだろ」

俺の悩みとは無縁に、空はどこまでも高く輝いていた。

＊

狂気は、星辰から伝染する。

既に主は目覚め、戻ってくる。人の子よ、新たな恐れを知れ。遍く全てより何もかもが。

青き星は破滅し、あらゆる闇が満ちる。

地上のどこにもそれが満ちない場所はなく、人々は絶望しかない。

転生者たちよ、戦いに備えるがいい。

せいぜい、この私を楽しませろ。

私は夜よりも暗く、深い。

私は誰よりも強い。

なぜなら私を生み出したのは、貴様らなのだから。

本当に、ゴメン

俺は世界一周して見滝原市のホテルに戻ってきた。日はやや西に傾いていた。

ガーディアン
守護神を解除し、元の姿になる。

「暇だな」

俺はダチ公が通っていたネカフェに入り、そこで一夜を過ごした。

＊

肩や腰をほぐしながらネカフェを後にする。徹夜したがこの身体は疲れを知らない。食事も睡眠も本当は不要だ。

「よっ、ジン」

朝靄が降りる街中をバースがジョギングをしていた。

「朝からトレーニングか？」

「身体は鍛えないとダメだからね。平八郎もその辺を走ってるよ。ほら、あそこ」

トラックのスペアタイヤだろうか。紐を腰に巻き、タイヤを引きずりながら全速力で走っていた。なぜか上半身は裸だった。

「美鶴とホーナーは？」

「ホーナーは朝日が苦手だから部屋にこもってる。美鶴はギャルゲの攻略に忙しいんだって」

「分かった。俺も部屋に戻る。何かあったら連絡してくれ」
「オッケー！」

走り去っていくバスを見送ってから、ふと空を見上げた。

もう夜明けの時刻だというのに薄暗い。分厚い黒雲が見滝原市の上空を覆い尽くしていた。

唐突に覚える、強烈な既視感。

「なんだ……？」

この気配、どこかで――？

『緊急ニュース速報です』

電気屋で見本品として設置されている液晶テレビから、物々しいサイレンと共にアナウンサーが映る。

俺も含め、周囲を歩いていた一般人たちはテレビに釘付けになった。電気屋の店主も何事かと来る始末だ。

『たった今、入ってきた情報です。見滝原市にスーパーセルが発生すると、気象庁が発表しました。住人の皆さんはただちに避難してください』

住人たちは突然のニュースに呆然としていたが、広報車や消防車などがけたたましいサイレンを鳴らし、避難勧告を発令するのを目の当たりにして大慌てで散っていった。

だが俺は動けない。動けなかった。

闇、嵐、夜。三つのキーワードが意味するのは。

「ワルプルギスの夜……」

ありえない。ワルプルギスの夜は過去にダチ公の秘術によって、人間へと戻れたはず。

ソウルジェムも肉体へと還元した今、魔女化する魔法少女はいない。いるわけがない。

では、どうして？

俺は答えの見えない自問自答を繰り返す。

と、俺は以前、ダチ公が口にしたセリフを思い出した。

——転生者はこの世界にとって害毒なんだ。長く居座れば少なからず悪影響が出る。だから、呪いは解くな。どうせ誰にも解けない代物だが、念の為だ。

俺は血の気が引いていくのを感じた。

嫌な汗が噴き出る。

心臓が早鐘のように激しく脈打つ。

まさか。

まさか。

まさか。

ウソだ。

ウソだ。

俺たちは間違えていない。

間違えるわけがない。

ウソに決まっている。

＊

平八郎、バース、美鶴、ホーナーに緊急招集をかけ、ある地点に集まってもらった。

「どうしたのだ？」

朝日が苦手らしいホーナーもこの暗さのお陰で行動できる。

「夜が、来る」

「なん……じゃと……？」

平八郎が咥えた葉巻が地面に落ちた。

「え、だって夜は君の転生者が倒したんでしょ？」

美鶴は普段の倍近くの汗をかいている。

「ああ。でも、分かったんだ」

謎の怪物の出現。集結する転生者。夜の兆し。
この考えなら納得がいく。

「もう、この世界は歪んでいたんだ」

「歪む？」

「そうだ。俺たちは93年前、運命を変える為に転生し、無事に達成できた。できたはず、だった」

どうして、気付かなかった。否、故意に忘れたんだ。
認めてしまえば俺たちのしてきた事は全て間違いになる。

「知ってるよな？ 転生者は二次元世界にとって害毒。長期間、居

座れば悪影響を及ぼすって」

「うむ……ま、まさか……」

「いや、長期間とどまっちゃあいない」

あれが最短ルートだった。全ての魔法少女、魔女を救うにはどうしても時間がかかってしまう。

「物語を変えすぎたんだ。結果、それが凄まじい歪みとなって現れてしまった」

「原作の流れから逸れすぎたのか!？」

ホーナーが真っ青になって俺に詰め寄る。

「ああ。あの物語はどうやっても物語自体に反逆しなければ、ハッピーエンドにするのは難しかった」

契約破棄、全員生存、魔女の救済、ワルプルギスの夜打倒、ハッピーエンド。

「そしてこの様だ」

俺は空を見る。一切の光すらない暗黒。

ダチ公が恐れていた、ワルプルギスの夜よりも強大な何かが生まれようとしていた。

「俺はこいつを撃滅する。そうすれば歪みを正せるはずだ」

「で、ワシらの力が要る、と」

「そうだ。俺と一緒に戦ってくれ。今の俺は、弱すぎる」

こうなってしまったのも、俺の責任だ。凶々しい事は百も承知だ。

でも助けがなければ勝てない。この見滝原を守るのはダチ公との約束なのだ。

絶対に、守らなければ。

「どうせやることなかったし、ここは一つ戦うっしょ！」

バースは長槍を構え、不敵に笑う。

「そ、そうだね。ぼ、僕もこの街が壊されるのはいやだよ」

美鶴もヒザが震えながらも、サーベルを抜いた。

「我輩も同じ意見だな」

ホーナーはマスケット銃を握る。

「無論、ワシも戦うぞ。逃げるわけがなからう！」

RPGー7を取り出し、平八郎は新しい葉巻を咥えた。

「ありがとよ、みんな。感謝するぜ」

＊

黒い闇夜から生れ落ちたソレは異形、としか言えなかった。

街を生臭い冷気が包み込む。吐く息も白いが氷は霜は張り付かなかった。

「私の名前はカタストロフの月」

普通の生物なら目や鼻、口があるべき場所には無数の触手が蠢く。腕は枯れ枝のように細く、爪は不気味に輝いた。

表皮の色は赤黒く、イボのようなものがあちこちに見受けられる。芋虫のような巨体を引きずりながら、闇の中から這い出てきた。

「喋りやがったぞ……」

意味の無い言葉を発する魔女は稀にいるが、明確な意思を持って人語を繰ることはできない。

何者だ？

「お前は何だ。何しに現れた」

俺はダンビラを抜刀し、ソイツと対峙した。魔女とは比較にならないくらいに、でかい。

「私は世界の歪み。転生者による物語の改悪によって生まれた存在。名付けるならば――」

醜悪な外見に反し、舞台役者のようにはっきりとした声だった。どこかに声帯があるのか。

「魔人」

魔女がいない世界に現れた怪物の総称でもある、とソイツは言った。

「バケモンのクセして、魔？人？かよ。ふざけやがって」

ダンビラを正眼に位置して戦闘態勢に移行する。それに合わせて

バースたちも各々の得物を構えた。

「来い。罪を犯した子羊たちよ。私はそなたたちを歓迎する」

ソイツは大仰に腕を広げ、触手の中に隠れた口を開いた。
粘性のある唾液がぼたぼたと零れる。

「余裕ぶっこいてられンのも今の内だ!! 行くぞみんな!!」

「うむ!」

「オッケー!」

「イエッサー!」

「う、うん!」

＊

血の臭いが立ち込める。

壁面には骨や肉、赤黒い何かがこびり付き、真赤に染まっていた。
周囲は正に地獄絵図だった。攻撃や魔法によって破壊された建物。
千切られた手足。ぶちまけられた鮮血。

「ふふ、ははは! その程度か。ツマラン、実にツマラン。もっと
私を楽しませてくれたまえ」

「ぎゃああああああああああああああああああ!!」

カタストロフの月と名乗る魔人の手に捕らえられた美鶴が、この
世のものとは思えない絶叫を上げた。

めりめりと音を立てて指が美鶴の肉に食い込み、骨を搥り潰し、
臓器を抉る。目や口から血を流して悶えた。

「お前えええええええええええええええ!!」

右手を失くしたバースが長槍を振りかざし、魔人に突っ込む。魔人の頭部へと寸分も違わない一撃が叩き込まれる。

だが、魔人は嘲笑い、触手でバースを絡め取った。

「なっ!？」

触手が胎動し、何かをバースの体内に送り込み始めた。

「つてめえ!!」

俺はダンビラで触手を寸断する。緑色の液体が飛散し、俺は要領よく避けた。

「バース――」

大丈夫か、と言おうとした俺は二の句が告げられなかった。

「あ、ああかかかかかかった」

バースの身体が風船のように膨張する。細身で二枚目だった時の面影はない。

鎧が耐えかねて壊れてもなお、膨らみ続けた。

「じゅ、純也、ゴメ……」

創造主の名前なのだろうか。バースは振り絞るようにその名を呟くと、破裂した。

傍にいた俺はまともに浴びたが、何も言えなかった。背後からは水気を帯びる音がする。

振り向くと原形を止めていない美鶴が転がっていた。

「おのれい！！ 覚悟はできておるのだろうか！？」

目の前で仲間を二人も殺された平八郎が激昂する。盾を掲げ、時間停止を行おうとした。

「落ち着くのだ！ 平八郎殿！」

ホーナーが咄嗟に止めに入る。だが彼らも深く傷ついていた。ともに戦える余力はないはずだ。

「あの魔人には我輩らの攻撃はまったく通じん！ 時間停止も効かなかったらどうするのだ！？」

「出会ったばかりとは言え、仲間を二人も殺されたのだ！！ 落ちて着いていられるものか！ 特攻をかけてでも奴を殺す！！」

完全に暴走している平八郎をホーナーは必死で取り押さえた。だが俺は、血塗れたまま立ち尽くしていた。

ダメだ。

勝てない。

あいつには勝てない。

絶対に勝てない。

俺が生んでしまったからだ。

俺たちが物語に反逆し、歪めた答えなのだ。

歪みによって世界は壊れてしまった。

全て、間違いだった。

失敗した。

「ジンも手伝ってくれ！ 我輩では食い止められん！」

何もかもが無意味だった。

俺たちは、ただ助けたかったのに。

「ジン！」

俺はダンビラを鞘に戻し、魔人の前面に防壁を張る。

「もう、やめよう。俺たちは勝てない」

俺の言葉に平八郎は大人しくなり、しかし今度は俺に対して烈火のごとく怒った。

「貴様あ！！ それでも戦士か！？」

ホーナーが抑えていなければ俺を殴りつけんばかりの勢いだ。

「ジン、どうしたのだ？ ここで逃げれば、こいつはこの街を破壊してしまうぞ！」

「分かってるよ。ホーナー」

「ならば、戦わなくては！」

「ダメだ。俺たちの力ではあいつは絶対に倒せない。バースや美鶴のようにされるだけだ」

俺は平八郎の右手に付けられている盾を外した。

「何をする！？」

「過去を書き換える」

「……は？」

「俺の魔法と平八郎の盾を使い、93年前に戻って転生してきた俺のダチ公を殺す。そうすれば、全てがリセットされる」

ホーナーと平八郎は何も言わない。先から防壁を破ろうとしていた魔人も、今は俺の言葉に耳を傾けている。

「奴を倒せない以上、この歪みを正すには、全部をやり直すしかない」

「正気か！？　それがどういう事か分かっているのか！？」

「分かってる。でも、やるしかないんだ。こうなったのは俺の積だ。テメエのケツくらいテメエで拭えるさ」

俺は魔法陣を敷く。緻密な図形とルーン文字、象形文字を組み合わせ、膨大な魔力を込める。

「お前らを巻き込んだのは、本当に悪かった。過去をリセットすればお前たちも多分、別の未来に進める」

魔法陣が発光し、眩い光を放つ。

盾の内部のギアがカチリ、と音を立てた。

「そうはさせんぞ。そなたたちはここで死ぬのだ」

防壁を突き破り、魔人が俺に向かって突進してきた。その魔人の顔面に爆発が巻き起こる。

「平八郎！」

「行けよ、ジン。ここはワシが食い止める。しっかりとツケ払ってきやがれ」

「邪魔立てするか！」

魔人が触手を伸ばしてくる。

「おっと、我輩を忘れては困るな」

ホーナーのマスコット銃が火を吹き、触手を残らず打ち落とした。魔人は苦悶の声を上げて仰け反った。

「本当に、ゴメン」

最後に俺は、バースの肉片、潰された美鶴、触手に掴まれながらもRPGー7をぶっ放す平八郎、額から血を流して絶叫するホーナーを見て、魔法を発動させた。

「今、時は遡る」

俺は異空間へとその身を躍らせた。

ハッピーエンド以外、絶対に認めねえ

俺は目を開く。そこは夕焼けに染まる病院の前だった。

魔法で時間を調べると間違いなく93年前の世界に来ていた。確か、シャルロッテに襲われそうになったのをダチ公が助けたんだっけ。

本当は転生する瞬間に行きたかったのだが、少しミスった。

「そろそろ、来るよな」

あいつがマミさんを助けに、結界へと突入する。俺はダンビラをグツと握り締め、歯を食いしばった。

全てをリセットする。

それがどういう意味なのかは分かっていた。分かっているつもりだ。あいつとの約束も、すごした時間も、何もかもを消去する。歪みの原因となった過去を修正すれば93年後の世界に魔人はいなくなる。

だけど。

まどかたちも、救えなかったことになる。魔法少女は絶望し、魔女になる。まどかは女神になって、ほむらと会えなくなってしまう。何も守れず、救えないことになる。

「……っ！」

どっちが正しいのかなんて、俺には分からない。どちらを選んでもハッピーエンドを迎える事はできない。

ホント、なんてザマだよ。正義のヒーロー失格じゃねえか。

テメエの好きな人たちすら守れねえなんて。情けねえ。

俺たちは最初から間違えてしまったんだ。彼女たちを守る事しか

考えず、物語に逆らい、歪めてしまった。それが余計に状況を悪くしただけなのに。

「ちくしょう……ちくしょう……」

守れなかった。

何一つ、守る事ができなかった。

好きなように物語をかき乱しただけ。自己満足に浸っていただけ。後悔しか、なかった。

「俺たちはみんなを守りたかったただけなのに……」

俺は蹲った。やめよう。これ以上、悩んでも答えは出ない。

＊

どのくらい待っただろう。

足音が聞こえてきた。

俺は立ち上がって、物陰に隠れる。

「……ダチ公」

遠くに見える懐かしい姿。目深に被った野球帽。

視界が歪む。目から暖かいものが溢れ、地面に水滴を作った。

「ゴメンな、ゴメンな」

前が良く見えない。涙が止まらなかった。

「約束守れなくて、ゴメンな」

ダンビラを構え、飛び出した。一瞬、走ってきたジンと目が合う。ジンが俺を見て何かを言おうとして――

それは叶わなかった。

俺のダンビラがジンの首を刎ねる。生首が転がり、断面からは噴水のように血が吹き上げた。

頭を失った身体はふらつき、倒れる。

「ははは……」

ダンビラを投げ捨ててジンの生首を拾った。その表情は、何が起きたのか分からないといった感じである。

「はははははははっ!!」

俺は笑った。

笑い続けた。

なんて滑稽なんだろう。俺たちは道化^{ビヒロ}だ。哀れで、無様な道化^{ビヒロ}だ。一人で正義に陶醉し、自慰していた。

「はははははは……ッ」

でも、これだけは信じて欲しい。

俺たちはまどかたちを守りたかった。まどかたちがハッピーエンドの世界で生きてもらいたかった。誰も絶望させず、笑顔でいて欲しかった。

「俺たちの戦場は、ここでもなかったんだ……いや――」

まどかたちが大好きだった。

「俺たちに居場所なんて、最初からなかったんだな」

抱きかかえたジンの生首が粒子になって消え去っていく。同時に俺の身体も消滅を始めた。

ジンの死は俺の死。過去の世界のジンが死ぬ事で過去の俺自身も死に、未来は潰える。

全てがリセットされるのだ。このほかけた、茶番が。

「なあ、もし本当に奇跡や魔法があるなら俺たちの最後の頼みを聞いてくれよ」

俺は夕焼けの空を仰ぐ。

「まどかたちを幸せにしてくれ!! 誰も死なせないでくれ!!」

右半身から身体が崩れる。煌く光の欠片になって、俺という存在がなくなっていく。

「頼む！！ みんなを泣かせないでくれ！！」

最後の最後に、声を振り絞る。

[illegible]

そして、俺の意識は闇へと沈んでいった。

底のない永遠の闇へと。

If there is despair,
spoil it
絶望があるのならぶち壊せ

If there is not hope,
create
it

希望がないのなら創り出せ

どこかで、会ったような…

僕は目を覚ました。

室内に鳴り響く目覚まし時計を止めて、ベッドから起き上がった。ブカブカの寝間着を脱いで、制服に着替える。

簡単な朝食を摂り、顔と歯を磨いた。カバンの中に教科書をつめて運動靴を履く。

玄関のドアを開けると朝日が目に指し込み、思わず目を細めた。

「今日もいい天気」

そう呟いて、僕は歩き出した。

＊

学校に近付いてくるにつれて、登校する生徒の数も増えてきた。

「は、派手すぎない？」

「とても素敵ですよ」

「恥ずかしがる事ないって」

途中、同じクラスの子が立ち止まって話していた。鹿目まどかと美樹さやか、志筑仁美だ。

名前は知ってるが会話をした事はないので僕は、そのまま通り過ぎた。

学校に到着し、教室に入る。適当に友だちと挨拶や会話をしチャームが鳴ったので席に着いた。

担任の早乙女先生が入ってきた。

「朝のHRを始めます。まずは出席から」

早乙女先生が出席簿を片手に、出席を取り始める。

「阿部さん」

「ウホッ……じゃなくて、はいっ！」

「井ノ原ゴン太さん」

「ういーっす」

「上田謙三さん」

「へえーい」

「江田島次郎さん」

「はいっ！！」

「大神両さん」

「ちいーす」

僕は欠伸をしながら名前が呼ばれるのを待つ。

「高宮ハヤトさん」

「おーっす！」

「獅子王ゲキさん」

「押忍っ！！」

「武藤ヒデヨシさん」

「はい」

あの三人だけ苗字の順番で呼ばれない。何でも仲の良い三人組だからどんな時でも一緒らしい。

「姫宮リンさん」

「あ、はい」

僕の名前が呼ばれ、返事をした。

出席を取り終わると早乙女先生は、バン！と出席簿を教卓に置いた。

「ごほんっ。今日は皆さんに大事なお話があります。心して聞くように」

早乙女先生はまじめな表情で周囲を睥睨する。

「目玉焼きとは！ 半熟ですか！？ 固焼きですか！？ はいっ、中沢君！！」

指し棒で最前列にいる中沢君に向ける。

他の生徒からはああ、またかといった言葉が漏れる。唐突で、意図をつかめない質問だがいつもの見慣れた風景であった。

僕もまたダメだったんですね…と心の中で呟く。

「ええ！？ ええっと、どっちでもいいんじゃないかと……」

「その通り！ どっちでもよろしい！ たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まったら大間違いです！！」

生徒から納得のいく答えをもらえて更に早乙女先生は、ヒートアップした。そ

して普通なら簡単には折れないはずの指示棒が真っ二つにへし折れた。

「女子の皆さんはくれぐれも半熟じゃないと、食べられないと抜かす男とは交際しないように！！」

先生はこうしてプライベートの鬱憤をぶちまけている。悪く言えば愚痴だが、良く言えば助言ともいえる。

「そして男子の皆さんは、卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと!!」

溜まっていたものを全て吐き出せたのか、早乙女先生はとてもすっきりした表情になった。

普段の穏やかな笑顔を浮かべている。

「あと、それから今日は皆さんに転校生を紹介します」

転校生？　もう五月なのに珍しい。

「暁美さん。いらっしやい」

先生の声に促されて、一人の女子生徒が扉を開けて入ってきた。

「うわっ、すげえ美人……!」

美樹さやかが開口一番、そんな言葉を発する。僕も入ってきた彼女に見惚れていた。

艶のある黒髪、しなやかな肢体、凜とした表情。そして迷いも濁りもない瞳は、本当に綺麗だった。

同時に僕の脳裏をセピア色の映像がノイズ混じりに再生される。

暁美、ほむ……が、大……き……

帽子を目深に被った、少年？　転校生と一緒に……？

(どこかで、会ったような…)

この感覚は一体？

「暁美ほむらです」

暁美ほむらと名乗った転校生は、教壇の前で自己紹介をした。クラスを包むざわめきにも一切の感心を持たず、淡々と名前を述べて一礼をした。

僕はハッとして拍手をする。ソレを機に他のみんなも拍手を始めた。

だがほむらはただ一点だけを見つめていた。その先にはまどかがいた。知り合いなのか？

＊

休み時間になるとほむらは質問攻めになっていた。主に女子から。僕は眠かったので机に突っ伏していた。

ウトウトしていると耳にまどかたちの声が届く。

「ねえまどか。あの子知り合い？　なんかさっきすごいガン飛ばされてなかった？」

「え、えっと……あの」

少なくとも知り合いって感じじゃなさそうだ。でも、完全な他人でもないのかな。

「鹿目まどかさん。あなたがこのクラスの保健委員よね。連れてってもらえる？　保健室に」

「あ、あの……その、私が保健係って……どうして……」

「早乙女先生から聞いたの」

「あ……そうなんだ」

色々と何かありそうだったが、僕は彼女たちとは特に親しくはない。図々しく首を突っ込むわけにもいかない。

そのまま眠気に任せて僕は、眠りに落ちた。

どこかで、会ったような… 2

よくアニメやマンガに出てくる転校生は文武両道の超人である確率が高い。おまけに容姿端麗で、非の付け所がない。

だけどそれはあくまでも物語の中だけの常識だ。実際の転校生は頭脳明晰でも才色兼備でも、ましてや実は能力者だったなんて事はない。

最初は物珍しさで騒がれるが、数日もすればみんな飽きてしまうだろう。目立つのは最初だけだ。

そんなテンプレ通りの転校生が現れる確率なんて、空から降ってきた隕石に直撃して死ぬのと同じくらいだ。

だから僕は別段、暁美ほむらという人物に興味はなかった。

ついさっきまでは。

「け、県内記録更新……!?!?」

体育教師が啞然としていた。

ここしばらく破られなかった高飛びの記録が塗り替えられた。僕が以前、やっとの思いで叩き出したクラス新記録なんてどっかに行ってしまうほどの、大記録。

次の数学の授業では僕には到底、理解できない数式をいとも容易く解いてしまった。

……うん、隕石が降ってきたね。

＊

今日の授業が全て終わる。ちらり、とほむらのほうを見るとまだ

クラスメイトたちに囲まれていた。別のクラスの連中までいるし。話しかけてみようかと思ったのだがあれだけ人がいては、やりにくい。

バイトもあるし、また明日にでも話しかけてみよう。

僕はカバンを引っ担いで教室を後にした。

＊

店内改装のバイト、やっぱりやるべきだったかな。

薄暗い改装中のフロアで一人、ため息をつく。軍手をはめた手で額の汗を拭い、邪魔なダンボールを積み上げた。

ケレン棒を掴み、ガリガリと壁の塗装やタイルを剥がしていく。一折、剥がし終わると今度はケーブルカッターを持って、脚立にのぼり天井から垂れ下がる不要なケーブルを切り取った。

「疲れるな……」

一旦、資材に腰掛けて一休み。

その時、誰もいないはずの天井から物音がする。何かが走り回る音、破壊音。

ネズミが暴れてるのかと思ったが違うようだ。

「誰？」

泥棒だったら警備員に知らせなきゃいけない。

と、今度は背後で扉が開く音。

「え？」

僕が振り返るとそこにいたのは、鹿目まどかだった。学校帰りな

のか、制服姿のままだ。

「ここ関係者以外、立ち入り禁止……」

「どこにいるの？ あなたは誰？」

鹿目は僕の言葉を無視してこっちに来る。

「誰かって、ここは僕しかない……」

「助けて……！」

鎖が落下し、通気ダクトの蓋が大音響を立ててむき出しのコンクリートにぶち当たる。

「うわぁ!？」

「っ!？」

昨日、溶接しておいたダクトの蓋が外れた？ いやそれよりも今の声は？

混乱しながらも僕は鹿目と一緒に、落ちてきた場所へ近寄る。

「何だ……この生き物」

どんな生物にも当てはまらない姿をした、生き物がいた。

全身は白い体毛に覆われ、耳はネコと似ているが、耳の中からやたらと長いもの（触角？）が生えていた。

その生き物は怪我をしていた。擦過傷や裂傷、銃創などがあちこちに見受けられる。弱々しく胸が上下してるので生きてはいるのだろう。

これだけの傷で、まだ生きている？ 流血もそれほどではない。僕は必死で目の前の出来事を処理しようとしていた。

何が起こったのか。

どうしてここに鹿目が来たのか。
さっきの物音と関係してるのか。

「あなたなの？」

「たす、けて……」

僕があれこれ考えてる間に、鹿目はその生き物に近付いていた。
瓦礫や埃を払い、そっと抱き上げている。

生き物は薄っすらと目を開く。紅い、瞳だった。

「そいつから離れて」

不意に響く声。

僕は考えるのをやめた。これ以上、考えても混乱するだけだと感じた。

なぜなら転校生、暁美ほむらがいたからだ。暁美の服装は、なんというか、良く分からない。あんなデザインの服は見たことない。
だけど彼女が背負う雰囲気で分かった。天井裏の騒音もこのわけの分からない生き物の怪我也、全て彼女がやったのだと。

「でも、この子怪我してる……」

暁美は鋭い視線を投げかけ、鹿目を射抜いた。謎の生き物も怯えるのか、小さな鳴き声を上げる。

だが暁美は表情を変えずに一步、前に進んだ。

「ダメだよ！ ひどいことしないで！」

必死に謎の生き物を庇い、守ろうとしていた。

僕はただ黙って彼女たちを見てるしかできない。今の彼女たちの間に割って入る資格はない。

「あなたには関係ない」

「だってこの子、私を呼んでた！ 聞こえたんだもん、助けてって！」

「そう」

鹿目の叫びも無視して暁美は、近付く。なす術がない鹿目は白い生き物を抱きかかえ、蹲っていた。

小さな身体が震えている。本当は逃げ出したのだろう。でも鹿目は逃げなかった。あの白い生き物を守ろうとしていた。

？ 見てる？ だけの、僕とは違った。

「まどか！ こっち！」

突然、新たな声が響いて暁美が白い煙に飲まれた。煙の発生源を見ると美樹が消化器を構えて暁美に吹き付けていた。

おいおい、勝手に備品を使うなよ。店長に怒られるのは僕なんだ。

「さやかちゃん！」

まどかは白い生き物を抱え、出口のほうへ美樹と一緒に走っている。美樹が投げ捨てた消化器がゴロン、と僕の横に転がった。

「あーあ……怒られる」

僕はため息を吐いた。換気扇のスイッチを入れると、煙が面白いように吸い出されていった。

既に暁美の姿もなく、外れた通気ダクトの蓋と鎖、消化剤がぶち

まけられた後、空っぽの消化器が残されていた。

「これ、全部僕が始末するのか……」

三度、ため息をして肩をすくめた。

「バイト代減らされるかなあ……」

僕の声は反響し、薄闇に消えていく。と、不意に改装中の殺風景なフロアが歪む。

何だろう、と目を凝らしている間にもどんどん景色は変わっていった。

硬質な床が柔らかいものに変質する。せまっ苦しいフロアの壁が消失し、先の見えない空間が広がった。そしてまたしても得体の知れない生き物が徘徊し始める。

黒い蝶々のバケモノや、カイゼル髭を生やした毛玉など、統一性がない。コラーージュと呼ばれる美術の作品の中に紛れ込んだみたいだった。

「どーすんの、これ。というか、バイト代が……」

周囲を見渡しても出口は見えない。様々な雑誌や写真から切り抜いたような、色んなものがごちゃ混ぜに並んでる。

とりあえず工具をエプロンのポケットにしまう。さて、どうしたものかと悩んでいるとカイゼル髭の毛玉が数匹、歌を歌いながら集まってくる。

どこの歌だ。外国の民謡か？

「もしかして、ヤバい？」

黒いハサミの影がチャキチャキと音を立て、毛玉の歌声が渦を巻くように僕を取り囲む。

「店長、すみません。使わせていただきます……っ！」

懷から爆竹を取り出す。大量の爆竹にライターで火をつけ、異形の群へばら撒く。

同時に僕は背を向けて出口があったほうへ、走り出した。背後でけたたましい破裂音と閃光が迸る。目くらまし位にはなるはずだ。

＊

延々と続く道をしばらく走っていたら、唐突に世界は元へ戻された。

見慣れた、薄汚い改装中のフロア。

かなりあちこち走り回ったというのに、僕は巻き込まれる前の位置からほとんど移動してなかった。

まったく、何がどうなってるのやら。

「魔女は逃げたわ。仕留めたいのならすぐに追いかけなさい。今回は譲ってあげる」

金髪ロールの女性が暁美に対して、強い口調で話しかけていた。

金髪ロールの女性も暁美の衣装と似た雰囲気があった。

彼女の傍には鹿目たちもいる。腕にはあの白い生き物も。

「私があるのは……」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」

暁美に金髪ロールの女性はより強い口調になる。

（ん？ 待てよ。あの人、三年生の巴マミじゃないか？）

面識はないが名前と顔なら何回か、見たり聞いたりしている。面倒見が良い事で評判だ。

暁美は一瞬、悔しそうな表情を見せて去っていった。

なんか色々とり込んでるな。聞きたいことは山々だけど、ここは僕も退散したほうがよさそうだ。

部外者が図々しく顔を突っ込むわけにも行かないだろう。

（あー店長への言い訳、どうしょ。後、バイト代も）

僕はそつと改装中のフロアから抜け出した。

あなたは、何者？

昨日はホントに厄日だった。

バイト代はもらえず、問答無用でクビにされた。さすがにムカついたので、店に爆竹を数個、仕掛けておいたが。

朝から気分は最悪だが、ぼやいてもしょうがないのでさっさと朝飯を済まし、学校に向かう。

通学路の途中でまた鹿目たちと出会った。良く見ると鹿目の肩に昨日のわけの分からん生物が乗っている。

しかし志筑はその生き物に気付いていないのか、普通に鹿目や美樹と会話していた。

「やっぱそいつ、私たちにしか見えないんだ」

「そうみたい」

美樹と鹿目が小声でそんな話を話し合っていた。

僕も見えますよっと。

（あと、頭の中で考えるだけで会話とかできるみたいだよ）

（ええ！？ 私たち、もう既にそんなマジカルな力が？）

今度は直接、僕の頭の中に響く。なんで僕にも聞こえるんだろ。

傍受してるみたいで何か嫌だ。

このまま傍にいるといけないうような気がしたので、僕は足早に立ち去った。

＊

（つかさ、あんたのこのご学校について来ちゃって良かったの？）

逃げてても同じクラスだからあーんま、意味無かったなー。

僕は机に突っ伏し、鹿目たちの会話を聞いていた。盗み聞き、じゃないよね？

(どうして?)

(言ったでしょ？ 昨日のあいつ、このクラスの転校生だって。あんた命狙われてるんじゃないの?)

僕が帰った後、どんな事があったのかは知らないけどやっぱ暁美はあの生き物を狙ってるらしい。

ああ、ホントなんで聞こえるんだよ。すごい後ろめたくなるんだけど!?

(むしろ学校の方が安全だと思うな。マミもいるし)

(マミさんは3年生だからクラス、ちょっと遠いよ?)

(ご心配なく。話はちゃんと聞いてるわ)

巴の声も聞こえてきた。

もうダメだ。今更、僕も聞いてますなんて名乗り出られない。でも黙って聞いているのも感じ悪いし……。

僕はどうすればいいんだ!

(あ、えっと、おはようございます)

(ちゃんと見守ってるから安心して。それにあの子だって、人前で襲ってくるようなマネはしないはずよ)

(ならいいんだけど……)

と、その時、暁美が教室に入ってきた。

(げっ。噂をすれば影)

暁美は自分の席につくと鹿目——いや、鹿目の胸に抱かれている白い生き物を睨んでいた。

なんだ？ ああ、凄まじい睨み付け方は！

(気にすんな、まどか。あいつがちよっかい出してきたらあたしがブツ飛ばしてやるからさ。ママさんだってついてるんだし)

(そうよ。美樹さんはともかくとして、私がついてるんだから大丈夫。安心して)

(ともかくって、ゆーな！)

暁美、嫌われてるな。何をしたらあんなに排他されるんだろ。

元から女子って、自分のグループにそぐわない人は徹底的に嫌う傾向があるよな。いじめとかも男子よりも陰険で陰湿だって聞くし。

……いじめられてるのかな、暁美。

*

昼休み。

僕は屋上に続く階段の踊り場で、購買部で買ったやきそばパンを食べていた。

今はテレパシーは聞こえない。まあ、休み時間だし堂々と話せるからな。

と、上から誰かが降りてくる。

屋上で昼ごはんを食べる生徒もいるが、今日は早々にこの踊り場に来ていた。屋上に行くならば必ずここを通らなければならない。

だが僕は、その降りてくる人物を見て、そんな疑問はどこかへ行ってしまった。

「暁美……」

一瞬、僕のほうを見たがすぐに視線をそらして階段を降りてくる。そのまま僕の隣を通り過ぎて、下へと降りていった。

「あ、あの」

口に出してから、僕は自分の行いを恨む。どうして今、声をかけたのだ。僕は部外者なんだから、関わる資格なんてないのに。

無視して降りていってくれ、と念じたが暁美は立ち止まり、僕のほうを見た。

冷たい瞳だった。全てを見透かされそうな気がする。どんな経験を積みば、あんな目になるのだろうか。

「昼ごはん、まだだったら一緒に食べない？ あ、嫌だったらいいんだよ。ムリにとは言わないし……」

ただ、彼女が一人でいる姿が、とても寂しげで。

僕みたいな何のとりえもない奴に、できることなんか何もないのも分かってるけど。

おこがましい考えだけど。

「遠慮するわ」

一言。

拒絶。

僕如きが干渉できる筈がない、何か。

「あ、うん。ゴメン……呼び止めちゃって」

「姫宮リン」

「え？」

「あなたは、何者？」

質問の意図が分からない。

何者も何も……僕は僕だ。

「まあ、いいわ。でもこれだけは覚えておいて」

黒髪を手で払い、僕を睨む。あの底冷えする黒い瞳が僕を射抜いた。

「邪魔をするなら容赦はしない」

そういい残して暁美は踵を返して去っていった。

僕は、どうしていいのかも分からずにバカみたいに立ち尽くしていた。

＊

その日の夕刻。

僕は街外れの廃墟にいた。昼、暁美に言われた事がずっと後を引きずっている。

——あなたは、何者？

まさか、気付かれたのだろうか。でも知ってるのは保健室の先生と担任、後は病院の先生くらいだ。

それ以外で僕の秘密を知ってる人なんかいないはず。

「あーもう……なんなんだよ」

確かに顔はアレだけど……かつての名残はないと思ってる。
制服を着ていれば気付かれるわけがない。
現に気付いた人なんて一人もない。
自信はある。

「……帰ろ」

帰宅しても退屈なだけだが、こうしてぶらつくよりはマシだ。
攻略中のゲームでもやろう。

「ん？」

廃墟から出てきた僕は、何気なく上を仰いだ。最初は夕日で目がくらんだが、慣れてくると屋上に誰かが立っているのが見えた。
フェンスがないから立ち入り禁止になっていたのに、入り込んだらしい。

どうせ悪ガキがたむろしてるんだろうと思ったがどうにも様子がおかしかった。ずっと屋上の端に立っている。あそこはフェンスがなくて危ないのに。

と、そこで僕の頭に一つの答えが浮かび上がった。

「ウソだろ……!？」

血の気が引いていくのが分かる。

僕は慌てて屋上に向かおうとしたが、遅かった。
その人影は飛び降りてきた。

「……ッ!！」

無駄だと分かって僕も僕は、落ちてくる人を抱きかかえようとして――。

その僕の頭上を何かが飛び越えていった。

黄色に輝く閃光。リボンが幾重にも絡まり、落下してきた人を受け止めた。

「魔女の口付け……やっぱりね」

女性を首筋を見て呟くのは、巴だった。昨日と同じ、奇妙な衣装を着ていた。

すぐに鹿目とバッドを持った美樹が駆け寄ってくる。

「この人は？」

「大丈夫。気を失ってるだけ。行くわよ」

巴に続いて美樹と鹿目が廃墟に入っていく。

「あなたは早くここから、立ち去ったほうが良いわ」

巴が立ち止まって、僕に言う。

「ん？ 誰かと思えばリンじゃん」

今更のように美樹が僕を見た。というか、昨日も会ったのに無視したよね。

「そうだな。なんかヤバそうだし、元から帰るつもりだったし」

昨日の出来事も聞きたいが、やっぱりやめた。親しくない人と話

すのは苦手だし、疲れる。

あれ？　じゃあなんで昼休みの時、僕は暁美を呼び止めたんだ？

「じゃ、また学校で！」

「バイバイ、リンちゃん」

美樹と鹿目は僕に手を振り、廃墟へ入っていた。

「……リンちゃんって何だよ」

あんまり鹿目とは会話しないが、いつの間にかちゃん付けで呼ばれるようになったようだ。

そりゃ女っぽい名前だけどさ。

でもそう呼ばれるのも悪くはないかも。

「姫宮リンちゃん、か」

何を言ってるんだ僕は。

アホらしい事を言っていないで、早く帰ろう。

「あっ」

夕日を背に、暁美がそこにいた。

（今の、聞かれたか……）

顔が熱くなる。

「……………」

暁美は無言で固まってる僕の脇を通り過ぎ、廃墟に向かっていった。声をかけようとしたが気の利いたセリフなんて思い浮かばないし、何よりも彼女の背中が僕を拒絶していた。

気に障るようなことしたかな。

あるとしたら昼休みだろうか。やっぱり、話しかけるべきじゃなかったのかな。

でも暁美が転校したばかりなのに、一人だった。鹿目たちも悪い奴らじゃない。ソレなのに仲が悪そうだった。

良く考えたらおせっかいだよな。こんなの。

僕は余計な事をしないで、黙って生きていればいいんだ。流されるままに、決められたほうへ、身をゆだねて。

彼女たちは彼女たちで。僕は僕で。

それでいいじゃないか。

生きてる

結局、僕は鹿目たちとは関わらない道を選択した。他人の目からすれば多分、僕は被害者という奴になる。

だけど別にどうでも良かった。ヤバイ目に遭うのは慣れてるし、こうして生きてるのだから問題ない。

すっかり夕暮れになってしまい、オレンジ色の光が窓から差し込む待合室で、僕はぼんやりと座っていた。

月に一回の定期健診が終わったのだが、家に帰る気が起こらない。だからと言っていつまでもこんな所に居座っていては迷惑だ。

僕は重い腰を持ち上げて帰ることにした。

病院の駐輪場の入り口で、僕は血相を変えて飛び出してきた鹿目とすれ違う。

「？」

声をかけようと思ったがやめた。すごい急いでたし、焦っているように見えた。

自分の自転車のカギを外して跨ろうとした僕の視界の端に何か映った。

「あ」

目を向けると、美樹とあの白い生き物がいた。彼女と一匹の前には黒い、変な形をしたダーツのようなものが壁面に刺さっている。その刺さっている黒いからは、どす黒いシミのようなものが滲み出ていた。

僕は本能的に危険を察してここから去ろうとしたが――

脳裏をセピア色の映像が再生される。ノイズや砂嵐が混じり、良く見えない。

巴……助け……死……

頭を食われて、鮮血に染まる一人の少女。

「っ!!」

分かる。

今日、ここで巴が死ぬ。

そして、僕が自転車を乗り捨てた瞬間、世界は歪んだ。

＊

やはり、以前と同じだった。景色こそ違えどあの時、僕が体験した得体の知れない世界だ。

薬のビンや手術器具、病院の廊下を思わせるずらりと並んだ扉、生き物の臓器を髣髴とさせる色をした風景。

様々なお菓子やケーキが浮かび、小さい生物がちよこまかと走り回っている。

「はぐれたか……」

僕は辺りを見渡すが、美樹や白い生き物は見当たらない。どこか遠くに飛ばされたのだろうか。

とりあえず爆竹をいつでも投げられるように、指の間に挟んでおく。

遠方から心臓の鼓動のような音が聞こえる。生き物が生れ落ちようとしている――そんな雰囲気だ。

ひとまず僕はその心臓の音のほうへと向かう事にした。この前は逃げ回っていただけだが、今回はそうも行かない。

どのくらい歩いただろうか。手持ちの爆竹は随分、減ってしまった。

そろそろ脱出も考えるべきか。

いや、巴と合流するまでは……。

「ん？」

黄色いリボンのようなものに何かが絡まっていた。新手の敵かと思っ
て僕は爆竹を構えたが違った。

人だ。

それも、暁美ほむらだった。

「……何してんの」

僕は尋ねる。

しかし暁美は答えない。

「あのさ、一つ聞きたいんだけど」

「……………」

「巴、ここに来たか？」

返事はない。だけど暁美を拘束しているリボンのようなものを見て、気付いた。

そういえば飛び降りてきた人をこんな感じの奴で受け止めてたよなあ。

「……切ろうか？」

さすがにこんなヤバイ場所で放置するのも、どうかと思う。
僕は折りたたみ式のナイフを取り出す。

「結構よ」

「でも、そんなんじゃないだろっ」

「……………」

また無言。

嫌われてんだな、僕。ここまで無視されるとキツイ。

「無視するなら僕も勝手にやるぞ」

ナイフでリボンを切ろうとしたが、逆に刃が欠けてしまった。

「なんだこれ!？」

力づくで切断しようと奮闘するがとうとう折れてしまう。

ここで手間取っては、間に合わなくなる。

「爆竹で吹っ飛ばせそうにもないな……今の持ち合わせの道具じゃ、ダメか……………」

僕は逡巡するが、巴を優先する事にした。

「ゴメン、後でまた来るから!」

後ろめたさを痛感しながらも、暁美に背を向けて最奥へと向かう。

＊

「ティロ・ファイナーレ!!」

最奥の広間に巴の声が響き渡る。

今、僕の目の前で巨大な大砲のようなものから閃光が迸り、空
中に吊り上げられた小さい人形を打ち抜いた。

「やったあ!!」

それを物陰で見守っていた美樹が歓声を上げる。

だが。

僕の脳裏を新たな映像が流れる。

そして。

人形が大きく撓み、口から自身の何十倍はあろうかと思われる細
長い分身を吐き出した。

巨大な口を一杯に開いて巴の頭に迫る。

突然の出来事に、巴も鹿目も美樹も動けなかった。

だけど——!!

僕は——!!

[illegible]

映像が重なる。

帽子を被った鎧姿の男と同じように。

*

気がつけば、僕は巴に覆い被さるようになっていた。頭が痛い。生暖かい液体がぼたぼたと流れてくる。

「大丈夫、
ですか」

巴の顔は驚愕と恐怖に歪み、僕の返り血を浴びていた。それでも巴は何とか頷く。

「逃げます。しっかり、つかまってください」

僕は巴の身体を抱きかかえてその場から飛び退った。一瞬、遅れてさっきの分身が僕と巴のいた空間を噛み砕く。

すかさず爆竹を片手で投げつけ、音と閃光に紛れつつまどかたちが隠れている場所に着地した。

「血が……」

顔面蒼白のまどかが、僕を見て更に青ざめた。

どうやら巴を助けた時に、あの怪物の牙で引っかかれたらしい。制服の袖が破けて細長い傷跡から大量の血が流れる。後は背中や頭にも痛みがある。

「これくらい平気だよ」

彼女たちと関わらないと決め込んでいたのに、首を突っ込んだ報いだ。だからなのか、僕の心は異常なほどに落ち着いていた。今の僕なら彼女たちを逃がすくらいの時間は稼げる。

「早くここから逃げろ。僕があいつをひきつける」

両手に爆竹を挟み、怒りに染まるファンシー顔の怪物と対峙した。

「な、何を言ってるの！ あんたも逃げないと！」

「この怪我じゃ、もう走れないよ。足手まといになるだけだ」

何でだろう。

つい、数十分前は自分の事だけを考えていたのに。

巴が死ぬイメージが頭に流れてから、僕の中の何かが変わったんだ。

何が何でも鹿目たちを守りたいって、想っていたんだ。

「じゃあね」

僕は爆竹を構え、怪物に特攻をかけて――。

「その必要は無いわ」

黒髪が舞う。

「暁美!？」

僕の前の前に暁美が背を向けて立っていた。いつの間に、ここに来たんだ? どうやってあの拘束を破った?

怪物が暁美を飲み込もうと大口を開いて襲い掛かった。

「危な——」

刹那、暁美は空に移動していた。

怪物は空気を噛むだけで、かすりもしていない。

超スピードで避けた?

それとも催眠術による瞬間虚脱?

違う。根拠はないけど多分、あれは高速移動でも催眠術でも、錯覚でもない。

じゃあなんなのかと聞かれても、僕には分からない。だけど一つ理解できる。

今、僕は恐るべき何かの片鱗を目撃すると。

暁美は怪物の攻撃をかわし続けた。ありえない速度で。ありえない位置へ。ありえない方向へ。

そして攻撃が空振りするたびに、怪物の口腔内で爆発が起こる。

一方的な爆撃がしばらく続いた後、一際、大きな爆発が連続で発生し、怪物の身体が木っ端微塵に吹き飛ぶ。

同時にこの不気味な世界も崩壊して僕たちは元の、夕焼けに染まる駐輪場へと戻された。

「生きてる……」

今更になってドツと溢れてきた、恐怖。

生きてる。僕は、生きている。みんなここにいる。

「よかつ、た……」

視界がブラックアウト。僕の意識は沈んでいった。

登場人物紹介

姫宮リン 14歳

見滝原中学の2年生。まどかとは同じクラス。

傍観者として生きている自分に悩み、変わろうとしていた。

ケンカ殺法や非合法格闘技などの技巧を主体とした戦術が得意。
見た目が女っぽい。一応、男。

何故か今は存在しない転生者たちの姿や声を聞くことができる。

稲尾ジン 享年？歳 ？宇宙の真理に反逆せし戦士？

かつての転生者。歴代最強を誇るも、過ちに気付けなかった。
夜を越えた後、呪いにて死亡する。

ホーナー・フォルスター 31歳 ？光すら穿つ魔弾の射手？

転生者。巴ミと同様のマスケット銃を扱う。吸血鬼の能力を持ち、
コウモリを操る。

巴けんと同様に射撃術と体術が得意。創造主である巴けんを誰よりも敬愛している。

安否不明。

バース・ヴァンガード 享年20歳 ？天上天下唯我独尊の騎士王？

転生者。佐倉杏子と同様の槍を扱う。槍術の達人。

魔人カタストロフの月との戦いで死亡。

創造主たる佐倉純也とは正反対の性格をしているが、原因は純也自身が心の中でバースのような人柄になりたいと望んでいたからである。

長嶋平八郎 55歳 ? 死臭漂う戦場の処刑人?

転生者。暁美ほむらと同様の盾を扱う。戦争のプロで伝説の傭兵。
安否不明。

金田美鶴 享年19歳 ? 虚空翔ける蒼き流星?

転生者。美樹さやかと同様の剣を扱う。戦闘能力は未知数。生粋のオタク。

魔人カタストロフの月との戦いで死亡。

鹿目剣 享年109歳 ? 天元へと達せし若き守護神?

かつての創造主。最終決戦ではジンと共鳴し、共に戦う。
90年間の修行を積み、ジンとの約束を守るべく後継者を担った。
最終的に己の過ちに気付き、すべてをやり直すために過去へタイム
ワープする。過去のジンを殺し、自身も存在意義を失って消滅した。

巴けん 15歳 ? 黄昏にたゆたう夢の銃士?

ホーナー・フォルスターの創造主。ある資産家の息子。
マミの紅茶が飲みたいらしい。

両親は第一級の犯罪者だが、その汚い金で自分が裕福に暮らせてるという葛藤に悩んでいる。結局、どうでもいいと結論付けて無理やり納得した。

射撃術と体術に優れている。
安否不明。

佐倉純也 享年48歳 ? 天地空貫く撃砕の征服者?

バース・ヴァンガードの創造主。ある槍術の免許皆伝を持つ。

少年時代はアニメが大好きな少年だったが、大人になって子供心を忘れてしまい、日々の生活に虚しさを覚えていた。それを誤魔化すために槍術を学び、達人級にまでのし上がった。

バースと出会ったことで幼き日の自分を思い出し、転生を決意する。普段は非常に理知的で冷静な性格だが、好きなものを語るときは熱狂的になる。

暁美ダイゴロウ ? 歳 ? 無限無尽の黒き戦人?

長嶋平八郎の創造主。ある学会でも有名な科学者。
タイムマシンの理論を研究し、ついでにミリタリーにも精通。

美樹ゆたか 享年？歳 ？約束されし勝利へと驀進せし彗星？

金田美鶴の創造主。オタクで剣道部の主将。
美樹さやかに一目ぼれしたようだ。

リバース・クルセイダー ？歳 ？再誕の転生者？

ああ、よく女っぽいと言われるけど男だよ

目が覚める。視界に入るのは見慣れた天井ではなく、誰かの顔だった。

まだ焦点が合わないので二三度、目をしばたかせた。

「ここは……」

「目が覚めたのね」

頭が少し痛い。思考が上手く働かず、身体を動かすのも億劫に感じる。

「……僕は、確か……」

巴を助けようとして、怪我をして……。

「そ、そうだ！　巴はっ！？　大丈夫なのか！？」

僕は勢い良く起き上がったが全身に激痛が走り、呻く。

「その程度の怪我で済んだことに感謝しなさい。生身で魔女の攻撃を受けるなんて、無謀よ」

そこでようやく僕はベッドに寝かされていて、傍に暁美がいるのに気づいた。

付き添ってくれたのだろうか。

「魔女って、あの怪物の事？」

「何も知らずに首を突っ込んだのね」

暁美は心底、呆れたようにため息をつく。

「向こうの部屋でまどかたちがあなたを待ってる。これ以上、まどかに心配かけたくないから早く行ってあげて」

「分かった」

だが怪我のせいなのか、足元がおぼつかない。すると暁美が肩を貸してくれた。

「ありがとう」

「……」

この無言にもそろそろ慣れたな。

扉を開けるとテーブルの前にまどかとさやかが座っていた。二人とも表情は暗く、いつも学校で見せていた笑顔はどこにもなかった。でも僕が部屋に入ってきたのを見た途端、少しだけ明るさが戻ったような気がした。

「良かった……本当に良かった……」

鹿目は涙を浮かべている。

そんな僕のことを心配してくれたのか……。話したことなんて、数えるくらいしかない関係だったのに。

「ゴメン、心配かけたな。でも大丈夫だよ。僕はちゃんと生きてるから」

安心させる為にドン、と胸を叩いたが強すぎてむせてしまう。そんな僕を見て鹿目と美樹は笑った。

「ゲホゲホ……笑い事じゃないって」

「あはは、ゴメンゴメン。リンって意外と面白いじゃん」

「どういう意味だよ。美樹……」

「さやかで良いよ。苗字だと、他人行儀みたいだから」

「私もまどかって呼んでよ」

「ん。じゃ、これからは名前で呼ぶけど……」

僕はジッと暁美を見つめる。

「何かしら？」

「いや、その」

「……ほむらよ」

「え？」

「名前で呼びたいのなら、そうすればいい」

僕はほむらに気付かれないようにガッツポーズを取った。あとは巴だけだけど、どこにいるんだ？

「巴は？」

「……マミさんは……」

明るくなりかけていたまどかの面持ちが再び影を帯びた。

「私が説明する」

ほむらがサッと黒髪を払い、口を開く。

「巴マミは戦いのショックで戦線から外れる事になった。今は自室に籠もっていて、出てこないわ」

「……そうか」

死を目前にして、平然としていられるわけがない。僕のような人間ではない限り。

「大丈夫なのか？」

「ええ。精神こそ病んでるけど、身体は平気。あなたが守ってくれたから」

今はムリでも、巴とも名前で呼べるようになりたいな。早く元気になってほしい。

「お取り込み中のようにだけど、いいかい？」

まどかの傍で座っていた白い生き物が、僕に話しかけてきた。

「お前はあの時の……」

「やっぱり君は視えるんだね。僕のことか」

「どういうことだ？」

「魔女や僕を見ることがするのは魔法少女としての素質を持つ、第二次性長期の少女だけの筈なんだ。姫宮リン、君は男だろう？」

「ああ、よく女っぽいと言われるけど男だよ」

そう、僕は男だ。

「ならば君にも説明しないとね。この世界の裏側を」

その白い生き物は無表情で僕を見つめた。

*

白い生き物——キュウベえと名乗る宇宙生命体の話を聞き終えた僕は、あまりに突飛な内容に苦笑したが、実際に目で見て、耳で聞いて、肌で感じたのだ。

僕は魔法少女と魔女が繰り広げる戦いを知った。

巴とほむらは魔法少女で、まどかとさやかは魔法少女になる素質があるらしい。

そして普通は素質のないものや男性にはキュウベえや魔女の姿を視ることはできないという。だからキュウベえは僕に関心を持ったようだ。

「君も僕と契約して魔法少女にならないかい？」

代わりにどんな願いも一つだけ、叶う。

僕は少し悩んで、首を横に振った。叶えたい願いがないといえはウソになる。でもあんなヤバイ奴らと戦^やり合う自身はない。

僕が断るとキュウベえもあっさりと諦めた。強引に契約するのは禁止なんだとか。

「まあ、でもこれからは僕も付き合うよ。一応、心得はあるから」

怪我の治りも早かったので、今日はまどかたちと別れて僕は巴のマンションを後にした。

「……なんだよ」

帰路の途中、人通りの少ない路地裏で僕は足を止めた。背後にはキュウベえがいつの間にか座っていた。

「人前では話し辛いと思ってね。姫宮リン、君が僕や魔女を視れる

のは素質がある証拠だよ」

「僕は男だって言った」

「それは今の話じゃないか」

「……どこまで知ってるんだ」

僕は振り返る。ポケットに忍ばせているナイフを掴み、キュウベえとの距離を把握した。

「全部、さ」

「そうか」

一步、キュウベえに近付く。間合いまであと、三步か。

「知ってるならそれ以上、何も言うな。まどかたちにも言うな。言ったら……」

「やれやれ。そうやってすぐに感情的になるのは人間の悪いクセだね」

「フン。お前みたいに胡散臭い奴に言われたくはないよ」

キュウベえは僕に背を向けた。

「契約する気になったらいつでも呼んでね」

「さっさと失せろ」

奴が夜の闇に消えていくのを見届けてから、僕は緊張を解いた。息を吐き出し、壁に背を預けた。

「……………」

眠る、過去の記憶。

小さかった僕を襲った、病気。

病名は子宮ガン、と言った。

いつも心は一緒に

その日、僕は医者から宣告された。

X線で撮られた写真には、途方もない大きな黒い影があった。

すでに子宮、卵巣を侵されて手の施しようがない。余命は持って半年。早ければ三ヶ月ちよつとだという。

僕の両親は泣き崩れ、助けてくれと医者に土下座までして懇願していた。

肝心の僕はぼんやりと写真を見つめていた。最近、不正出血がひどくて病院で検査してもらったのだが、

まさかこんなことになるなんて。

ああ、僕は死ぬのか。何だろう。実感がわからないのか、心は風いでいた。恐怖も焦燥もない。

ただ漠然と死というものが僕の先に広がっていた。

その日の内に、僕は入院させられた。入院と聞いて親戚やら知り合いやらがこぞって見舞いに来た。

一人にして欲しかったが、みんな僕を心配して来てくれるので無下にはできない。

入院してから数日、クラスメイトたちがマンガやゲームとかを差し入れてきた。退屈はしなかった。

さらに数日後、一人の女子生徒が僕のところに来た。昔から親しかった人だ。僕を好きだといった。返事はできなかった。

学校に行かなくなってどれくらいだったのか、分からない。抗癌剤のせいで何回も吐いた。

痛い。悪心がずっと続くから食欲もない。体重が減った。

見舞いの人もめっきり来なくなつた。だけど女子生徒だけは来てくれた。

夏の日差しが差し込んでいた窓から見える景色は、雪化粧を施した町並み。僕はもう帰れないのかもしれない。

苦しい。寝ることもできない。点滴のおかげで栄養は送られている。

今が朝なのか夜なのか。

僕は何なんだろう。どうして、ここにいるんだろう。

そばに誰かがいるような気もしたけど、何も感じない。

声が聞こえた。

助かる方法はひとつだ。子宮と卵巣を取り除くしかない。

もう女ではなくなる。だが必ず助けてみせる。

手術は失敗した。主治医が青ざめる。看護師が必死で心臓マッサージを繰り返す。

大丈夫。あなたは死なない。私があなたを助ける。
だから幸せになって――。

次の瞬間、僕は目覚めた。朝日がいっぱい差し込む、病室。

ふと、ベッドのふちに丁寧に折りたたまれた紙が置いてあった。

僕はそれを開き、全てを理解した。

時間が止まる。音が聞こえなくなる。目の奥が熱い。

どうしようもない後悔が心の底からあふれる。

いつも心は一緒に

その短い文章には、彼女の想いがこめられていた。

彼女が僕を助けてくれたのだ。

どうして返事ができなかったんだ。

どうして好きと言えなかった。

どうして気づけなかった。

僕もまた、彼女が好きだったのだ。それに気づかないフリをしていただけ。気づくのが怖かっただけ。

悔やんでも悔やみきれなかった。

決して許されはしない。償うことの出形ない罪。それを一生、背負っていくことがせめてもの償い。

だから僕は生きる。生きることが贖罪になる。

生きて生きて、彼女に贍されるべきだった幸せの分だけ生き抜いてみせる。

僕は目を覚ました。汗をかいたのか、寝巻きがしっとりしていた。今でも彼女のことは覚えている。手紙も持っている。

けど、最近おかしい。

知らないはずの記憶が紛れ込む。帽子を目深にかぶった、鎧姿の男だ。

その男と転校生、曉美ほむらが一緒にいる。男が何かを言って――ここでノイズが入る。記憶が途切れる。

それ以上、思い出そうとしてもノイズが邪魔をする。払っても払っても、先に進めない。

だが僕は読唇術が使えた。ノイズも少しずつではあるが薄れてきているように思えた。

男はほむらに向けるでもなく、ただ虚空へと呟く。

「ゴメンな」

とにかく、がんばろう

僕は生き残り、彼女は死んだ。

それが僕の過去のすべて。どうやってあいつが僕の過去を知ったのかは、知らないが契約の引き合いに出すのならば少し黙ってもらう必要がある。

「姫宮リンというのも偽名だろう？」

月明かりのみが照らす一室、窓際で青白い光を一身に浴びるキュウベえが、僕を横目で見た。

「本当の名前は、姫路鈴鹿」

「捨てた名前だ。そんな名前はどこにも存在しない」

「……まあ、僕も今の名前で呼ばせてもらおうよ」

「用件はそれだけか」

「契約したくなったらいつでも」

そう言い捨ててキュウベえは闇に消えた。

僕は息を吐き出して壁にもたれかかった。この先、どうなるのかは予想が付かない。関係の無いことに首を突っ込んだのだから、当然といえるが。

だからといって中途半端に投げ出すのは大嫌いだし、何よりも誰かのピンチを放つとけるわけが無いだろ。要らぬおせっかいだろうが性分なのだ、悪く思うな。

「とにかく、がんばろう」

今の自分ができる精一杯を成すだけだ。きっと道は拓ける。

＊

朝。快晴。

だが寝付けず、軽く寝不足気味の僕にすれば鬱陶しいことこの上ない。

……元から朝は嫌いだから関係ないか。

ダラダラと着替えてメシを食い、歯を磨いて洗顔してバッグに教科書突っ込んで外に出た。

5月特有の暖かい日差しが街中に満ちている。早速、襲ってくる眠気を追い払うように寝ぼけ眼を擦りながら大あくびをした。

その時、僕の家 of 玄関の前を誰かが通り過ぎた。いや、人が通るのは当然だ。この道は大通りに通じてるからこの時間帯は人通りが多い。

そんなのは、よく分かっていた。

大事なのは違う部分だ。今、通った人はチラリと見たただけだが、帽子を目深に被った鎧姿の男だった。

見間違いないじゃない。あんな目立つ格好。

僕はハッとして飛び出したが男はどこにもいなかった。僕の突然の行動に驚いた数名のサラリーマンや学生が奇異の視線を向けてきたが、ガン飛ばして追い払った。

「……何者だ、あいつは」

そしてこの胸の底からこみ上げる感情は一体……。

＊

学校。教室。

いつものように机に突っ伏し、適当に時間を潰す。

あー、今日もダリイ……メンドクセエとひたすらに心中で反芻し、惰眠を貪った。

空腹感で目を覚ました時は昼休みだった。大欠伸をしながら席を立ち、購買部で売れ残った弁当を買う。

どこで食べようかと、あちこち歩いてるうちに自然と足は屋上へと向かっていた。

そっと両開きの扉を開けると予想通り、あの二人がいた。声をかけようかと思ったが浮かない表情をしている。

キュウベえも混じって何事かを話していた。風向きの関係か、こちらには声は届かない。僕は気付かれないように近付いて耳そばを立てた。

「長らくここはマミのテリトリーだったけど、空席になれば他の魔法少女が黙ってないよ。すぐにも他の子が魔女狩りのためにやってくる」

どういうことだ。巴の身に何かあったのか。

待てよ。確か、精神的なショックで戦線から離脱したとか言ってたよな。まさかまだ立ち直れてないのか？

「でもそれってグリーンフィールドだけが目当てな奴なんですよ？」

「確かにマミみたいなタイプは珍しい。普通はちゃんと損得を考えるよ。誰だって報酬は欲しいさ」

正論だ。この世界に無報酬で危険に挑む人間はごくわずかに限られている。しかもそんな無謀なマネをしても得られるものは少なく、人はバカだと嘲るかお世辞で祭り上げるかのどちらかだ。そして当人も結局は名声や地位が欲しくて……。

「でも、それを非難できるとしたらそれは同じ魔法少女としての運

命を背負った子だけじゃないかな」

またしても正論。だけど癪に障る。文句のひとつもつけてやりた
いが、僕に資格はない。

これ以上、ここにも苛立つだけなので僕は再びスニーキング
で屋上から立ち去った。

＊

夕暮れ。

今日は妙に調子が悪くてゲーセンで景品を落とせず、腐る。

ネカフェにでも行って気晴らしをするか。

雑踏。雑音。人々が行き交い、活力に満ちた街。ネオンが煌いて
輝ける時間。

だが僕は見てしまった。感じてしまった。

暖かい光に潜む、冷たい闇。5月の下旬だというのに這い上がっ
てくる寒気。雑踏が消える。雑音が僕の心臓の鼓動で聞こえなくな
る。無数に往来する人々の隙間、普通なら見落とすはずの姿を僕は
認めた。

鹿目と奇妙な歩き方をする志筑。僕は血の気が引くのをはつきり
と覚えた。

原因は分らない。なのにとえようのない不安や恐怖に駆られ
る。落ち着け、僕。志筑はふざけて歩いてるだけだ。親友同士なら
色々可他愛もないことをよくするじゃないか。

そうだ。そうに決まっている。

じゃあ、なんで鹿目は泣きそうな顔をしてる。なんで必死に携帯
電話をかけようとしてる。なんで志筑を引き止めようとしてる。

「クソツタレ!!」

僕は人混みをかきわけ、二人を見失わないように走り出した。

＊

たどり着いた場所は寂れた工業地帯だった。再開発のしわ寄せでも食らったのだろう。廃工場がいくつも乱立している。

「さすがにヤベェんじゃねえのか、これ」

老若男女問わないが志筑と同じように据わった目、ゾンビを髣髴させる緩慢な動き。そんな人々があちこちからやってきて、ある廃工場を目指していた。既にその数は20人前後にまで膨れ上がっている。

鹿目と志筑も人波に隠れて見失う。最悪だ。

「爆竹はあと10個、サバイバルナイフが一本……護身はできそうだ」

集まってきた人々は廃工場の中へ次々と入り、僕も入るべきかと悩んでいるとシャッターが下りてしまった。

「まずい！」

蹴りと拳を叩き込むがシャッターは波打っただけで、破れない。別の入り口を探さなくては。

鹿目も志筑もあの中にいるはずだ。急がないと。

「あそこなら！」

僕は窓めがけて突進する。顔を腕で守りながら渾身の力で体当た

りをぶちかました。

窓ガラスが破碎し、僕は空中で一回転して背から落ちた。受身を取って素早く起き上がり、爆竹を指の間に挟む。

人数は外で確認したとおり、20弱。ごり押しでどうにかなる。

つか、何だ？ この刺激臭は。

臭いの元を探して見渡すとすぐにそれは見つかった。青いポリバケツ。それに二種類の液体洗剤を注いで――。

「うおおい!?」

僕は背筋に悪寒を覚えながらも疾駆し、洗剤を持つ女を蹴り飛ばし、さらにポリバケツを男からひったくって顔面に頭突きをかまして昏倒させた。

「そおい!」

カチ割った窓ガラスめがけてポリバケツをブン投げる。

目が据わった時点でやばいとは思ったがまさか集団自殺するつもりだったとは。しかし原因が分からなかった。

自殺サイトで呼びかけたと思うのが妥当だろうが、納得がいかない。それに志筑の奇行も気になる。

「ん?」

刹那、異常なまでの殺気を察して僕は振り返る。

工場内の人間が全員、虚ろな瞳で僕を睨んでいた。

「チッ……めんどくせえ」

殴り倒したはずの男と女も痛手がないのか、平然と立っていた。

「来いよ、一人残らずぶっ潰して……!？」

僕はサバイバルナイフを抜きかけ、やめた。志築と鹿目の姿を認めたからだ。

ただし鹿目は腹パンでも食らったかのような体勢で、拘束されていたが。

「ホント、めんどくせえ……」

ギリッと奥歯をかみ締め、指に挟んだ全ての爆竹を思いっきり地面に叩きつけた。

閃光、遅れて耳を劈く音。同時に僕は鹿目の元へ走り、ふらつく志筑から鹿目を奪還する。

さっさとこんな所からオサラバしたいがカチ割った窓は危ない。僕は慣れてるからいいが、鹿目がガラス片でケガをしてしまうかもしれない。

今から別の脱出口を探している時間も無い。やむを得ず、木製のドアを開けて小部屋に逃げ込んだ。施錠はしたが長くは持たないだろうな。

閃光のショックから復帰した奴らがドアに殺到し、ものすごい勢いで殴ってきてるし。錆びついた蝶番は今にも弾け飛びそうだ。

「なんだこの部屋は。出口がねえのかよ」

周囲は金網で囲われ、窓も何も無い密室だった。

と、唐突に部屋がゆがむ。僕は心底からゾツとした。

「まさか、このタイミングで来るのか!？」

金網の上を得体の知れない物体が這いずる。不気味な、意味を成さない言葉がぐるぐると僕たちの取り囲み、どす黒い瘴気が吹き荒れた。

「や、やだ……こんな……」

鹿目が泣きそうな声で、いやもう泣いているのかもしれない。金網を這うモノから逃れようと反対側の壁にへばり

つくが……。

「そこから離れろ!!」

僕は鹿目を引き寄せようとしたが間に合わない。背後から現れた人形のようなモノに手足をつかまれ、闇の中へ引きずり込まれていく。僕は舌打ちし、鹿目の手を握るが踏ん張れずに魔女の結界へと取り込まれた。

＊

冷静に考えれば合点がいく。あの狂わされた人々は魔女の仕業だ。ああしてエサを集め、喰らうのか。もしくは仲間にするのか。

僕はサバイバルナイフを構え、テレビを持った人形の群れと対峙する。周囲を走るはメリーゴーランドの馬らしきモノ。人形が持つテレビには、帽子を被った鎧姿の男、オールバックの男、紅い甲冑の男、軍人風の男、太った男が醜悪な外見の怪物と戦っている模様が映し出されていた。

「リンちゃん!」

鹿目の声で僕はテレビから目を離した。人形が数匹、こちらに飛んでくる。

「はあっ！」

人形の突進をかわしつつ、手近の一体の胴にサバイバルナイフを突き刺す。同時に真横に薙いで切り裂いた。

「どうだ!？」

手ごたえはあった。しかし人形はたいした痛手も見せず、悠々と浮かんでいる。そして――。

「な、何!？」

サバイバルナイフが半ばから折れた。手持ちの武器は尽きている。もう身を守る術は、ない。

「っざけんな……」

諦めるな。弱気になる暇があるなら考えろ。僕一人じゃないんだ。僕の後ろには鹿目がいる。

何が何でも死守するんだ。僕が諦めたら鹿目はどうなる？
せめて彼女だけでも逃がさないと。

「開くんだ……活路を……」

考えろ。どうすればいい。どうすれば助けられる。今の僕に何ができる。

考えろ。記憶を掘り起こせ。知恵を振り絞れ。
考えろ。自分にできる、最大限のことを。

——契約。

僕は女じゃなくなったけど、素質は残ってる。あいつと契約すればこの死地を脱せるのではないか。

癪に障るやつだが四の五の言ってる猶予はない。今ここであいつを呼んで契約すれば。

「キュウ——」

べえとまでは語句が継げなかった。

蒼き閃光が瞬き、人形の群れを貫く。テレビが破壊され、僕の攻撃では傷ひとつつかなかった人形が砕け散る。その光は結界内を縦横無尽に疾走し、次々に人形を打ち倒していった。

あらかたの人形を倒し終えたその光は中空で停止した。燐光のようなものを纏う彼女を見た鹿目は、目を見張る。

「さやかちゃん!？」

「な、なんだと!？」

僕もその光を見ようとしたが、再び高速で動き出したので美樹かどうかは分からなかった。

残存する人形たちも一方的に蒼い光に切り裂かれていく。

「——これでトドメだあつ!！」

ひととき大きなテレビめがけて蒼い光が突き刺さった。テレビは凄まじい速度で落下し、地面に叩きつけられて粉々になる。

あれが魔女の本体だったのだろう。結界はたゆたうように崩れ、音もなく消滅した。

＊

見滝原の夜景が見下ろせる鉄塔の上に誰かが腰掛けていた。

「まさか君が来るとはね」

「マミの奴が戦線離脱したってきいたからさあ、わざわざ出向いてやったっていうのに」

不機嫌そうにクレープを齧り、声を荒げた。

「ちょっと話が違うんじゃない？」

「悪いけどこの土地には、もう新しい魔法少女がいるんだ。ついさつき契約したばかりだけどね」

「何ソレ。超ムカつく」

不快感を隠すこともなく露にし、にべもなく言い捨てた。

「でもさあ、こんな絶好の縄張り——みすみすルーキーのヒヨっ子にくれてやるってのも癪だよねえ」

「どうするつもりだい？」

「決まってんじゃん」

凶悪な笑みを浮かべ、キュウベえを見やる。

「要するにぶっ潰しちゃえばいいんでしょ？」

クレープを噛み千切り、白い歯を覗かせて。

「その子」

諦めるというんだ

翌日。

僕はいつものように机に突っ伏していると、鹿目たちの会話が聞こえてきた。

いや、別に聞き耳を立ててるわけじゃあないぞ。

「どうしたのよ仁美。寝不足？」

「ええ、昨夜は病院やら警察やらで夜遅くまで」

「何かあったの？」

昨夜。

魔女の口付け——巴がそう呼んでいた——によって大勢の人間があの廃工場に集められた。

鹿目と僕は魔法少女になった美樹のおかげで窮地を脱し、結果的に多くの人を救うことが出来た。

「なんだか私、夢遊病っていうのか……それも同じような方も大勢いて……気づいたらみんな同じ場所に倒れてたんですの」

「ハハ、何それ？」

さやかが笑っている。まあ、本当のことなんか言えるわけ無いよな。

「お医者様は集団幻覚だとか何とか……今日も放課後に精密検査に行かなくてはなりませんの。はあ……面倒くさいわ……」

「そんなことなら、学校休んじゃえばいいのに」

「ダメですわ。それではまるで本当に病気みたいで、家の者がますます心配してしまいますもの」

集団幻覚、か。それが今の科学で弾き出せる精一杯の解だろう。知っているのは一握りの、少女たち。奇跡と引き換えに命を賭した戦場へ誘われ、生を掴むために戦い続ける。

「さっすが優等生！ 偉いわー」

では敗北したらどうなるのだろうか。否、わか理解ってるはずだ。

魔女に負ければ確実に死ぬ。それだけじゃない。ソウルジェムの穢れを祓うグリーンフシードの奪い合いでやられるかもしれない。

……ひとつ、気になることがある。

もしもの話だ。

もし、ソウルジェムの穢れを祓えなかったら、どうなる？ 限界まで穢れを湛え、少しの余裕もなくなったら？

魔法が使えなくなる？ 身体に支障をきたすか？ 強制的に戦いから脱落？

いや、そんな生易しいモノじゃない。僕の直感だけど、ものすごく嫌な予感がする。腹の底から不快な何かが込み上がってきた。

そもそも、何で魂ソウルなんて単語が入るのか。直訳すれば？ 魂の宝石？。

魂……契約……まさか……な。

すべて憶測の域を出ない。確信の無い理論で判断するのは早計だ。分かってる。落ち着いて、冷静になるんだ。

でも、何でだろうな。冷や汗が止まらない。

＊

放課後。

僕は一人、図書室で資料を求めている。

魔女や魔法少女、この街に関する伝承や民話、奇妙な事件。どんな些細な情報でも良かった。

いくら知ってる人が少ないとはいえ、あれだけの戦いだ。少くらしい記述が残されていてもおかしくない。

たとえば魔法少女が自らを綴った戦記とか。魔法少女の協力者の記録とか。あるいは、魔女の遺品とか。

僕は深いため息をついて分厚い本をテーブルに投げ出した。

見つからない。あるのは一般の定義での魔女に関する文献ばかり。紐解いても魔法少女や魔女、キュウベえたちのことは一切、載ってなかった。

ここまで来ると隠蔽されてる可能性が出てくる。知られたくない何かがあるのだろうか。

ダメだ。結局、推測だ。確かな答えが掴めない。

どうすればいい。本人に直接、聞いたとしても真実を語るとは思えない。

「クソ……」

何も出来ない僕が腹立たしい。

＊

僕は晴れない気分のまま、ファーストフード店に入る。

適当なセットを注文して席に着く。

と、見ると鹿目と暁美が少し離れた席に座っていた。デート、じゃないよな。表情暗いし空気重そうだし。

「あの子は契約するべきじゃなかった。確かに私のミスよ。貴女だけでなく彼女もキチンと監視しておくべきだった」

あの子？ 美樹か？

契約するべきじゃないって……どういうことだよ。

「でも、責任を認めた上で言わせてもらおうわ。今となつては、どうやっても償いきれないミスなの。死んでしまった人が還ってこないのと同じこと。一度、魔法少女になってしまったら、もう救われる望みなんてない。あの契約はたった一つの希望と引き換えにすべてを諦めるってことだから」

「だからほむらちゃんも諦めちゃってるの？ 自分のことも他の子のことも全部……」

「ええ。罪滅ぼしなんて言い訳はしないわ。私はどんな罪を背負おうと、私の戦いを続けなきゃならない」

僕にどうこう言う権利は無い。

「時間を無駄にさせたわね。ごめんなさい」

だけど、これだけは言っておこう。

僕は席を立とうとした暁美に近づいた。

「リン、ちゃん？」

「……」

「これは独り言だ。だから無視していい」

僕自身にも言い聞かせるために。

「この世界には僕が生涯、理解できないモノがいくつがある。その内の一つが――」

最後まで戦うために。

「諦めるということだ」

いや、終わりじゃない

僕は曉美にそれだけ伝えたと、さっさとファーストフード店を後にした。

どこに行くアテも用事もない。僕にできることは何もないのかもしれない。だけど、このまま諦めるのも癪だ。必ず暴いてやる。奴の目論みと秘密を。

「まずは――」

とにかく情報だ。だが曉美は語らないし、巴は戦線離脱。美樹はルーキー、鹿目はそもそも魔法少女ではない。

ならば別の人を探すのだ。巴や曉美みたいな玄人で、かつ社交性のある人物だ。

だがどうやって見つけ出すが最大の問題だった。結界に巻き込まれれば出会える可能性があるが、命を危険に晒す上に、僕には魔女の結界を探知するようなマネはできない。

2回も魔女と遭遇したのは、ある意味では運が良かったのだろう。

「待てよ……」

美樹と共に行動すれば、魔女の結界を探知できるし、他の魔法少女と逢える確率はグッと高くなる。

利用するみたいで気が引けるが、奴の秘密を暴露させるためだ。目を瞑ってくれ。

＊

……とりあえず僕は鹿目、美樹と一緒に魔女探しに街へ繰り出し

た。

ソウルジェムの反応を頼りに探索して見事に結界を発見した。内部にいたのはほんの使い魔だが、十分だった。

おまけに幸運と言うべきか、他の魔法少女とも出会えたのだが……。

「話し合いの余地はなさそうだな……」

目の前で繰り広げられる剣と槍の応酬。火花が飛び散り、狭い路地裏の中を蒼と紅の閃光が縦横に乱れ飛び、激しくぶつかった。

蒼い光は美樹、紅い光は使い魔を仕留めようとした美樹を妨害した、闘入者。激突の原因は、価値観の相違。

魔女、使い魔は全て倒す正義を掲げる美樹と使い魔は生かし、グリーフシードを孕むまで野放しにする紅い魔法少女。キュウベえは彼女を佐倉杏子とだといった。相当の手練で、かなりの数の魔女を屠ってきてるらしい。

事実、美樹は押されていた。武器の相性的にも剣と槍では分が悪いのも相まって佐倉に翻弄されていた。

それでもなぜ戦えるのか。それは美樹の特性にある。何でも祈りの力があるらしく、元から自己治癒能力が異常に高いらしい。

だからどれほどの大ダメージを受けようとも瞬時に回復し、倒れることはないのだという。

「チャラチャラ踊ってんじゃねえよウスノロ！」

これではジリ貧だ。美樹が戦えるのもあの回復力に助けられているからに過ぎない。

もし回復力がなければ最初の一撃で決まっていた。

「言って聞かせても分からねえ、殴っても分からねえバカとなりや

あ、あとは殺しちゃうしかないよね？」

佐倉の殺気が尋常じゃない。見た目の年齢的には僕らと同じなんだろうが……アレはそこらの不良やヤクザなんて尻尾巻いて逃げるレベルだ。

マジで殺すつもりなのか。あれはヤバい。実戦的に洗練されてる。戦場の戦い方だ。

ただひたすらに戦うことだけに特化している。

「負けない……ッ！ 負ける、もんかあッ！！」

突き出された槍の切っ先に美樹の剣先が叩きつけられる。甲高い金属音を発し、佐倉の突撃を止めた。

そのまま槍を跳ね除けて斬りかかるが、佐倉はいち早く上に翔んで回避した。お返しといわんばかりに上空から槍を構え、振り下ろしてきた。槍は一撃でコンクリートを破碎し、決り取るが美樹はバツクステップで避ける。

「辛うじて互角……でもいつまで耐えられるか分からないぞ……」
「どうして？ ねえ、どうして？ 魔女じゃないのに、どうして味方同士で戦わなきゃならないの？」

鹿目が悲痛な顔つきでかすれそうな声でキュウベえに話しかける。

「どうしようもない。お互い譲る気なんてまるでないよ」

「お願い……キュウベえ、やめさせて！ こんなのもってないよ！」

「僕にはどうしようもない」

「……分かった」

僕は覚悟を決める。あんな激戦の渦中に自ら飛び込むなんて、自

殺行為だろうけど。

不思議と恐怖はない。巴を守った時の、あの想いになった。

何が何でも守る――と。

僕はサバイバルナイフを取り出し、戦況を見やる。

決着はついたようだ。美樹は膝を突き、佐倉が勝ち誇ったように槍を構えている。

「終わりだよ」

「いや、終わりじゃない」

僕はサバイバルナイフを佐倉に向けて投げつけた。もちろん当てるつもりはない。

牽制だ。

「チッ、外野は引っ込んでろ」

美樹から僕にターゲットを変えたようだ。槍でナイフを弾き、こちらに向かってくる。

落ち着け。大丈夫だ。確かに佐倉は強い。でも見えない速度じゃない。今の佐倉は油断してる。ただの一般人の僕相手に本気なわけがない。

そこに付け入れば……僕でも！

「舞空制覇っ！」

突き込まれてきた穂先の側面に掌底を叩き込み、軌道をずらす。すかさずがら空きとなった佐倉に肉薄してボディブローを放った。しかし常人ならまともに食らうはずのタイミングにもかかわらず

佐倉は片手でガードし、後ろに下がる。

「……やるじゃん」

口許をつり上げ、不敵に笑った。

好機を逃したか。油断してる最初のうちに決めたかったが。

「遠慮はいらねえな？ 恨むなら、トーシローのクセに首突っ込んだ自分を恨みなよ」

佐倉は前傾姿勢になる。本気だ。本気で殺りにくる。

覚悟を決めたほうがよさそうだな。

「僕は全て自分の意思で、納得して、行動してる。だから別に構わない」

沈黙。

美樹も鹿目もキュウベえも僕たちを見つめている。

張り詰めた緊張の糸。たぶんそよ風が吹いただけでも切れそうなくらいに、ピンとしているだろう。

全身から汗が流れる。

心臓の鼓動が激しい。周りにも聞こえてしまいそうだ。

喉が渇く。カラカラだ。

時間だけが過ぎていく。

誰も動けない。

極限の戦場。そこにいるだけで精根が削がれる。

糸は、まだ切れない。

僕の額から汗が流れ落ち、顎を伝い、地面に落ちて、水滴を作っ

た。

たったそれだけ。普段なら誰も気にも留めない。だが、張り詰めた糸を切るには十分だった。

僕と佐倉はほぼ同時に走り出す。

距離がどんどん縮まる。間合いでは佐倉のほうが上だが、逆に懐に入ればこちらに分がある。

槍は小回りが利かない。そもそも、こんな狭い路地裏で槍で戦うこと自体が無謀だ。

佐倉はソレを魔法少女の力で可能にしている。

「!？」

佐倉との距離が五メートルを切ったところで、不意に彼女の姿が揺らぐ。

まるで陽炎のようにたゆたい、そして分身を作り出していった。

「ちょっとした芸さ」

合計、3人に分身した。

「なら僕も芸を見せるよ」

走りながら全身を脱力させ、構える。生半可な技じゃ太刀打ちできない。

見よう見まねだけどあの拳法に賭ける。

距離三メートル。佐倉の必殺の間合いに入った。

「ロツソ・ファンタズマ!!」

分身が一斉に槍を突き出し、加速してくる。
対して僕も構えから技に移った。

「八卦流動掌!!」

ゆらりと、動く。

ただ身体が動くままに身を任せ、同化する。

「勝負だ!」

分身の槍と僕の掌が接触する、その瞬間。
僕をあの感覚が襲った。

超スピードでもなく。

催眠術でもなく。

もっと恐ろしい何かの片鱗。

「その必要はないわ」

次の瞬間、僕の掌は壁面を抉り取っていた。背後で轟音が鳴り響く。

だけど僕は振り向けなかった。

何だ? 何が起こった?

僕は一体……？

「何しやがったテメエ！？」

後ろで佐倉が叫んでいる。

ようやく僕は後ろを見た。やはり後ろには佐倉がいて、やはり誰もいない場所を攻撃したようだ。

僕らは強制的に移動させられたのか？

一体、どうやって？

割り込む余裕なんかなかった。

「……暁美」

僕はただ、突如として現れた暁美を見ることしかできなかった。

「そうか。アンタが噂のイレギュラーって奴か。妙な技を使いやがる」

イレギュラー？

普通とは違うっていうのか？

何が？

「早く行きなさい。佐倉杏子」

「……どこかで会ったか？」

「さあ、どうかしら」

「手札がまるで見えないとあっちゃね。今日のところは降りさせてもらうよ」

「賢明ね」

佐倉は壁面を蹴りながら上に跳んでいき、見えなくなった。

「おおー……壁キツクだ。実際にできるのか、アレ」

僕は一人、場違いなセリフを吐いた。

いや、終わりじゃない（後書き）

劇場版が出るそうですが真偽は果たして……

断章 生れ落ちる偽りの命 ―魔弾の射手―

その日、オレは心奪われた。

どうせいつものように退屈で、どうしようもなく暇になるはずだった一日。

しかしそれは変わった。

深夜、眠気もなく適当にチャンネルを回していた時、たまたまあの番組が写った。

黄色の衣装を身に纏った少女。マスカット銃をぶっ放し、華麗に戦うその姿にオレは見惚れていた。

他人に話したらバカにされるだろう。たかがアニメの登場人物に惚れるなど、はなはだ可笑しいと。

それでも、オレは惚れたんだ。今まで灰色でつまらなかった世界に色がついたんだ。

その日以来、オレはそのアニメを見始めた。ブルーレイも全巻予約した。関連商品も買い漁った。

親父やお袋がうるさかったが、無視した。オレの趣味に口出しなんかさせねえ。

お前らだって好き勝手やってるじゃないか。汚職、詐欺、脱税、殺人、売春、隠蔽工作、臓器売買……挙げたらキリがない。そのおかげで資産家に成り上がったんだろうが、オレには関係ない。

オレは汚い家の金を使ってマスカット銃を仕入れた。あの少女のような戦いができるように体術と射撃術を学んだ。毎週、放送日を楽しみにしながら生きていた。それだけが生きが이었다。

だが。

第三話。

オレは、わが目を疑った。うっかり別の番組を見たのかと思った。

そうであってほしかった。

少女が死んだ。怪物に頭を食われて、即死だった。実は物語の後半で復活するのかもしれないが、考察サイトを見てその可能性は無いに等しかった。

オレの世界は再び灰色になった。

守りたかった。

あの少女を、助けたかった。

不条理な世界で戦う少女たちを助けたかった。

オレは行きたい。あの世界に行って戦いたい。

こんなオレでも役に立つんだ。

幸せなんていらない。オレの命なんていくらでもくれてやれる。

オレはただの壁。最前に立ちほだかり、彼女を狙う全ての魔手を
跡形もなく撃滅する。

この、マスコット銃で。

——主が呼び声に応じ、顕現す——

極限の妄想の果て。

オレの分身。

吸血鬼そのものというべき格好をした男。

転生者と創造主。

呪いによる絶対の死。

理解した上での不動の覚悟。

死を受け入れた揺らぎなき決意。

「お前の名前はホーナー・フォルスターだ。目的は、バマミを救え。全てを捨ててでも守るんだ」

「御意に」

彼女が幸せに生きられるなら、オレは何も望まない。

「がんばれよ、ホーナー」

「うむ。主も最後まで死ぬんじゃないぞ」

「ヘッ、オレを誰だと思ってんだよ。あの親の息子だぜ？ どこまでもしぶとく生きてやるさ」

「ハハ、愚問であつたか。しかし、本当に奇妙なものだな。主と彼女が同姓とは」

「同じだからこそ与えられたンじゃねえか。オレみたいな人間にも」

だからオレではマミとはつりあわない。オレ如きがそんな感情を持つこと自体、唾棄すべきだ。

「では、逝くとするか」

「おう。じゃ、しばらくお別れだ」

「さらばだ。我が主――」

ホーナーの姿が消えていく。オレが目指した世界へと渡っていく。

「巴けん」

そして、オレはその世界で戦い続ける一人の男と出会った。

結局、流れに身を任せるしかない、か

今日は疲れた。

異能と日頃から戦^やり合っている魔法少女と真っ向からぶつかるなんて、割に合わない。

「……………」

僕はベッドに寝転び、自分の手を掲げる。指の隙間からのぞく天井は代わり映えしない。

あの後。

暁美は鹿目を叱っていた。冷たくて、厳しい物言いだっただけで、どこかホッとしていたようにも見えた。

前々から思っていたけど二人はどんな関係なんだろうか。僕の推測だが、たぶんあの二人はすごく深くて何よりも強い絆で結ばれている。

絶対に断ち切れない、死すらも彼女たちの絆は切ることとはできない。

そんな、強い強い繋がり。

まあ僕にそれを知ろうとする権利はどこにもないが。

僕がすべきことは奴^{キユウベえ}が何を企んでいるのかを調べ、得体の知れない契約の裏側を暴き出す。

とは言っても本当に裏があるかどうかなんて確証はないし、どうやって調べれば良いのか分からない。

最初は美樹と行動を共にして経験のある魔法少女と接触、情報収集に努めようとしたが失敗だった。佐倉も巴や暁美みたいな玄人だがいかなせんあの好戦的な性格だ。おそらく僕の言うことなんか耳も傾けないだろう。

だからといって他にアテはないし、もう本当に手詰まりだった。

「結局、流れに身を任せるしかない、か……」

昔からそうしていたように。

決して自分からは攻めない。相手に先手を取らせ、確実に反撃をブチ込む。

良く言えば堅実、悪く言えば臆病者だ。

「クソッ」

だけどこれが僕の生き方だった。

＊

夕刻。

鹿目からの連絡を受け、僕は先日の場所へと赴いた。すでに鹿目と美樹、キュウベえが来ていて、あちこちを丹念に調査していた。結界外での戦闘だったので壁面や地面は無数の傷が穿たれ、抉られ、戦いの爪あとがくつきりと残されていた。

「ずいぶんとハデにやったモンだな……」

僕もそれに含まれるが。

「ダメだ。時間が経ち過ぎている。昨夜の使い魔を追う手がかりはなさそうだ」

「そう……」

あたりを見ていたキュウベえが言う。さやかは険しい顔つきのまま相槌を打った。

「ねえ、さやかちゃん……このまま魔女退治を続けていたらまた昨日の子と会うんじゃないの……」

「まあ、当然そうなるだろうね」

「だったらさ、先にあの子ともう一度会って、ちゃんと話しておくべきじゃないかな。でないと、またいきなりケンカの続きになっちゃうよ」

（ケンカ、か……？ アレは）

僕は昨日の戦いを思い出したが、どのような観点から見てもケンカではなくガチで戦^やっていただろう。

「ケンカ、ねえ……昨夜のアレがまどかにはただのケンカに見えたの？」

どうやら同意見のようだ。まー、アレをケンカの一言で片付けるには無理があるよな。

「え？」

「アレはね正真正銘、殺し合いだったよ。お互いナメてかかってたのは最初だけ。途中からはアイツも私も本気で相手を終わらせようとしていた」

だろうな。あんな戦い、アンダーグラウンドの非合法格闘技でもなかなか見られない。

美樹はどうかは分からなかったけど、少なくとも佐倉は本気だった。

「そんなのなおさらダメだよ……」

「だから話し合えて？ バカ言わないで。相手はグリーンフィード

のために人間をエサにしようって奴なんだよ？ どうやって折り合いつけろって言うの？」

「さやかちゃんは魔女をやっつけるために魔法少女になったんでしょ？ あの子は魔女じゃない、同じ魔法少女なんだよ……探せばきっと仲良くする方法だってあると思うの。やり方は違っても魔女を倒したいと思う気持ちは同じ……昨日の子も、ほむらちゃんも」
「……っ」

優しい娘だ……あいつが惚れたのもよく分かる。

……？ あいつって誰だ？

ほんの一瞬、白髪の男の姿がフツとよぎり、すぐに消えていった。

「昨夜逃がした使い魔は小物だったけど、それでも人を殺すんだよ？ 次にあいつが狙うのはまどかのパパやママかもしれない。それでもまどかは平気なの？ ほっとこうとする奴を許せるの？」

「さやかちゃん……」

「私はね、ただ魔女と戦うだけじゃなくて大切な人を守るために、この力を望んだの。だからもし魔女より悪い人間がいれば私は戦うよ。たとえばそれが魔法少女でも」

さやかはそう言い切ると背を向けて去っていった。

僕は黙って見送っていた。その後姿は一人、死地へ挑む孤独な正義の味方のように見えた。

ぶっ殺す

自室で夜のネットサーフィンを楽しんでいた僕の脳内に、キュウベえの声が響く。

「まどか！ リン！ 急いで！ さやかが危ない！ 僕についてきて！」

「……クソッ」

僕は着の身着のまま家を飛び出した。

まさかとは思ったが本当に早まったマネをするとは。

お前を心配してくれる人が目の前にいるのに、どうしてだよ。どうしてそれに気がつけないんだ。

僕はギリッと歯を噛み締めた。正義の味方は一人じゃダメなんだ。どんなに強くたって仲間がいなければ、その正義を貫き通すことはできない。

己が信じた正義を信じてくれる仲間がいてくれるからこそ、正義の味方は強いんだ。

途中で無事に鹿目とキュウベえに合流し、彼が先を走って僕たちがその後を追いかけた。

そんなに長くは走らなかつたと思う。僕の自宅から徒歩でも10分足らずでいける場所だった。

さやかは巨大な高架橋の上に立っていた。その下には高速道路があり、車が行き交っていた。こんなところで、戦^やり合うつもりか！？ 少なからず被害が出るぞ。

だけど話し合いができる余地はもはやない。対峙した佐倉はすでに魔法少女の姿になり、槍を構えていた。対するさやかもその手にソウルジェムを持ち、いつでも応戦できる状態だった。

「待ってさやかちゃん！」

「まどか、邪魔しないで。そもそもまどかは関係ないんだから」

無理だ。話を聞ける状態じゃない。

「ダメだよ……こんなの絶対おかしいよ」

「フン、ウザい奴にはウザい仲間がいるもんだね

佐倉の一言に思わず拳をきつく握り締めた。

「じゃあ、あなたの仲間はどうかのかしら？」

「……チッ」

やはり気配も一切の素振りも見せずに暁美が佐倉の背後から現れた。僕は高まりかけた殺気を抑える。

一体、どんな魔法を用いているのか皆目見当がつかない。

「話が違うわ。美樹さやかには手を出すな、と言ったはずよ」

「あんたのやり方じゃ、手ぬるすぎるんだよ。どの道、向こうは戦^やる気だぜ」

手を組んだのか？ いつの間に……。

「なら私が相手をする。手出ししないで」

「ハンッ、じゃあ、コイツを食い終わるまで待ってやる」

佐倉は口にくわえたお菓子を示して、後ろに下がった。

「十分よ」

「ナメるんじゃないわよ!!」

暁美の態度にブチ切れたさやかが、ソウルジェムを掲げて変身しようとした。

「さやかちゃん、ゴメン!」

刹那、まどかが走り出し、さやかの手からソウルジェムをひったくった。

「えい!!」

そしてソウルジェムを下の高速道路めがけて投げつけた。

「なっにい!?!」

その行動に僕は驚き、意外に行動派なんだな、と鹿目を見直した。

「まどか! あんたなんてことを!」

我に帰ったさやかが怒ってまどかに詰め寄る。

「だって、こうしないと……」

次の瞬間。

糸が切れたかのように、さやかが崩れ落ちた。

まどかが何とかその身体を受け止めるが、さやかはピクリとも動かない。

「は？」

僕は何が起きたのかわからなかった。佐倉も、鹿目も呆然としている。

こんな状況下で美樹がふざけているはずがない。では突然の病気で倒れた？　もしくは持病を抱えていた？

いや、今まででそんな話は聞いたことがない。

「今のはマズかったよ、まどか」

誰もが口を聞けない中、橋の手すりに飛び乗ったキュウベえが口を開く。

「え？」

「よりにもよって、友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ」

何？　コイツは今、何て言った？

と、も、だ、ち？　は？　何？

「何？　何なの！？」

鹿目も何が起きているのか分からず、混乱している。

その時、何を思ったのか佐倉は突然、さやかの首をつかんで吊り下げた。

「やめてっ!」

鹿目の言葉を見無視して佐倉は何かを確認するように目を細め――。信じられないと言った様子で目を見開く。

「どういふことだオイ……コイツ、死んでるじゃねえかよ」
「……え？」

「そ、そんなバカな!!」

僕もさやかに近づき、手の脈を測る。

ウソじゃない。本当に停止してる。次は口元に手を当てるが呼吸もしてなかった。

死んでる。ただ漠然と、そこに。

信じられない事実がそこにある。

急性の病で病死? だから美樹は持病なんか……

なんだ、何なんだよ! おい!

「さやかちゃん……? ねえ? さやかちゃん? 起きて……ねえ、ちよっとどうしたの? ねえ! 嫌だよこんなの!!」

まどかが地面に横たわるさやかの身体を必死に揺さぶり、呼びかける。

その傍らで僕は必死に心臓マッサージを繰り返していた。

「起きろ! なにこんなところで寝てんだ! 起きろよ、おい!!」

体温がどんどん下がっていく。死後硬直も始まりかけていた。

「何がどうなってやがんだ！　おいッ！！」

佐倉がキュウベえに近寄り、すさまじい剣幕で怒鳴る。

「君たち魔法少女が身体をコントロールできるのは、せいぜい100m圏内が限度だからね。普段は当然、肌身離さず持ち歩いてるんだからこういう事故はめったにあることじゃないんだけど……」

「何を言ってるのキュウベえ！　助けてよ！　さやかちゃんを死なせないでっ！！」

何だ。コイツは何の話をしている。

常に持ち歩いている？　滅多に起こる事故じゃない？

……まさか……

「そんな、ウソだろ……そんなバカなことが……」

しかし確かな可能性を秘めて描かれる最悪の真実。

今まで色々な詐欺師や小悪党を見てきたが、コイツは……！

「はぁ……まどか、そっちはさやかじゃなくてただの抜け殻なんだって。さやかはさっき、君が投げ捨てちゃったじゃないか」

「……え」

「なん……だと……」

ため息をつきながらのキュウベえの一言に、まどかは固まった。

その瞳からは滂沱として涙がこぼれる。

「ただの人間と同じ、壊れやすい身体のまままで魔女と戦ってくれなんて、とてもお願いできないよ。君たち魔法少女にとって元の身体なんていうのは外付けのハードウェアでしかないんだ」

……

「君たちの本体としての魂には魔力をより効率よく運用できる、コンパクトで安全な姿が与えられるんだ。魔法少女との契約を取り結ぶ僕の役目はね、君たちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変えることなのさ」

だから、魂^{ソウル}の宝石^{ジェム}。

「てめえは……なんてことを！ ふざけんじゃねえ！！ それじゃアタシたちゾンビにされちゃったようなモンじゃないか！！」

佐倉はいきり立ち、キュウベエの首根っこをつかんだ。

「むしろ便利だろう？ 心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、その身体は魔力で修理すればすぐにまた動くようになる。ソウルジェムさえ砕かれない限り、君たちは無敵だよ。弱点だらけの人体よりもよほど戦いでは有利じゃないか」

「ひどいよ……そんなのあんまりだよ……」

まどかはさやかな身体にしがみつき、力なく泣いていた。

僕はたださやかな傍で立ち尽くしていた。

「君たちはいつもどうだね。事実をありのままに伝えようと決まっ

同じ反応をする」

無表情のままキュウベえは続ける。

「わけが分からないよ」

心底から、吐き出すように。

「どうして人間はそんなに魂の在処にこだわるんだい？」

もう、限界だった。

何かがキレる。

理性のタガが外れた。

細かいことはどうでもいい。

ただ今は、コイツだけは。

僕は佐倉の手からキュウベえを奪い取り、地面にたたきつける。

「――ぶっ殺す」

そのまま渾身の力で首を締め上げる。

身体はものすごく熱いのに、頭の中は恐ろしいほどに落ち着いていた。

自分でもこんな底冷えした声が出せるなんて思わなかった。

こんな状況でも奴は平然としていた。むしろ――。

「そうやって感情的になるのも君たち人間の悪いクセだね」

僕は無言で、もう片方の手で奴の耳の触覚をブチ抜こうと力をこめたところで。

「あっ」

佐倉の声に、僕はさやかの方を見る。なぜか少し息を切らしている暁美がいた。

その手にはさやかのソウルジェムがある。そつとさやかの手に握らせてやると、一回、ビクンと身体が飛び跳ねてさやかは起き上がった。

そして僕たちを見渡し、

「何？ 何なの？」

何が起きたのかまったく分かっていないのか、呆然としていた。

「その手を離しなさい。姫宮リン」

暁美が僕を睨みながら言う。僕は舌打ちして奴を解放してやった。

そんな悲しいこと、言うなよ（前書き）

そんな悲しいこと、言うなよ

翌日。

目覚めは今までの中で最悪だった。知りたかった真実はどこまでも残酷で、胸糞が悪かった。

人としての尊厳を冒瀆している。魂を抜き取るなんて、神をも恐れぬ所業だ。

やってくれたものだ。最初^{ハナ}ッからいけ好かない奴だとは思っていたが、あそこまでの下種だったとは。

今なら断言できる。あいつは敵だ。あいつには人間の価値観が通じない。自分の行いをミクロンも悪いなんて思っちゃあ、いない。何かも奇跡の対価だと主張するに決まっている。

あいつは奇跡を売って歩いていやるんだ。僕みたいな人間が言えた義理じゃないけど、絶対にタダじゃすまさない。まだかたちを守ると決意した時から、僕の成すべきことは分かっていた。

反逆してやる。あのふざけきった契約を、必ずブチ壊してやる。どんな手を使っても。

＊

街外れ。普通の人ならまずは近づかないであろう、廃れた地区。

僕はフードで顔を隠し、その薄汚れた路地裏を歩く。周りにいるのはホームレスかヤク中の廃人か客引き。いかがわしい店の看板が夕暮れの中で佇む。

何人かの新参の男たちが話しかけてきたが、僕の顔を見た古株が慌てて引き止めていた。

やがて僕は崩れかけたバラック小屋にたどり着き、ノックもせずにはドアを開けた。狭い小屋の中は薄暗く、火薬のにおいで満たされ

ていた。

ドアから差し込んだ陽光が所狭しと並べられた様々な銃火器を鈍く輝かせた。日本刀も何本か見受けられる。もち

ろん真剣だ。

「……今日は何をお求めで？」

小屋の奥、日の光が届かないカウンターの後ろで座り込む男が声をかけてきた。僕と同様にフードを被り、素顔は

一度も見ることがない。

「散弾銃一丁とナイフ10本、あとは手榴弾50個が欲しい」

「……お支払いは？」

「――皿洗い」

「……またか」

＊

夜。

昨日は学校を休んだ。今日も色々と手入れがあつたので休み、終わったところでまどかから連絡が来た。魔女狩りを再開するらしい。僕は黒いコートを着込んでさやかの家の前に到着した。

丁度、さやかがあいつを引き連れて玄関から出てくるところだった。

「まどか……」

表情が暗い。あの明るかったさやかの面影はどこにもなかった。

「ついてっていいかな……？ さやかちゃんに一人ぼっちになってほしくないの……だから……」

「あんた……なんで……なんでそんなに優しいかなあ……あたしにはそんな価値なんてないのに」

声も重く、今にも消えそうなくらいか細い。この二日間でかなりやつれて見えた。

「そんな……」

「あたしね、今日後悔しそうになっちゃった。あの時、仁美を助けなければって」

僕は唇をかみ締める。何があつたのかは知らない。でもさやかは、今までのさやかじゃないような気がした。

「ほんの、一瞬だけ思っちゃった……正義の味方失格だよ……仁美に恭介を取られちゃうよ」

大体の流れは分かった。

志筑は悪くないが時期とタイミングが最悪だった。何も起きなければ良いが……。

「でも私、何もできない。だって私、もう死んでる……ゾンビだから……」

まどかに抱きついて声を押し殺して。

一体、僕はあと何回、彼女たちの泣き顔を見なきゃいけないんだろう。そんな顔は見たくないのに。

「こんな身体で抱きしめてなんて言えない……キスしてなんて言えないよ……ッ」

僕はその悲痛な叫びを聞いていることしかできなかった。
そんなことないって、言えなかった。

「そんな悲しいこと、言わないよ」
「!？」

僕は辺りを見渡す。誰も居ない。鹿目も美樹も気づいていない。
たぶん目の錯覚だ。そうに決まってる。

背中にサーベルを背負った太った男と、剣道着を身に着けた人影
が見えたのはきつと目の錯覚だ。

＊

しばらくすると美樹は落ち着きを取り戻した。
そして魔女探しを始めると案外すぐに見つかった。結界内に入るとそこは影絵の世界のようだった。

何故か僕たちも黒い姿になったが害はない。
それよりも今は。

「……ッ」

息を切らすさやかに、黒い影絵のような魔女が無数の黒い手のようなものを一斉に飛ばしてきた。

僕は僕で鹿目を守るだけで、援護には回れそうにない。

さやかはサーベルで黒い手をまとめてぶった切り、同時に疾走した。取り囲むように現れた手を空中に飛んで回避し、足元に楽譜を

髣髴とさせる円形の魔法陣を展開させた。

爆発的な加速と突進力を得て、さやかはサーベルを突き出し、魔女に迫った。

「はああっ!!」

速度と魔力を上乗せした一撃は、しかし魔女から吐き出された黒い大木のようなものに遮られ、飲み込まれてしまう。

「さやかちゃん！」

「く、ヤベェ!!」

助けに行きたくともまどかを置き去りにはできない。

進退窮まったかと思った時、紅い閃光が迸って黒い大木を微塵に切り刻んだ。

「まったく、見てらんねえつつうの。いいからもうすっこんでな。手本を見せてやるからさ」

どこからともなく佐倉が舞い降りてくる。美樹も大木から解放されて彼女の隣に着地した。

しかし美樹は身を屈めて再度、突撃をかけようとする。

「おい！」

「邪魔しないで。一人でやれるわ」

さやかは抑揚のない声で吐き捨てると、地面を蹴立てて走り出した。

黒い手の乱舞を紙一重でかわし、魔女の頭部と思しき部分を跳ね飛ばす。お返しといわんばかりに黒い手がさやかを掴み、叩きつけ

た。

しかしさやかは苦悶の声も上げず、それどころか――。

「フフ……フフフフフフフフフフフフフフフ」

嗤った。

機械的で、一定の音程で嗤い続ける。
どうみても普通じゃなかった。

いつもの快活な笑い声じゃない。

地獄の底で嘲笑う何か。

背筋が凍る。

「アンタ、まさか……！」

黒い手がさやかを捕らえたまま、持ち上げたがサーベルで薙ぎ払
い、魔女に馬乗りになった。

さやかの黒いシルエットに鮮血が伝い、ぼたぼたと流れた。

生気をなくした双眸は血の涙を流し、さやかは憑かれたようにサ
ーベルで斬り続ける。

「アハハハハハハハハハハハハハハハッ！！ ホントだ！ その気
になれば痛みなんて、消せるんだ！ フフフ、アハハハハハハハハ
ハハハハハ！！」

嗤う。

狂う。

一方的な殺戮。

僕に彼女を止めることはできない。

「やめて……もうやめて……」

鹿目の悲しい声は、しかしさやかの笑い声にかき消された。

言って良い事と悪い事があるだろ

それを言葉で表現するなら羅刹、と畏怖すべきか。

人を喰らう魔女。その魔女を一方的に蹂躪する様は、鬼をも喰らう怪物——羅刹と言うにふさわしい。

狂気じみた笑みを貼り付けて美樹は魔女を切り裂く。何度も刃を突き刺し、しゃにむに刻み込んだ。自分の身体から流れる血も彼女を止めることはできない。

やがて結界の壁にヒビが走り、生き物のように増殖していった。結界が無音で崩壊していく中、美樹はゆらりと立ち上がった。

「やり方さえ分かっちゃえば簡単、だもんね……これなら負ける気がしないよ」

楽譜を思わす円形の魔法陣が傷口に浮かぶと、瞬く間に快癒していった。

パーサーカー
狂戦士。

今の美樹は破壊の快楽に染まっている。歯止めが効かない。自分の身体を厭わず、どこまでも壊れていく。

僕の力では抑止できないだろう。
ヘタしたら逆に殺^やられるかもしれない。

「あげるよ。そいつが目当てなんでしょ？」

「おい……」

美樹は落ちていたグリーンシードを拾い、佐倉に投げ渡した。

「あんたにはカリは作らないから。これでチャラ……」

僕は息を呑んだ。

あの戦いで既に美樹のソウルジェムはかなり濁ってきている。つまり、魂が穢れているのだ。穢れを限界まで湛えたらどうなるか――。

考えるまでもない。ほぼ、僕の予想は当たっているだろう。ただそれを解決するだけの力はなかった。

「さ、帰ろう。まどか……」

美樹が変身を解くとムチャな戦いの反動か、よろめいて倒れそうになった。

「あ……ゴメン……ちょっと疲れた……」

「無理しないで、つかまって」

美樹の身体を支えながら鹿目はその場を去っていく。僕も無言で彼女たちの後を追いかけた。

「あの、バカ」

後ろで佐倉が呟いていた。

＊

帰り道、春先の雨が降り出し、僕らは近くのバス停の待合室で雨宿りをする事になった。

まだ雨は冷たく、風邪を引くと厄介だからな。

「……………」

二人とも先ほどからベンチに座ったまま一言も口を利かない。重苦しい空気が垂れ込めるが僕も何を言えればいいか、分からなかった。場を和ませるトークなんかできるわけがない。

否、今のこの状況はどんな芸人でも覆せそうにない。

雨の音だけが響く。

雨足が強まり、周囲は煙っていた。この時間じゃバスも来ない。

「……嫌な雨だな」

僕は誰にいうまでもなく独り言をもらし、両手を額の前で組んで目を閉じた。

本当、嫌な雨だ。

「さやかちゃん……あんな戦い方、ないよ」

不意に鹿目が重い口を開いた。

僕は顔を上げて二人を見る。美樹は俯いたままだ。

「痛くないなんてウソだよ……見てるだけで痛かったもん……感じないから傷ついていいなんて、そんなのダメだよ」

「……ああでもしなきゃ、勝てないんだよ。才能、ないから」

ゆっくりと時間を使ってから美樹は返事をした。

才能、ね。

少なくとも僕の目にはタダの経験不足にしか見えないが。場数を踏めば佐倉や巴みたいになれると思うけどな。

まあ、素人同然の僕にそんな根拠もない戯言を吐く権利なんかどこにもない。

「あんなやり方で戦ってたら、勝てたとしてもさやかちゃんのため

にならないよ」

「私のためって、何？」

美樹の声に冷たいモノが混じる。

突然立ち上がって鹿目にソウルジェムを突きつけた。

「こんな姿にされた後で何が私のためになるって言うの？」

美樹は背を向け、責めるような口調で続ける。

「今の私はね？ 魔女を殺す？ ただそれだけしか意味がない石ころなのよ。死んだ身体を動かして生きてるフリをしてるだけ。そんな私のために誰が何をしてくれるって言うの？ 考えるだけ無意味じゃん」

そんなワケ、ねえだろ。

周りをよく見ろよ。

僕はまで喉元でかかった言葉を飲み込む。

「でも私は……どうすればさやかちゃんが幸せになれるかって……」

「だったらあんたが戦ってよ」

親友に向けるとは思えないほどの冷たい視線と言葉。

美樹、お前はそこまで堕ちれるのか？

失ってもいいのか？

「キュウベえから聞いたわよ。あんた、誰よりも才能あるんでしょ？ 私みたいな苦労をしなくても簡単に魔女をやっつけられるんでしょ？」

「私は……そんな……」

「私のために何かしようって言うんなら、まず私と同じ立場になつてみなさいよ。無理でしょ？ 当然だね。ただの同情で人間やめられるわけないもんね」

「同情なんて……」

「何でもできるクセに何もしないあんたの代わりに、私がこんな目に遭っているの。それを棚に上げて、知ったようなこと言わないで」

そう、吐き捨てるのと美樹は待合室から出て行った。

鹿目も慌てて追いかけていったが僕は座ったままだった。

「ほっとけよ……そんなヤツ……ッ!!」

歯を食いしばり、爪が皮膚に食い込むくらいキツく拳を握る。

「言って良い事と悪い事があるだろ!!」

僕は怒りに任せて待合室のガラスを殴りつける。

激しい破碎音を発して窓ガラスは粉々に碎け散った。

その音に驚き、美樹と鹿目はこちらを見て、僕がガラスをカチ割ったことに更に驚愕していた。

「あんた、何やって……!!」

「手、手が……」

大小のガラス片が拳に突き刺さり、鮮血が流れ落ち、雨に混じって地面に血痕を作った。

「……勝手にしろよ。僕は、帰る」

呆然とする二人を残して、僕は家に向かった。

＊

「……愛してくれる人は目の前にいるのにな……」

サーベルを背負う太った男は悲しげに呟く。

「そうだな……」

剣道着を着た、太った男とは対照的に長身痩躯の男がそれに答える。

「今は彼に任せよう。僕らはあまりにも無力だ」

今度は剣道着の男が呟き、

「ああ……」

太った男が答えた。

なかなか面白いな、おい

次の日も学校を休んだ。

手の怪我は知り合いに腕のいい医者が出たので、コネを使ってタダも同然の値段で治療させた。

まだ時間はある。

しかし行動を起こす気力はなかった。この三日ほどで状況は大きく変動した。しかもそれが最悪の方へ、だ。

対策を講じようにも僕に力はない。どうしたらいいのか分からない。

気持ちばかりが先走り、空回りする。だから窓ガラスをぶち破ったりするような愚行をするんだ。

非常時こそ冷静に判断しなければならないのに。

僕は何をしなければいけないのか。どうしたいのか。それをもう一度、考え直す必要がありそうだ。

「外の空気でも吸うか……」

＊

思うままに足を進めていると、ある公園にたどり着いた。中央にはライトアップされた噴水があり、色鮮やかに輝く。

僕はベンチに座ろうとして初めて他に人がいることに気がつく。

「あなたは、なんであなたはいつだって、そうやって自分を犠牲にして……!」

声で分かった。

曉美だ。服装はあの魔法少女の姿。

ということ、そばにいるのは鹿目か。

「え……？」

「役に立たないとか、意味がないとか、勝手に自分を粗末にしないで！」

普段から感情を見せない彼女が、あそこまではっきりと自分の気持ちぶつけていた。

今にも泣き出しそうな声で、必死に、懸命に。

「あなたを大切に想う人のことも考えて！ いい加減にしてよ……あなたを失えばそれに悲しむ人がいるって、どうしてそれに気づかないの……あなたを守ろうとしてた人はどうなるの！」

激情。

今まで誰にも話せず、溜め込んできた想いなのだ。僕は理解した。鉄面皮の裏に隠された、儂く脆い本当の姿。

暁美は力なく地面にひざをついた。

あの後ろ髪……何かの名残だろうか。前は結んでいたように思える。

「だからワシは女子の泣き顔なんぞ嫌いなんじゃ。笑顔以外は見たくないわ」

幻聴なのか、真実なのか。

僕の視界に一瞬だけ、軍人風の巨漢と白衣を纏った初老の男性が見えた。

「私たちはどこかで……どこかで会ったことあるの……？」

「それは……」

鹿目は何かを思い出そうとするように、つぶやく。

どこかで会ったこと、ありそうだ。ソレがどこのかは知る由もないが。

もしかしたらどこか遠くの世界なのかもしれないし、前世なのかもしれない。あるいは未来と過去のことなのかもしれない。

「ごめん、私さやかちゃんを探さないと……」

「待って、美樹さやかはもう……」

カバンを掴み、鹿目はその場を去ろうとする。それを引きとめようと暁美は手を伸ばすが鹿目は後ずさった。

「ゴメンね……」

そのまま鹿目は振り向くこともなく走り去っていった。

「待って！ まどか……ッ！」

うまく立ち上がれない暁美を見るのが耐えられなくて、僕は近づき手を掴んで引き起こした。

「……話は途中まで聞いた。詮索はしないし、するつもりもない」

まあ、ベンチに散乱するキュウベエの死体を見れば大方の察しはつくが。

「……そう」

いつもは拒絶されるのだが今日は特に何も言われなかった。

と、その時。

「無駄なことだって知ってるくせに。凝りなんだな、君も。代わりはいくらでもあるけど、無意味に潰されるのは困るんだよね。勿体ないじゃないか」

街灯の明かりが一瞬、消えて再び灯る。見ればベンチの死体の隣にキュウベえが何食わぬ顔でいた。

そして何を思ったのか、自分の死体を貪り食い始める。

「ほおー、何回ぶっ殺しても無限に沸いてくるのか。なかなか面白いな、おい」

魂を抜き取る力を持つ奴だ、いまさらこの程度で驚くかよ。

「君に殺されたのは二度目だけど、おかげで攻撃の特性も見えてきた」

暁美の能力、か。

アレを二回ほど体験したがいまだに僕は分かってない。少なくとも奴のほうが僕よりは優れていそうだ。

気に食わんけど。

「時間操作の魔術だろう？ さっきのは」

キュウベえの指摘に暁美は表情を険しくした。

時間操作ってアレか。URYYYYYとか無駄無駄無駄アッ！とかドドドとか貧弱！貧弱ウ！とかみたいなのことか。

「やっぱりね。なんとなく察しはついていたけれど、君はこの時間

軸の人間じゃないね」

つまり未来ないし過去から訪れた旅人。未来のロボットじゃなかろうな。

「お前の正体も企みも、私は全て知ってるわ」

「なるほどね。だからこんなにしつこく僕の邪魔をするわけだ。そうまでして、鹿目まどかの運命を変えたいのかい？」

「ええ、絶対にお前の思い通りにはさせないキュウベえ……いいえ——」

冷え切った一陣の風が吹き抜ける。

インキュベーター
「孵卵器」

これが運命だって言うのか

僕は暁美と別れ、鹿目のあとを追いかけた。

幸いすぐに見つけることができた。終電が過ぎた時間とはいえ、線路内を歩いてりゃ否応がなしに発見できる。

美樹が行方不明なのは知ってる。あの日から学校に来なくなり、家にも帰ってない。

「どこに行っちゃったんだよ……」

探せそうなところは探しつくしたという。だから今は普通じゃないところを探しているらしい。

だけどこんなところにいるとは思えんが……。

「ん？」

気配を感じて僕は前を見る。暗闇の中から足音が響き、険しい顔をした佐倉と暁美。

そして佐倉に抱きかかえられた美樹。

「……クソツタレ」

僕は毒づく。最悪の、結末だ。

「さやかちゃん！？　どうしたの！」

鹿目が美樹に駆け寄る。彼女の身体は脱力し、一切の生気が感じられなかった。

眠っているようにも見えるが、ゾツとするほどに青白い顔がソレ

を否定する。

「ねえ、ソウルジェムは？ さやかちゃん、どうしたの？」

「彼女のソウルジェムはグリーンフシードに変化した後、魔女を産んで消滅したわ」

「え……？」

暁美の言葉に鹿目はへたり込んだ。

「ウソ……だよね？」

「事実よ。それがソウルジェムの、最後の秘密」

僕が求めて、知り得ようとしていた真実。

間に合わなかった。

いや契約した時点でもう手遅れだったのだ。何もかもが遅すぎた。結局、僕は何もできないままここまで来てしまったのだった。

「この宝石が濁り切って黒く染まる時、私たちはグリーンフシードになり、魔女として生まれ変わる」

どこまでも残酷で。

どこまでもふざけきった真実。こたえ

「それが魔法少女になった者の、逃れられない運命」

運命？

何だよ、ソレ。

「ウソよ……ウソよ……ねえ……」

鹿目はふらつきながら立ち上がり、佐倉に近づく。

「そんな、どうして？ 魔女から人を守りたいって、正義に味方になりたいって、そう思って魔法少女になったんだよ……なのに……」

鹿目は、地面に膝をついた。

「その祈りに見合うだけの呪いを、背負い込んだまでのこと。あの子は誰かを救った分だけ、これからは誰かを祟りながら生きていく」

何なんだよ、これ。

「ふざけてんじゃねえぞ！！ 何で、何で誰よりもこの街を、僕たちを守ろうとしてくれた奴が、こんな目に遭わなきゃならねえんだよ！！ これが運命だって言うのか！？」

僕は、叫ぶ。

感情が爆発する。頭の中が真っ白だ。

やり場のない怒りと憎悪が心で煮えたぎる。

「てめえは……何様のつもりだ。事情通ですって自慢したいのか……」

唐突に佐倉が暁美の胸倉を掴む。

「何でそう得意げに喋ってられるんだ。こいつはさやかか、さやかの親友なんだぞ！」

美樹に泣きついている鹿目を見、暁美を睨み付けた。

「今度こそ理解できたわね。あなたが懂れていたものの正体が、どういうものか」

それでも暁美は冷静で、表情を崩さなかった。

「わざわざ死体を持ってきた以上、扱いには気をつけて。迂闊な場所に置き去りにすると、後々厄介なことになるわ」

それでも冷酷な言葉を発していた。

「デメエは、それでも人間か」

「もちろん違うわ。あなたもね」

佐倉の言葉に容赦なく言い返し、暁美は立ち去っていった。

＊

翌朝。

平日だけどそんな気分じゃない。

あそこまでキレたのも久しかった。

「……クソ」

僕はベッドの上で丸くなる。何も考えたくなかった。

このままずっと寝ていたい。こんな現実なんて、夢のように覚めてしまえば良いのに。

＊

ふと、気配がして目が覚めた。カーテンの隙間から差し込む光は

オレンジ色になっている。

「美樹……？」

僕は起き上がる。小さくて今にも消えそうだけど、確かに美樹の気配だった。

「……行ってみるか」

もしかしたら、という一縷の希望に賭けて。

僕は黄昏に沈む街並みへと飛び出していった。

おかえり

美樹の気配を辿っていくと、ある工事現場に行き着いた。白いシートからは剥き出しの鉄骨が覗き、その汚れ具合から放置されて久しいことが分かる。

僕は入り口を探そうと辺りを見回すと蹴破られた場所があった。内部からは人の気配もする。

先客がいるようだ。

念のため、警戒しながらコンクリートの階段を上り、上階に向かう。上り終えると斜陽が差し込んできて思わず目を覆った。

「誰だ？」

同時に声がかけられる。この声は……。

「佐倉、か」

僕は日陰に移動してそこにいた二人の人物を検めた。

人の気配の正体は佐倉と鹿目だった。佐倉はすでに魔法少女の衣装を纏っている。

「何しに来た」

佐倉は鋭い目で僕を睨む。

「美樹の気配を感じたからここに来た。佐倉たちも、そうなんじゃないか」

「……あんたを呼んだ覚えはないけどな」

佐倉は背を向けた。

「さて、改めて訊くけど本当に覚悟は良いんだね？」

「何かもう、慣れっこだし。私、いつも後ろからついていくばかりで、役に立ったこと一度もないけど……でもお願い、連れて行って」

「ホント変な奴だな、あんた」

フツと柔らかく微笑み、佐倉は槍で空間を一閃した。
彼女が待つ結界の入り口が静かに開いた。

＊

結界の内部は路地裏のような場所だった。薄汚れた壁面には何かのコンサートのチラシが何枚も貼り付けられていた。

前を歩く彼女たちは先ほどこら会話をしているが、僕にそれを聞く権利はないし、参加する資格もない。

僕はあくまでも見ているだけで、何もできやしないのだから。

守ると誓ったあの日から、僕はずっと蚊帳の外でバカみたいに立ち尽くしていた。守ることも戦うこともできなかった。

自分が何を守りたいのかも曖昧なままで流されてきた。この場にいること自体が間違いなのかもしれない。部外者は部外者らしくそしらぬ顔で振舞っていればいいのかもしれない。

だけど、僕はここにいた。何かに惹かれるようにここへ来ていた。美樹の気配がただけじゃ、たぶん僕は動けなかった。

「杏子ちゃんはどうして……」

いつの間にか路地裏を抜け、くぐもった音楽が鳴り響く廊下になっていた。紅いカーペットが敷かれ、壁には今までの美樹の戦いの

模様が映し出されていた。

「気づかれた！ 来るぞ！」

同時に入ってきた扉が勢いよく閉じられる。風景が凄まじい速度で後ろに流れていく。

「美樹……」

僕らは、途方もない巨大な空間に引き込まれていた。

蒼い人影の指揮者や楽団が奏でる空虚な調べ。誰もいない空席のコンサート会場。

その中央に据えるのは、下半身が人魚、上半身を鎧のようなもので武装し、美樹が使っていたサーベルを持った魔女。

もう見る影もないが、紛れもなく美樹さやかだった。

「いいな、打ち合わせどおりに」

「う、うん」

佐倉の言葉に鹿目はうなづき、魔女に呼びかける。

「さやかちゃん……私だよ、まどかだよ。ね、聞こえる？ 私の声が分かる？」

しかしその返答は否。魔女の周囲に巨大な車輪がいくつも出現する。

「怯むな。呼び続けろ」

佐倉が鹿目の前に紅い網状の防壁を展開し、槍を構えた。

僕は、その後ろで見てるだけだった。

「さやかちゃん、やめて……お願い、思い出して！　こんなこと、さやかちゃんだって嫌だったはずだよ」

魔女は答えない。不気味な顔には一切の表情も窺えなかった。

「さやかちゃん、正義の味方になるんでしょう？　ねえ、お願い……元のさやかちゃんに戻って！！」

車輪が一齐に放たれる。

佐倉は槍を乱舞させ、はじき返し、逸らし、跳ね飛ばし、切り抜ける。

だがそう長くは持たないだろう。

僕はきつく拳を握り締め、見ているだけだった。

「聞き分けがねえにもほどがあるぜ……さやか！！」

次の瞬間、先の二倍以上の数の車輪が現れ、佐倉へと殺到する。

裁き切れずに直撃を喰らい、跳ね飛ばされて鹿目を守る防壁に叩きつけられた。

「杏子ちゃん！？」

「大丈夫。この程度、屁でもねえ。あんたは呼び続けろ、さやかを」

切れた頬の血を拭い、佐倉は立ち上がる。

「やめて！　もうやめて！　さやかちゃん、私たちに気づいて！」

幾度となく繰り返される車輪の猛攻。

ダメージが重なり、佐倉の動きも鈍くなってきていた。
その隙をついたのか、魔女は鹿目をその大きな手で掴み、握り潰そうとする。

「さやかちゃん……お願いだから……」

いつまで立ちすくんでんだ。動け。

今ここで動かねえでどうするんだ。何のためにここにいるんだ。

「っあああああ!!」

車輪が吹き荒れる戦場を駆け抜け、僕は魔女に肉薄する。
サーベルの攻撃を僅差で掻い潜って顔面に爆竹を投げつけた。閃光と破裂、一瞬だけ魔女の動きが止まる。

「さやかあッ!!」

ほぼ同時に佐倉の槍が魔女の腕を一閃し、斬りおとした。

「あんた、信じてるって言ってたじゃないか! この力で人を幸せにできるって!!」

佐倉の声が響き渡る。

魔女はその声を掻き消すかのようにサーベルを地面に突き刺し、崩壊させた。

轟音と共に結界の下層へと落ちていく中、かすれるような声で佐倉がつぶやく。

「頼むよ神様……こんな人生だったんだ……せめて一度くらい、幸せな夢を見させてくれよ……」

彼女は泣いているように見えた。

僕たちは地面に降り立つ。いつの間に来たのか、気絶している鹿目を抱きかかえる暁美がいた。

「よう……」

「杏子……あなた……」

僕は――。

「その子を頼む。あたしのバカに付き合せちゃった」

このまま、何もできないでいくのか。

「足手まといを連れたまま戦わない主義なんだろう？ いいんだよ、それが正解さ」

関わっておきながら傍観者という立場で生きていくのか。

「ただ一つだけ、守りたいものを最後まで守り通せばいい」

無表情だった暁美の顔が僅かに揺らぐ。

「ハハハ……何でかなあ、あたし……だって今までずっとそうしてきたはずだったのに……」

儚く、悲しい笑顔を見せて、髪を結んだりボンを解いた。

しっかりと両手で包み込み――その姿は神に祈る聖女のように――。

「行きな。こいつはあたしが引き受ける」

暁美は無言で佐倉に背を向けて去っていく。
それを見届けてから。

佐倉の魔力が爆発的に高まっていった。
最後の攻撃が始まる。

「心配すんなよ……さやか……」

巨大な槍が魔女と佐倉を囲うように出現し、佐倉は竜のようにと
ぐろを巻いた槍の先端に飛び乗る。

青白い輝きが彼女を包み込み、桁外れの魔力が一点に収束してい
った。

「ずっと傍にいてやるからさ」

魔女は無言で静かにサーベルを下ろした。
まるで、言葉が通じたかのように。

嫌だ。

こんな終わり方があってたまるか。

変えたい。

変えてやりたい。

ただの驕りで自己満足になっても、それでも僕は！
僕は！

守りたい！！

見ているだけじゃなくて、今度こそ守りたい！！

「待ってたぜ、その想い」

「二人ぼっちは、寂しいもんな」

そういつて佐倉は最後の魔力を解放させようとして――。

「まだだ!!」

僕は走り出した。

「まだ終わりじゃないだろ!! 始まってすらいなのに、終幕なんてあってたまるか!!」

前を睨み、ひたすら走る。

「諦めたりするものか!! 絶対に、今度こそ成し遂げてみせる!!」

僕の接近に気づいた魔女が車輪を飛ばしてくるが、僕は構わず走り続けた。

身体のあちこちに直撃しようとも、嫌な音がしても僕は止まらない。

「こんなふざけきった運命なんか、誰も受け入れたりなんかしない!!」

僕が走る道の先、輝ける光りの中に二人の人影を見た。

帽子を目深に被る男と、白髪の少年。

二人とも僕を見て力強くうなずいていた。

「センチルス・ハアウト・カジュレ・テレトリア!!」

自然と紡がれる光の呪文。

かつて存在し、そして存在しなかった最強にして伝説の転生者が

得意とした秘術。

「さやかあああああああああ！！」

眩い光が結界内を包んだ。

結界は消滅し、工事現場へと戻されていた。
夕陽が満たす日常の世界。先までの戦いは夢物語のように、遠い
出来事に思える。

「……おかえり」

姫宮は呟く。両手にそっと包まれたソレは、もう二度と元には戻らないはずのモノ。

だけど彼は取り戻した。

今までの絶望を根底から覆す、本当の奇跡。

「さやか」

差し出された彼の両手には、蒼い輝きを放つソウルジェムがあった。

それでもやらなければならぬ

その日、美樹は再び目覚めた。

泣いて喜ぶ鹿目、一発引叩いてから抱きつく佐倉、どこかほつとしたような面持ちの暁美。

僕は彼女たちの反応を見てから静かにその場から去った。

*

後は、魂を肉体へと還元させるだけか。

あの時は初めて秘術を使ったから完全に戻すことはできなかったけど、今度は成功させる。

僕の役目。

それは僕が生まれる前から――否、最初からすべて決められていたんだ。僕が忘れていただけだった。

原因は多々、挙げられる。不安定だったし、僕自身の精神状態が揺らいだ時もあった。

でも大丈夫。あの秘術を使ってすべて思い出した。時折、聞こえる男たちの声もこれで納得がいく。

僕は、かつて存在し、そして存在しなかった最強の転生者稲尾ジーンとその最強の創造主鹿目剣の執念が生んだ思念体。

成し遂げられなかったハッピーエンドへの道を切り拓くただひとつの切り札。

故に僕には彼らの記憶が混ざり、声や姿を見ることができた。

故に僕には彼女たちを守るという想いがあった。

故に僕は、不完全で、何回も道を間違えそうになり、それでも何

とかここまで辿り着いた。

いつまでこの世界に留まれるのかは不明だが、今まで普通に暮らし、成長してきたのである程度は持つだろう。

最後まで保てるようにしておくべきだ。

最強の魔女ワルプルギスの夜。

物語改悪によって生まれた魔人カタストロフの月。

前者は稲尾ジン、鹿目剣以下全世界の魔法少女たちの総力を結集させ、ようやく倒したと聞く。

後者は転生者たちの力では倒せず、タイムワープによる過去修正によって封じ込めた。

「カタストロフの月がまた出てくる可能性は高いな。既にこの物語も改変してるわけだし」

大まかな流れは原作に沿ってきてはいるが、佐倉、美樹、巴の生存は予定調和に含まれていない。

最悪のパターンを想定すればワルプルギスとカタストロフ。この両名を相手にしなくてはならなくなる。

生憎、僕は思念体に過ぎず、転生者たちのような力を振るうことはできない。契約で魔法少女の力くらいは得られるだろうが。

「それでもやらなければならない」

男たちが果たせなかった悲願を叶えるために。絶望を希望へと変えるために。

最後の戦いが始まる。

生れ落ちる偽りの命 ―紅の騎士王―

私とその番組を見たのは偶然が重なった奇跡と言える。

私はもういい大人だ。アニメなんて娯楽はとくに卒業していたし、日々の鍛錬で忙しく余裕はどこにもなかった。

だがその日、私はなぜか深夜に目を覚ました。尿意を感じた訳でもないし、一度眠りに落ちれば朝まで決して目覚めないと自負している。

ところがその日に限って目が冴えてしまい、どうやっても眠ることが出来なかった。不眠症にでもなったのかと疑ったが、健康管理には人一倍気を使っている。今までで調子を崩したことは一度もない。

とにかくこのまま寢床にいても眠れそうにないので、明日医者に行こうと決めて私は起き上がった。リビングに向かい、台所の冷蔵庫からワインを取り出してグラスに注ぐ。ソファに腰掛けてぼんやりとしていたが、何気なくテレビのスイッチを入れた。薄暗い部屋が明るくなり、綺麗な歌が流れた。歌番組、ではないようだ。

私がずいぶんと昔に見ることをやめてしまった、アニメの主題歌らしい。普段ならすぐに消してしまうか別のチャンネルに回すのがなぜかその日に限って私はそのアニメを見ていた。

ちょうど一話目だったのだが、内容は魔法少女物らしい。別段、つまらなくも面白くもなかった。しかし来週も見ようと思った。

＊

私は、初めてアニメというものに激しい感情移入をしていた。

不条理、絶望、明けない夜。

私が嫌悪する言葉ばかりが当てはまる物語だ。もし、叶うならば私とその世界に乗り込み、彼女たちを救いたいと。

他人からすれば実にバカバカしいだろう。それでも私は、忘れていた感情を取り戻したのだ。

私は戦いたかった。

「じゃあ、おいらと共に戦うかい？」

誰もいない部屋に響く聞いたこともない声。

私の隣に紅い甲冑を纏った青年が立っていた。

「おいらはバース・ヴァンガード。あんたの心の決意に応え、ここに顕現した。あんたの想いが本当ならおいらと共に戦おう」

青年は私に手を差し伸べた。私の答えは決まっている。
迷うことなく彼の手を握り返した。

「私は佐倉純也だ。よろしくな」

そして私は知った。この世界、三次元世界げんじつと隣り合うもうひとつの世界、二次元世界アニメ。神と死神、呪い。片道限りの転生。
一瞬の生と永遠の死。

衝撃的なことをいくつも聞かされたが、私の心は揺らがなかった。
私は成せねばならない。私と同じ苗字を持つ彼女を、救うのだ。
偶然が重なり、奇跡となり、やがては必然的な運命へと変わる。
私は選ばれたのだ。

「我が槍に誓いを立てる。私はこの命燃え尽きる時まで戦い続けよう。そして全ての悲しみを碎き散らす日まで、私は何も望まない」
「オツケー。じゃあ、おいらはもう行くわ。バイバイ」

私から生れ落ちた彼は、私とは正反対の性格をしていた。楽天家

で飄々とした人懐こい男だった。

もしかしたら心のどこかで私は彼のようになりたいと思っていたのかもしれない。

「いいな、決して負けるんじゃないぞ」

「分かってるって。大船に乗ったつもりでいなよ。おいらは、強いから」

バースの姿が徐々に薄れていった。幼きころの私が憧れていた世界へと渡っていくのだ。

そして、私はその世界で戦い続ける一人の男と出会った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6048t/>

魔法少女まどか☆マギカ 宇宙の真理に反逆せし戦士

2012年1月12日17時50分発行